故宮叢書

武家名目抄

文書部

卷廿二

192
55

武家名目抄稿二十二目次

第百六十五冊文書部八

書札 二三四五
書狀 二三四六
使札 二三四七
消息 二三四七
堅文 二三四八
立封 二三四九
捻文 二三四九
腰文 二三四九
結狀 二三五〇
挾狀 二三五〇
禮紙 二三五〇
禮紙狀 二三五一
折紙 二三五一
奉行ノ折紙 二三五五
折紙狀 二三五五
切紙 二三五七
表書 二三五八
裏書 二三五八

第百六十六冊文書部九

手書 二三五九
直札 二三五九
付狀 二三六一
披露狀 二三六一
副狀 二三六二
內狀 二三六三
案內狀 二三六三
剋付狀 二三六三
弔狀 二三六三
御請 二三六四
請文 二三六四
領狀請文 二三六七
返事 二三六七

第百六十七冊文書部十

奏書 二三六九
奏覽狀 二三七〇
上覽狀 二三七一
解文 二三七一

明治
37 1 7
交內

武家名目抄稿二十二目次

第百六十五冊文書部八

書札　二三四五
書狀　二三四六
使札　二三四七
消息　二三四七
陪文　二三四八
立封　二三四九
捻文　二三四九
腰文　二三四九
結狀　二三五〇
挾狀　二三五〇
禮紙　二三五〇
禮紙狀　二三五一
折紙　二三五一
奉行ノ折紙　二三五五
折紙狀　二三五五
切紙　二三五七
表書　二三五八
裏書　二三五八

第百六十六冊文書部九

手書　二三五九
直札　二三五九
付狀　二三六一
披露狀　二三六一
副狀　二三六二、
內狀　二三六三
案內狀　二三六三
剋付狀　二三六三
弔狀　二三六三
御請　二三六四
請文　二三六四
領狀請文　二三六七
返事　二三六七

明治
37 1 7
交內

第百六十七冊文書部十

奏書　二三六九
奏覽狀　二三七〇
上覽狀　二三七一
解文　二三七一

送文 二三七二
送狀 二三七三
注進狀 二三七四
款狀 二三七四
和字款狀 二三七四
申狀 二三七四

第百六十八冊文書部十一

日記 二三七七
小日記 二三七七
日々記 二三七七
競馬記 二三七七
弓日記 二三七八
射手風記 二三七八
射手記 二三七九
的日記 二三八〇
御所的日記 二三八一
弓場始日記 二三八一
百手日記 二三八一
草鹿日記 二三八二
挾物日記 二三八二
丸物日記 二三八二
犬追物日記 犬追物手組 二三八二
笠懸日記 二三八八

第百六十九冊文書部十二

目錄 二三九〇
總目錄 二三九五
奏事目錄 二三九五
寄進目錄 二三九六
進物目錄 二三九七
進上目錄 二四〇二
註文 二四〇二
貢馬注文 二四〇二
御服月充注文 二四〇二
引付注文 二四〇三
進物注文 二四〇三
進上注文 二四〇五
一獻注文 二四〇五
具足注文 二四〇五

第百七十冊文書部十三

起請文 二四〇七

起請 二四一〇
連署起請 二四一〇
連判起請 二四一二
七枚起請 二四一三
一紙誓言 二四一四
誓文 二四一四
誓狀 二四一五
誓文狀 二四一五
誓紙 書闕 二四一六
誓書 二四一七
告文 二四一七
神文 二四一七
湯起請文 二四一八
牛王 二四一八
起請失篇目 二四一九

第百七十一冊文書部十四

軍法 二四二〇
陣觸 二四二〇
陣札 二四二一
合戰記錄 二四二一
合戰日記 二四二一
合戰繪圖 二四二二
武略狀 二四二二
計策文 二四二二
高名帳 二四二二
軍忠狀 二四二二
手負著到 二四二三
頸注文 二四二四
首帳 二四二六
印帳 二四三〇
印目錄 二四三〇
首札 二四三〇
矢文 二四三一
謀書 二四三三
落書 二四三四

第百七十二冊文書部十五

高札 二四三五
大札 二四三六
制札 二四三七
下知札 二四四三

訴人引出物札　二四四三
下馬板　二四四三
下馬札　二四四三
二字札　二四四三
宿札　二四四四

武家名目抄稿第百六十五冊

文書部八

塙檢校保己一編

○書札

吾妻鏡云寶治二年後十二月廿八日辛未今日足利左馬頭入道正義與二結城上野入道日阿一相論書札禮事被レ宥二仰兩方一被レ閣レ之此事去頃就二繼入事一自二足利一遣二結城一狀云結城上野入道足利政所云々日阿得二此狀一投二返事一云足利左馬頭入道殿御返事結城政所云々僕卿禪門甚憤レ之訴二申子細一云吾是右大將家御氏族也日阿仕二後時一于レ今現存者也相互未レ及二子孫一忽忘二往事一現二奇怪一爭無二誠沙汰一哉云云仍被レ下二彼狀於日阿一之時日阿稱レ不レ能レ費二紙筆一而獻二覽一通文書一是則右大將家御時注二爲レ宗之家子侍交名一被レ載二御判一之御書也後禪門嚴問總州與二日阿一（于レ時結城七郎）可レ爲同等禮一之由分明歟右京兆（于レ時江問小四郎）爲二家子專一一也相州披二覽之一召二留件正文於箱底一染二御自筆一書二案文一被レ授二日阿一剩被レ副二送同御自筆消息狀一

鎌倉年中行事云奉公中管領書札之事（中略）管領執權ト云事每々諸人申條不レ可レ然其故者管領トハ只之時ノ詞ニ申也一段之記ニハ執權トノセラルヽ也然間管領一人ヲハ執權ト申ヘキ也

伊勢貞滿筆記云書札之事少々一書之事公家方においては弘安禮節とて被二定置一事在レ之武家の事は不レ及二其儀一被二用成一樣體在レ之云々一武家にももとは御役をもせられる方へは少會釋在レ之御晴の時六位布衣ニ參勤之時も御役せらる方々の事ハ用捨在レ之乍レ去御事かゝれ候時は參勤之例も度々在レ之一謹上書の事武家には肝要之樣申習し候我よりも上手へも又等輩へも又下手へも書レ之候也縱は上手の方へは謹上を眞字に書等輩へはさのみ眞にもなく又下手へは草字書レ之ふうせすして禮紙あるへし一無官の人は名字計に書レ之敬かたへは名字の上にその氏を書候事も在レ之

家中竹馬記云三管領之書札は相互に恐々謹言進覽候裏書はなし御返札の時も進覽候とあり三職より當方へは恐々謹言進レ之候御返札には御返報とあり當方より三職へは恐惶謹言人々御中裏御名字御官御返札には貴報三職の御官計書るゝ也右馬頭殿（御供衆）同安房守殿（同前）當方と相互に恐恐謹言御宿所御返報裏書は御官計也是も同等也山名殿一

色殿細川讃岐守殿畠山殿へは御名字計書る丶也但是も御官計にても有ぬへし吉良殿も三職と同前これも吉良殿とは不レ可レ書御官計書る丶なり惣して吉良殿の御筆は三職よりも猶公儀も御賞翫なれとも書札は別儀なし今河修理大夫殿駿河守護上杉戸部越後守護是等當方へ相互に恐々謹言謹上某殿官實名如斯の時裏書有へからす是は式々の書札の調樣同等の書札也畠山修理大夫殿能登守護兩佐々木細川なとは畠山匠作なと同し事たるへし皆御一家御相伴衆なり赤松は佐々木京極と同程なるへし凡御一家の御相伴衆と其外の諸家とは替る事也然共書札は此分也

書簡故實云書札之 法樣之事第一賞翫は書やうは此旨可レ有二御披露一共可レ預二御披露一共有り恐惶謹言共書て其内の被官人にても家子にても宛所を書事子の方より父の方へも如レ此なるへし但恐惶を恐々謹言と可レ有其故は恐惶と相調候へは直に獻する心得也何も宛所肝要也某殿人々御中と云事第二也又進覽進獻なと丶書事 第三也御宿と書事第四也御宿所と書事はこのましからぬ義也然者近代如レ此のみ有レ之間不レ及二是非一候進レ之候第五むかしは等輩への書樣進レ之候に候へは 近代は至ては下手へのみ用來候打付書第六最下也うち付書とは名字官迄書て御宿所とも進レ之とも何共不レ書を申ならはし候此儀は被官人なと又は下々への儀なるへし一僧家へ之書札之事長老へは恐惶謹言共書て寺の名を書侍者御中或は侍者禪師なといかにも敬て書へし西堂分大概同前但長老なとは不レ可レ有其に可レ書を草に書侍者御中と有へきを尊床下なと丶可レ有時宜により事によるへし縱平僧たりと云共一寺の住持なとならは其かと有て賞翫も勿論也

書札袖珍寶云謹上書事近代まて謹上其行草に殿の其行草を書候之處織田信長公之時代以來端々不レ書レ之雖レ然信長公之治世之間にも謹上に殿と書者も自然在レ之所至二當時一謹上に殿をも略上下共樣を書事世間之風俗不レ及二是非一候天正の末より猶以弘安の例儀も斷絶す乍レ去今以式正の書狀には人により所により謹上に殿可レ然也上輩へも謹上殿中體へは謹上殿下輩へは謹言勿論之儀也

○書狀

吾妻鏡云養和元年三月六日壬午大中臣能親自二伊勢國一通二書狀於中八維平之許一是去正月十九日號二熊野山洪增之從類一濫二入伊雜宮一鑽二破御殿一犯二用神寶一之間爲二一禰宜成長神主沙汰一奉レ遷二御體於內宮一之處同廿六日件輩亦襲二來山田字治兩鄉一燒二失人屋一奪二取資財一訖天照大神鎮座以降千百餘歲皇御孫尊垂跡之後六百餘年未レ有二如レ此例一當時源家再興之世也尤可レ有二謹慎之儀一者維平覽二此狀一湛增候二御方一有二此企一殊慥聞食爲二敬神一可レ有二御立願一之旨被二報仰一云々

沙汰未練書云書狀トハ折紙ニ書小申狀事也訴狀ト書狀書樣各別也

又云書狀書樣事體二沙汰之色目一諸事可レ書レ之又以二書狀一トモ可レ書也

何國何所某申何々事下二觸本解狀一可レ遣二陳狀一と被レ存候此旨可レ有二御披露一候哉恐惶謹言

何月　日　　某裏判

御奉行所

書簡故實云嫁取以下祝言之書狀にはかへりてんを一番に書間敷也如レ此なと丶一字かへるは不レ苦故實也一名字計宛所に認候事其惣領之方へは尤敬〻〻又官受領計も勿論にて候けつしも仁體ならは 上に書樣に書合られ可レ然候也

又云同輩へ之書狀樣之事

先日者預二御使一候殊更重寶贈給於二于今一恐入存候將亦鴨五翦一折鯉一鹽引三尺貝鮑一折令レ進レ之候心事以二面上一可二申承一候恐々謹言

月日　　名字官　名乘判

凡此趣也但當時人々御中と書歟眞草行心得可レ然候又捻文之時は日付判形ありとも奥に名を書事は無レ之候也能々可二心得一惣別捻ならはかしくと有て判形に不レ官候さりなから時宜により事によりて日付判形有レ之事勿論候能々可レ有二分別一又朝臣とかく時一位二位三位何も藤原朝臣定方と有へし此書樣を氏の朝臣と云也四位藤原定方朝臣とかく也是を名の朝臣と云也いつれも此趣なり五位相當たるへき人は朝臣かき勿論なり乍レ去事に可レ依口傳

畠山記云故キ人トテハ尾張守政長計殘リ玉フ此人本ヨリ一方ノ棟梁ナリ位モ從三位ニ叙シ再ヒ管領ニ成リケレハ三管領四職御供衆ニ至ルマテカノ下風ニ立チテ書狀ノ文章ハ四職ノ方ヘハ殿トハカリニテ被官ノトモカラノ如シ

○使札

大友興廢記云小原鑑元御誅罰の條高森使札を內通有其狀に云態以二使札一令二呈上一候云々

○消息

吾妻鏡云文治二年四月卅日丁丑當時京中嗷々更不二相鎭一被レ獻二御消息於內府已下議奏公卿等一是抽二競戰之誠一可下令レ與二行善政一給上由也

又云同三年八月十九日丁亥洛中狼藉事連々被下院宣之間且尋問子細且爲相鎭之千葉介常胤下河邊庄司行平可上洛之旨被仰付訖各申領狀之間今日被召御前有御餞別之儀又賜御馬承條々仰云々

御消息云

洛中群盜蜂起并散在武士狼藉事度々被仰下候之趣殊驚歎思給候時政下向之時東國武士少々差置候訖其外も或爲兵粮米沙汰或爲大番勤仕武士等在京事多候歟彼輩不鎭狼藉還疲計略若如此事をもや企候覽人口難塞然者偏可爲頼朝恥辱候當時親能廣元雖在京候元自非武器候只閑院殿修造事致沙汰計也如此事全不可爲彼等不覺候歟仍常胤行平を差進候於東國有勢者候之相憑勇士候也自餘事は知候はす於武士等中狼藉は此兩人輙可相鎭候見器量計進候能々可被仰付候條々以別紙言上候且此趣可令洩披露給候頼朝恐々謹言

八月十九日　頼朝

進上　帥中納言殿

又云同四年七月十三日丁未帥中納言經房卿奉書到來隱岐守仲國申宮內權大輔重頼稱地頭押領所々之由云々仍今日被申御請隱岐守仲國申重頼押領事尤以不便候以消息令下知重頼畢者

隱岐國司仲國申狀就之此事自院被仰下て候也如聞食は濫行不便之由候也然者於今者件所をはいかてか可令知行給哉抑其中村別府事こそ奉たりとも不覺悟候へ何樣次第に候也仍以執達如件

七月十三日　御判

宮內大輔殿

簡禮記云奉禁裏仙院狀ノ事從公方家被獻御消息ニハ宜預披露トモ宜預叡聞トモ宜預奏達トモ有テ候也(中略)扨又御供衆ナトハ發端ニ畏而言上ト書出シ留端ノ所ニ此等趣之宜預御奏達候某恐惶謹言トモ書充所ハ如常可調之日ノ下ニハ官途實名相應ニ可有之

○竪文

常照愚草云三職及御相伴衆共に立文たるへし三職の御間は何も進覽又進之互此分畠山左衛門督政長より細川典厩政國朝臣への狀赤津加賀守以平次正文被見候つるは進覽と在之右馬頭殿は御供衆中にても別而の儀たる如此候也事之次に沙汰ありしは武州管領より三寶院門跡へ書狀に進之云々左樣には有ましき事なから其頃は進之と認事無禮の儀にて無之其證據あまた在之至近代者人々御中とあり當職の御時は每事可相替候也赤松以下よりは當職によらす人々御中也恐惶也又恐々の時も在之是片敬の儀也可心得事也又山名一色互進之候又進覽候互之事也細讃畠修同前大內赤松京極なとへは大略互謹上書也

大館常興記云天文七年九月八日早朝に日行事豆州來臨就反錢之儀右京兆へ可被成御內書只今常興可致調進候由被仰出之御案文被出之仍豆州待せ申て則書進上申也

城州段錢之儀無其謂候殊諸奉公之輩知行分尤以不可然所詮堅可停止旨可被下知候猶晴廣高助可申候也

九月八日

右京大夫とのへ

右御料紙引合御立文也

甲陽軍鑑末書云晴信公惣軍は其日未尅まて備を立合戰を待て申尅ニ陣屋へ入景虎十二日卯尅ニ越中能登へ發向仕ル由タテ文ヲ晴信公へ進上申サル、其返事ニモ村上本地へ歸參ノ儀思止給へ左アレハ互ニ弓矢ハナキ物トイカニモユルヤカ成御返札ナレハ景虎ヨロコヒ引入ル也云々

○立封

太平記云大渡山崎等合戰條サモ小賢ケナル力者一人立封シタル文ヲ持テ赤松筑前殿ノ御陣ハイツクニテ候ソト問々走テ出來

○捻文

鎌倉年中行事云管領御一家其外ノ外樣被官中對奉公之方ニ禮儀之事(中略)不斷申通間近付親類等ニイタリテ腰文捻文等事ハ規式不可有之也

簡禮記云捻文ノ事料紙一枚タルヘシ依人眞行草ノ趣勿論ナリ日付判行有之トモ奥ニ名ヲ書事ハアルヘカラス總而捻文ハかし〳〵ト書留判アルニ及ヘカラス雖然ト依時依事可書調之殊ニ公事文ナトハ爲證文大形判アルナリ

○腰文

蜷川親元記云寛正六年四月七日甲申自備州朝倉彈正左衛門江御狀整之以荒尾治部奉之

上樣御料所尾州中島保々青山庄等事自御屋形勘料段錢被仰懸之間被成免除奉書候畢仍御代官荒尾治

部少輔方御遊行事雖二令レ申候一無下被二下知一之者上於レ國守護代方へ仕候處御奉書已前早青山庄悉令二放火一其外二三印所着亂二入屋内一雜物以下上使田上方守護代更悉以被レ押二取之一仍此條々以二奉行人一雖下被二仰出一候上幸其方御奉之事候間堅國へ被二仰付一候併申二御沙汰一可レ然候尚以既被二仰出一事候已萬一前國重而如何體時宜も出來候而は彌不レ可レ然存候之間如レ此令レ申候恐々

七日　　貞藤

朝――（御腰文也）

又云寛正六年四月廿六日癸卯山名兵部少輔殿江御狀以二備前守殿一奉レ之腰文也

就二信州西馬田庄年貢事一以二使者一令レ申二子細一候國事堅被二仰付一候也可二畏存一候此旨可レ得二御意一候恐々

四月廿六日　　貞―

高山殿

書簡故實云折紙一重にかきて表にて書留には日付之奥につかわす所の名を可レ書又裏にて書留には奥に名を書に不レ及候也但是は腰文の時之書也立方の時は裏にて書留と云とも日付之奥に名をかくへし

○結狀

書禮袖珍寶云捻文上下共に捻也結狀も同斷宛人の下に此方の名は不レ書宛所下に名乘裏に名字官可レ書レ之也口傳

○挾狀

松隣夜話云九月前橋ヨリ御歸陣ノ路次ニテ和田八介ト云浪人挾狀ヲ捧ケテ道ノ側ニアリ長尾志村之介請二取之一謙信公御目ニ掛クル

○禮紙

書簡故實云謹上書之時ハ禮紙とて有レ之如レ常不レ封して白紙一枚にて上を卷て其上を立文にする也

又云

元服同假名幷一字之儀蒙レ仰候雖二斟酌候一再々承候條任二其意一何殿同令レ相二用長之字一進レ之候御信用所レ仰候恐々謹言

天正八年　　名字官

十二月廿二日　　名乘判

名字名

御宿所

凡此趣也折紙なるへし書狀寸法之事小文之時は鳥子を半切にして相認たるか能也上包の方を短きれは書狀のたけ見にくき也可二心得一何も鳥子半切のたけを本と可二相定一

但杉原などの時は上包の方を少短切て能也禮紙之事小文之時はちいさくもする也又文之たけと同前にも有へし何も同前也禮紙は上ッ、ミ三ッの物一ッ禮紙成へし

○禮紙狀

吾妻鏡云文治二年四月卅日丁丑當時京中噪々更不二相鎭一被レ獻二御消息於内府已下議奏公卿等一是抽二競戰之誠一可下令レ與二行善政一給上由也其狀云云々

禮紙狀云

追啓

如レ此之次第自二攝政家一令二觸申一歟朝之要樞也必可下竭二忠節一給上候也

○折紙

吾妻鏡云文治二年三月廿七日乙巳北條殿已欲レ進二發關東一仍爲レ警二衛洛中一撰二定勇士一被レ差二置之一其交名注二載折紙一所レ付二進帥中納言一也

注進京留人々

合

平六謙伏時定　　あつさの新大夫（下略）

巳上卅五人

三月廿七日　　平判

又云建保元年九月十二日己酉於二幕府一有二駒御覽一云々諸人群參及二千人一經二御覽一之後可レ賜二人々一由被二仰出一相州承二其人數一於二當座一令二右筆注一折紙一給

一疋鹿毛今日護持僧

一疋黒毛出雲守

一疋栗毛大和前司

一疋鴾毛三條藏人

一疋黒柏毛近江前司

一疋鹿毛豐前兵衛

一疋鴾毛宮内兵衛尉

一疋瓦毛藤九郎次郎

一疋栗毛内藤右馬允

一疋赤茶毛當番陰陽師

花營三代記云應永廿八年辛丑二月一日於二東向一出仕大名折紙進二上之一則有二御一獻一佳例也同廿九年壬寅十二月廿三日丙午有二御祉參一管領御點心料折紙持參御盃被レ下

蜷川親俊記云天文八年七月廿三日戊午東福寺春暉庵與二大同庵一相論之儀付而對二大同庵一被レ成二問狀奉書一處住持江州在國云最前於二寺家一相果候云旁爲二案内者一申入由於二諏信州一申賣候云々然者重而爲レ私可二申遣一也時日如レ此

折紙調二進之一

春暉庵衆申レ之賣買分儀最前爲二頭人一寺家衆へ相尋候處向後は當庵へ可二申入一旨候之間今度被レ成二問狀奉書一畢然於二寺家一相果候條不レ及二罷出一案内在レ之也一事兩樣次第太不レ可レ然既日限雖二馳走一今明日中は可二相拘一所詮於二同篇一は任二御法旨一對二春暉庵一可レ被レ成二御下知一候由候恐々

七月廿二日　　蓮光院

大同庵侍者中

家中竹馬記云公方樣へ御進物之折紙調樣之事（就二目當方は缺一）料紙は高檀紙也加樣の義もいさゝか聊示に不レ可レ有と云云

進上

御太刀　一腰久國

御馬　一疋（河原毛印　食目結）

以上

土岐左京大夫

御進上之目錄に當方は御名字御官を書る、也他家には名乘を二字書る、歟當方は昔より此分なり進上と書時ては名字官をも又名乘をも書間敷なり

大館常興記云天文十一年二月十六日日行事（攝津より）各へ折紙有レ之

明日十七御沙汰始メ例事可レ有二御座一候各爲二御心得一申候恐々謹言

二月十六日　　攝津守　元造判

御内談衆御中

今川大雙紙云むこ取よめ執の時の折紙は引合也さてうけさする時は二枚有紙一枚執て出す也

簡禮記云太刀折紙之次第料紙之事是モ三公以上ハ大高檀紙三位以上ハ中高檀紙四位以下六位ノ輩ハ小高檀紙平侍ハ杉原或ハ小引合也料紙一重ニテ可レ調レ之但三公以上公方家ニハ料紙一枚被レ用ナリ

進上

御太刀　一腰（行平）

御馬　一疋（鴛毛）

以上

武田大膳大夫信光

是ハ極眞ノ趣ナリ小字ニ可レ書レ之

是又賞翫ノ趣也

御太刀	一腰……
御馬	一疋……
以上	
武田大膳大夫	

是モ少賞翫ノ趣也

御太刀	一腰……
御馬	一疋……
以上	
武田大膳大夫	

是ハ大抵等閑ノ趣ナリ

御太刀	一腰……
御馬	一疋……
以上	
口傳	

片敬ト云是ナリ

御太刀	一腰……
御馬	一疋……
以上	
官途 實名	

下輩ヘノ趣ナリ

太刀	一腰
馬	一疋
以上	
實名	

最下ノ輩ハ如此

太刀	一腰
馬	一疋

右七段ノ趣ニテ尙上中下可レ推二量之一要脚折紙ノ事料紙一重三折ニスルナリ千疋萬疋ト書時萬ノ字ハ不レ可レ書假令ハ

進上	
万疋	
已上	
名字官途 名乘	

書式ノ恰合口傳アリ

右是ハ極異ノ趣也此外ハ除二進上一スヘシ進上無レ之時ハ以上モアルヘカラス總而一色ノ折紙何ニヨラス此心得也等輩以下ヘハ或除二稱號一或ハ除二官途實名一ヘシ又猿樂ナトヘ要脚ヲ遣スニハ極草字ニ千疋トモ万疋トモ書レ之也若太刀ヲ添ルニハ極草ニ太刀一腰青銅万疋ナト書レ之ヘシ

又云別儀折紙之大法三色折紙ノ事假令ハ太刀馬ニ鳥目ヲ書添ルニハ太刀馬ノ次ニ万疋千疋トハカリ可レ書レ之依二時宜一而青銅一万疋鵝眼一万疋ナトニ異名ヲ書事モ可レ有レ之書狀ニハ必ス異名ヲ書載也又小袖卷物類一色太刀馬ニ添時ハ御小袖幾重トモ白布何端トモ書レ之ナリ

進上	
御太刀	一腰
御馬	一疋
万疋	
名字官途名乘	

進上	
御太刀	一腰
御小袖	二十重
御馬	一疋
名字官途名乘	

四色折紙ノ事何ニテモアレ太刀馬ノ間ニ可レ書假令ハ

進上	
御太刀	一腰
御小袖	二重
金子	五拾兩
御馬	一疋
以上	
名字官途名乘	

如此馬ヲハ折目ヲ越テ書ナリ

五色折紙ノ事太刀ト馬ハ兩折目ヲ越テ調レ之也

進上	
御太刀	一腰行平
御弓	一張重藤
御征矢	一腰口傳
御鎧	一領口傳
御馬	一疋鬛毛
以上	
名字官途名乘	

進上	
御太刀來國光	一腰
御香合	同盃
御畫	三幅
金襴	二卷
御馬河原毛	一疋
以上	
名字官途名乘	

如レ右別儀ノ折紙ニハ三ケ條四ケ條五ケ條ヲ可レ限但依二時宜一一概ニハ不レ可二心得一ヨリ箇條數多ノ時ハ目錄ニ可レ調也口傳

萬しつけかたの次第云まき衣の事ひろふたにすへ出す也折かみそひ候はゝ折かみをさきにをきてまきぬをわかまへにおきもちて出右の方にあふきをぬき出候てさてまきぬをとりてすへわたす也うけ取かたも扇ともにうけ取右にをく次にひろふたをなをしその上に折かみをまはしてうけ取事もあり

○奉行ノ折紙

臥雲日件錄云文安三年十二月廿一日管領奉行送二十緡一以取十一月十四日千疋折紙此方之人有下可レ慶之事上則横折一紙記二賀錢數一曰二幾疋一

應仁私記云國牢人沒落仕久兆輩相觸同類寄合際令二蜂起一(中略)御敎書御奉書國遵行郡代ノ渡狀奉行ノ折紙等分明也

○折紙狀

吾妻鏡文治元年十二月六日乙卯院奏折紙狀云

可レ有二御沙汰一事

一議奏公卿

右大臣可レ被レ下二内覽一宣旨

内大臣

權大納言實房卿　宗家卿

忠親卿　權中納言實家卿

通親卿　經房卿

參議雅長卿　兼光卿

已上卿相朝務之間先始レ自二神祇一次至二于佛道一依二彼議奏一可レ被二計行一也

一攝錄事

可レ被レ下二内覽一　宣旨於右大臣一也但於二氏長者一本人不レ可レ有二相違一也

一職事事

光長朝臣　兼忠朝臣

二人相並可レ被レ補歟光雅朝臣被レ下二追討宣旨一畢天下草創之時不吉之職事也早可レ被二停廢一也

一院御厩別當

朝方卿奉行之職也可レ被二還補一歟

一大藏卿

宗賴朝臣可レ被レ任レ之

一辨官事

親經可レ被二採用一歟

一右馬頭
侍従公佐可レ被レ任レ之
一左大史
日向守廣房在二任國一可レ被レ任レ之隆職成二追討宣旨一天下草創之時禁忌可レ候也仍可レ被二停廢一
一國々事
伊豫　右大臣御沙汰月輪殿
越前　内大臣御沙汰
石見　宗家卿可レ給也
越中　光隆卿同
美作　實家卿同
因幡　通親卿同
近江　雅長卿同
和泉　光長朝臣同
陸奥　兼忠朝臣同
頼朝欲二申給一其故者云二國司一云二國人一同二意行家義經謀叛一仍爲レ令レ尋二沙汰其黨類一欲レ令レ知二行國務一也
一闕官事
撰二定器量一可レ被二採用一也

十二月六日　頼朝在判

又云文治五年九月十八日乙亥差二飛脚一被レ奉二消息於京都一折紙狀云
降人本吉冠者高衡秀衡法師四男
比爪俊衡法師男三人　大田冠者師衡
次郎兼衡　河北冠者忠衡
比爪五郎秀衡　男新田冠者經衡
件輩不レ漏二一人一召調候事者今月十八日也仍所レ令二上達一候也
季瓊日録云永享七年十一月九日勝定院殿御代地藏厨子銀鎖召二以譽阿一被レ預二置彌勒脇士並大日脇士四方佛之位一以譽阿被レ許書師民部以二折紙一記レ之云々
蜷川親俊記云文明八年二月廿四日御成朝御酒肴有親元御前へ召いたされ御酒被レ下御所直にかまほこを被レ下候面目無二比類一仍御太刀持御馬進上調二折紙一藤宰相殿御披露
蜷川記云太刀折紙を人に渡候樣奏者に先申へく事を申其時は右の手につかを前へなし帶取を右の方へなして膝の上に可レ持又さして可レ申事なくは太刀の石突をつきて被レ申也扨折紙をは左の手に折たる間を先へなして可レ持渡す時は兩の手にて折紙をひろけて奏者にみせて可レ渡わたし樣折紙を下太刀を上に足間の所を折紙の上に置て可レ渡又太刀計なれは左の手をつかにそへて可レ渡なり
今川大雙紙云太刀を主人に披露申す次第の事若折紙あれは太刀にそへて主人の左の脇に御はき候やうに置也惣して太刀折紙は八文字成に渡すへし若風吹時は太刀に敷也
賀越闘諍記云御成次第條義昭將軍朝倉屋形へ御成（中略）其後朝倉内衆御馬太刀ニテ御禮申次第前波魚住櫻井青木詫美山崎此衆イツレモ十二間ノサイノ内ニテ御禮申上ル也御太刀折紙大館持テ御前へ進上
新撰信長記云義昭公ハ越前一狀谷ヲ御立有テ其夜ハ同國今庄ニ御泊被レ成（中略）淺井備前守小谷ヨリ御迎ニ被レ參御供シテ小谷へ入奉休懐寺へ御座ヲウツシ父下野守殿モ御禮被二申上一種々捧物有ケレハ淺井ノ一門家老トモマテ不レ殘太刀折紙ニテ御禮申上誠ニ美々敷分野也
書禮袖珍寶云料紙硯置樣事硯の下に折紙を置紙の切目を右にして筆は大形一本可レ然か自然は一對も可レ有レ之歟口傳
板坂卜齋慶長記云治部少輔佐和山へ被レ退候以後家康公伏見城より御使に柴田左近を被レ遣候佐和山へ御使に參着申を聞左近に似合候家中之者の家へおちつき行水なといたし候後治部少輔被レ來御太儀にて御出と被レ申辨當をもたせ參候とて振舞を出し被レ申候城より辨當をもたせらるゝ之由後刻御出候へ可二申談一と被レ申其後風呂もたかせ候よしよひに使給候よき亭主なり無二殘所一候由翌日左近者日之出に佐和山を出候半と致候所へ治部少輔暇乞に被レ來對談有治部少輔罷歸候とて表へ被レ出候を門送りいたし候時是はつゝら也のりかけに御つけさせ候へとしふかみつゝみ青きほそひきにて念を入かけたるを給候とまりへつきあけさせ見けれは念入たる小袖五ッよきこしらへの脇指一ッあり百貫と折紙あり此頃は百貫の脇指も稀小袖五ッなと音信もなき時節なり其頃の百貫當時千貫よりもましめなるへし本阿彌折紙添る事ことの外稀なり
○切紙
應仁私記云軍忠粉骨軍旅勵二忠節一名譽高名規模無二比類一就二其褒美一受領官途勳功意趣切紙御感狀火打袋恩賞無二所持一无人國中軍勢着到勢揃勇士武士群集者如二稻麻竹葦一

快元僧都記云天文三年六月十六日從二盛昌一太田武庫ニ切紙有レ之番役等殿重奉行ニ被二觸聞一可レ被レ爲レ持之由也

○表書

吾妻鏡云文治五年八月廿六日癸丑日出之程匹夫一人推二參御旅館邊一投二入一封狀一逐電不レ知二其行方一諸人怪レ之召覽レ之處表書云進上鎌倉殿侍所泰衡敬白云々

○裏書

伊勢貞滿筆記云書札之事名字うら書に書たまふ人々或細川又は畠山なと、はかりうら書に書事可レ有二用捨一云々是謹上書のうら書の時の事なるへし

出陣聞書云朝倉入道狀に裏書にて名を書とては祖父元光へ此分なりしを是は有ましき事の由沙汰有しと也

室町殿日記云僧錦の條上京今出川に大泉房と云客僧伊勢講中之掛錠方により借用し何れへも返辨せさりしかは撿斷所へ訴訟申によつて裏書をいたされける

伊勢講之代物借主未二事濟一於二德政一令二難澁一之よし太不レ可レ然所詮先例のことく不レ可レ有二改動一之上者自レ是可レ加二催促一候之條得二其意一可レ有レ之者也仍如レ件

十一月廿九日　貞親

長高

上京今出川大泉房大夫慶存所へ

大館常興記云天文十年十一月十七日宮內卿殿御局より預二御使一鳥物とて諸家書狀うら書の事一書にて尋承候間存分則一紙にしるし進入申也

甲陽軍鑑云景虎上洛ありて公方光源院義輝公へ景虎御禮申上猶以管領職を申請然も輝と云字を被レ下其上網代輿文の裏書公方樣よりゆるされ候て上杉輝虎と此頃は申候

謙信家記云景虎公關東勢被催小田原發向條景虎ハ隼リ給ヘトモ何事モ思ニ不レ叶シテ上州平井へ引返シ五月上旬ニ漸々越後へ歸陣有テ其ヨリ都へ上洛シ公方へ御禮申彌官領ニ職シ殊ニ輝ノ字ヲ被レ下網代輿文ノ裏書マテユルサレ合テ六月下旬越後へ歸陣ナリ

武家名目抄稿第百六十六冊

塙檢校保己一編

文書部九

○手書

松隣夜話云和田八助ト云浪人挾狀ヲ捧ケ謙信公御目ニ掛クル其紙中(中略)多年七組ノ衆マテ訴訟仕候ヘトモ御取立依レ無レ之及二直達一候トソ書タリケル謙信公御覽セラレ志村介ヲ以テ此者召出候ヘト七組ノ衆へ被二仰付一去レトモ七組衆何レモ合點不レ申宜カルマシク由申上ル依テ謙信サラハ手書ヲ副テ小田原へ差越可レ被レ成トテ金子ヲ二百兩程被レ下御手書ヲ給リ北條氏康へ差越玉フ

○直札

新田由良家傳記云

此御僧に御狀御御返事雖二令レ申候一於二若州一御使僧參會申候處大左へ從二貴所一御札禮答趣可レ爲二如何一候哉富森ニ住候而下可レ申由候へとも富森大左爲レ使越前へ差下候間爲二拙者一存分令レ申候御直札可レ爲二勿論一存候恐々謹言として人々御中と可レ有レ之哉但直札上に而先

先樣體可レ有レ之間可レ爲二御分別一候直札上て少々上下は努々左樣之儀は大左申間敷候但相違之儀候はゝ大左存分可レ被レ申候左樣之儀更心にかけさる人にて候間いかやうにも直札の上に而御分別に而被二相調一可レ然候新田殿大館殿儀に候間如何樣被レ調候而も不レ苦候雖レ然事外相違之儀候はゝ自然無二御隔心一御存分可レ被レ仰候其上に而互御合點行可レ申候さやうに候而努々不興には成申間敷候惣別書狀之調樣先年豫州被レ調御下候哉之由及レ承候無二御座一候哉猶々此御僧を於二若州一參會其方之御物語共申承彌御床敷存計に候又愛宕山客僧下向之間以二書狀一申候キ鐵牧儀某以下具申候キ御用之儀候は可レ蒙レ仰候神々々不レ可レ存二疎略一候返々不斷御床敷存候先年以來至二于今一牢々仕候間諸事不自由過二御推量一能下得二御扶助一度候猶期二後信一候恐々謹言

七月十三日　進士修理亮晴舍在判

横瀨雅樂助殿

御宿所

猶々大左へ御札樣體新田殿與二大館殿一御間之儀御分別候而直札之上に而いかやうにも〳〵不レ可レ過二御思慮一

候縱少も自然御不足候而も不レ苦候猶〻貴所就二御器用一彌御威勢之由其聞候間珍重候於二京都一相應之御用候は、馳走可レ申候乍レ憚各江御傳言通申度候

三好記云天文十八年正月佐々木定頼贈二岸和田兵衛大夫一狀就二三好筑前守謀叛一松浦肥前守一味之條此時可レ被レ致二忠節一之旨從二大夫殿一以二御直札一被レ仰二元常一御同前申候根來寺被二相談一別而粉骨可レ爲二肝要一候云々

書簡故實云進上と書事父主君師匠に對して書く但進上とかけは直札の心たるによりて家司の名を書事常之儀也貴人へ進上する狀はいかにも字を眞に文字を御のみ大に書間敷候殊我名乘をかれ筆にて草に書事第一の尾籠也當時態名乘を見へぬやうに書まきらかす人有故實なし寂藉第一也公家門跡なとは日下に判形計をせられて名乘はなし是は草名とて名乘を草にかゝる、心也又名乘計をかゝれて判形はなきも有レ之いかやうにも武家に有こと〻に名乘をかきて判形をせらるゝは公家門跡にはなき事也然に武家の輩名乘を草に書て公家門跡の草名のまねをするに似たりされは尾籠の事といましむるなり又主人へ之申狀に親を親にて候ものと不レ可レ書レ之子にて候ものとも候は名字可レ然なり口上にても此分也

又云大中納言宰相江之狀之事付四品諸大夫

尊書忝遂二拜見一候被二仰聞一趣委奉レ得二其意一候聊不レ可二疎略存一候可レ得二御意一候恐惶謹言

月日　名字官　名乘判

何大納言殿　尊報

人々御中

如レ右月より一字上て宛所を書へし大納言は人により披露もよく〻〻惣別は自二諸大夫一直札に〻〻へは殊禮とて互の人からにより候ていか樣にもはからひ御さた尤候此方は大方諸大夫の心得也

又云大中納言宰相江之狀之事付四品諸大夫

尊書殊御小袖拜領誠以忝仕合御座候何篇令二參上一御禮可二申入一候猶御使可レ被二申上一候可レ得二御意一候恐惶謹言

月日　名字官　名乘判

何黃門　尊報

又は當時ならは名乘とかきてもよく〻〻向々へを此方より書候へは賞翫之事に候宰相も右同前也人により時により少心得有又大納言にて大將をかけたる人是は規模にて任大將人其儀大略同二大臣一と見え候當時大納言中納言は公方樣御公達或は御連枝なる間直札之儀かた〳〵は、かり可レ有レ之其家々によるへし

又云公家方之事攝家清花なとへは其所之殿上人にても諸大夫にても又は侍にても伺公の人の宛て可レ書直札にては不レ可レ有レ之也縱淺官たりとも高家を賞翫之故實也其外之旁は或は人々御中或は進覽なと、可レ有但例式の公家衆たり共大人にならせ給ひ候は、直札は斟酌あるへし次に常々公家中にても未五位六位の方なとへは人々御中なと、なく共進覽なと、も可レ然候はん哉云々時宜によるへし

○付狀

伊勢貞滿筆記云一付狀二恐惶謹言と書事常に在レ之賞翫のやうには候へ共直札二准レ之就二此儀一種々樣體在レ之醫藥陰陽官外記なとへは同樣の心得云々清外記なとは少かとある趣のやうに承候しかやうの人々も官位にもよるへし社家方之輩大略同前然吉田はかとあるよしを先年も其沙汰候し也如レ此衆も時にしたかひ又はやうにもよるへし書狀給候人こなたを賞翫候へは此方よりも賞翫に認事法の外の故實也云々惣別公家方にては御宿所なと、被レ書事は無レ之相互に打付書のやうに被レ調候也所詮留所に子細在事也云々諸大夫衆事大略伺候所諸大夫かたよりは醫陰官外記をは少下手二被レ存候か其段自二先々一相互に意趣在レ之云々女房衆へは我名をは上の字をかなに下をまなに可レ書レ之又法體になり候ては上の字まな下をかなに書なり

常照愚草云御供衆より三職へは可レ爲二付狀一又山名一色殿なとへは人々御中又は謹上たるへし如レ此本來正理を心得候て時々之樣體を被二見合一候儀古今通法なり云云

○披露狀

常照愚草云進上之披露狀に謹上書進上書にも調事勿論なり進上を除事も常之儀也二三月に進上候も正月の日付可レ然候也但又所事にもよるへし八朔の日付も同前

大館常興記云天文十年十一月四日御太刀一腰持御馬一疋爲二八朔御禮一國司北畠殿より進上之披露狀日付は九月廿三日也

書簡故實云光源院殿樣へ自二當家一奉書札調樣

爲二御代替御禮一御太刀一腰盛光御馬一疋河原毛進上仕候
此等之趣宜レ預二御披露一候恐惶謹言
七月五日　名字官　長時判
伊勢守殿（是ハ内封之披露狀也書樣引亂て五行也月日のけやう三寸斗月日ト名書之間二寸餘）

又云女中方へ狀之事
一筆申り〳〵若きみさま御くはししん上申たく候しかるへきやうに御ひろうたのみ入り〳〵もし
三月二日　まつもとさこん大夫　しけ長判
御つほねにて
あこゝ
申給へ

凡此趣女中方之事第一賞翫にはさとの名をかくを上とす又はひろう狀勿論也いんきんなるかたへは判形可レ有レ之候名乘事上字をかなに下字を眞名にかくへし法體はうへを字に下をかなにかくへし又二字なからかなにもかくへし

○副狀

蜷川親元記云寛正六年三月十五日壬戌小野寺隱岐守舊冬御馬進上之御返事御書井御副狀
公方樣御馬三疋月毛黑鹿毛栗毛進上之旨卽令二披露一畢仍御書井御劔一腰吉良段子一端白御盆一枚地紅桂袋被レ下レ之候御祝着察存候次馬一疋黑栗毛印笹目結賜候尤以恐悦之至候仍太刀一腰持香合一金絲盆一枚堆紅進レ之候併御禮計候
十一月廿八日　伊一
謹上小野寺

以上此色々以二宗茂一寺町三郎左衞門方江渡二遣之一

又云同年六月二日戊寅上相戸部御副狀御判出候
就レ被二仰下一上進之御馬二疋月毛青毛去十二月廿日參着候卽令二披露一畢早々御進上目出候仍被レ下二御書一候猶以已前被二仰下一分者至大長御馬事候涯分早々被二尋進一候者可レ然候巨細猶加藤方可レ被レ申候次馬一疋月毛拜領祝着之至候恐々
五廿七　伊一
謹上　上相民部大輔へ

澤巽阿彌覺書云むかしの御內書同副狀案引付
連々被二仰出一候朝倉彈正左衞門尉事此時馳二參御方一致二別忠一候樣早々計略肝要候也（書ヒ）
九月卅日　御判
伊勢とのへ
參二御方一致二忠節一者可レ有二御褒美一由被二仰出一候恐々

謹言
九月卅日　伊勢守貞親
朝倉彈正左衞門尉殿

安土日記云公方樣內々御謀叛思召之由無二其隱一候子細ハ非分ノ御働モ無二御勿體一之旨去年十七ケ條御異見之次第條々（中略）諸國ヘ御內書ヲ被レ遣馬其外御所望之體外聞如何候之間被レ加二御遠慮一最存候但被二仰遣一候ハテ不レ叶子細者信長ニ被二仰聞一添狀可レ仕之旨兼而申上被レ成二其御心得一之由候ツレトモ今ハサモ無二御座一遠國ヘ被レ成二御內書一御用被レ仰之儀最前ト首尾相違候何方ニモ可レ然馬ナト御耳ニ入候ハヽ信長馳走申進上可レ仕之由申由候キ左樣ニハ候ハテ密々直ニ被二仰遣一儀不レ可レ然存候

大館常興記云天文九年二月十日佐方より承レ之大友五郎御太刀一腰御馬一疋黃金卅兩進上仕につきて被レ成二御內書一御太刀一振被レ下レ之也仍副狀案文事申聞則調二遣之一也將又同若公樣ヘ御太刀段子三端進二上之一若公樣ヘハ始御禮云々是又被レ成二御內書一大御所樣より御太刀被レ下レ之副狀案文事同承之間則調二進之一何も晴光卿申由御內書御文言也御目付二月三日也

○內狀

太平記云新田義兵衞石堂四郎入道ハ近年高倉殿ニ屬シテ薩埵山ノ合戰ニ打負テ無二甲斐一命計ヲ被レ助鎌倉ニ有ケルカ哀謀叛ヲ起ス人ノアレカシ與力セント思ヒケル處ニ新田左兵衞佐同少將ノ許ヨリ內狀ヲ通シテ事ノ由ヲ知セタリケレハ流レニ棹ト悅テ聽テ同心シテケリ

鎌倉年中行事云奉行中對二外樣一書札之事縱雖レ爲二仰詞一之書札ト限ニ千葉介方一宿所書可レ然也自餘之外樣ヘハ仰詞ナラハ名字官途ヲ直ニ書ヘシ然ハ縱別テ所用雖レ無レ之內狀ヲ一通御宿書ニテ可レ相添一也自二外樣一奉公宿老以下之書札ハ奉レ限二吉良殿計一御知行分等其外之時宜公方樣ヘ御申之時モ內封也

○案內狀

蜷川親俊記云天文八年三月廿一日己丑昨日內談不レ有之由執事代より案內狀アリ

○剋付狀

書禮袖珍寶云剋付狀之事去十五日巳刻之御狀今廿日午刻參着拜見等と可レ書表包糊付封目の下ニ三月十五日巳刻なと可レ書也口傳

○弔狀

書簡故實云弔狀之事不レ封事定たる法にはあらす唯仍を切候はて其儘卷て上包したる可レ然候と也何事にても重言を不レ可レ書端書も無レ之

○御請

書禮袖珍實云御內書幷鷹拜領御請之事

被レ成二下御內書一殊更御鷹拜領重疊忝謹而致二頂戴一早早罷下可二申上一候條御次而之剡御前宜樣奉レ賴候恐々謹言

月　日　　名字官　名乘判

殿

○請文

吾妻鏡云文治二年十一月廿四日丁卯去月八日宣旨同九日院宣去頃到來今日被レ奉レ書二御請文一云々御請文云

跪請二　院宣一事

右所レ被二仰下一諸國庄公被レ補二平氏追伐跡一之地頭等稱二勳功之賞一宛二行加徵課役一張二行檢斷一妨二總領地本一之由事官符謹拜見仕候了現在謀叛人跡之外者可レ令レ停二止地頭一綽之旨面々加二下知一候者也早仰二國司領一可レ有二御禁斷一候歟此上致二張行一之輩候者注二給交名一加二炳誡一候以二此旨一可下令二言上一給上候院宣所レ請如レ件

賴朝頓首恐惶謹言

文治二年十一月廿四日　　源賴朝請文

又云同三年三月二日甲辰越中國吉岡庄地頭成佐不法等相累之間早可レ令二改替一之由經房卿奉書到來仍則被レ獻二御請文一

去月十九日御敎書今月二日到來謹令二拜見一候畢越中國吉岡庄地頭成佐事任二御定一早可レ令二改定一候但彼庄未二復本一之間御年貢不二式數一之由成佐申レ之候重相尋候而可レ令レ改二他人一候也以二此旨一可下令二洩達一給上候賴朝恐恐謹言

三月二日

又云文治五年四月廿一日癸巳出雲國目代兵衞尉政綱事被レ進二院宣御請文一所レ被レ染二自筆一也云々

四月八日のみけうそ同十九日かしこまりてはいけんつかうまつり候ぬまさつなかこと申上候ぬいかてそうもん候はさらんことを君に申あけ候てあやまち候はさらん人をうたへ候事は候へきたゝしともかたのきやうくにをめされ候はんこと追々ふひんにおもひ給候しかともきつきのやしろの御せんくうとけられ候はさらんもふひんに見給候申たる事あらはれ候ぬれはいかてかおそれはちおもふこと候はんそれにてよろついたり候ぬくにをはもとのことくさたしてまさつなならぬもくたいをめしつかふへきよしの御定の候はんとおもひ給候かつはきみに御大事をとけられ候はさらんきはめたるおそれに候いまはいかてかきみをはちまいらせす候はんよくくおほせふくめられ候ておもきとかは候ましきに候ためのり下向つかふまつりたるよしうけ給候ひころのいきとをりをさんし候ぬ

四月廿一日　　賴朝

おりふし心なきやうに候おそれは候しか共申上す候もなかくく又おそれに候かやうに申あけさせ給て候君に申あけ候はゝたかき人をもいやしきをもわたくしをうらみ候事は候はす候いかに候ともことをあやまつことは候ましきに候へくは候はす何事をも申上へく候まくく心へ存候はぬに候しけくく申上候おそれ憚りにこそ候へ

又云建久元年二月廿二日丁酉造伊勢大神宮役夫工米事諸國地頭等有二未濟一之旨去年十二月帥中納言奉書到着之間日者被レ經二沙汰一今日被レ奉二御請文一云々盛時染レ筆云云

去年極月十二日御敎書同廿四日到來役夫工米間事權右中辨親經奉書謹拜見畢知行國々者先日任下被二仰下一候旨上已令レ致二沙汰一候也其中下總國以下被二仰下一旨上早可レ加二下知一候也抑御免庄々就二先度仰一令レ除候之處信濃越後上總等國々可レ令二加免一之由親能下向之度被二仰下一て候へハ追文令レ除候畢早可レ令二下知一候也且被二宣下一候けれは爭令二對捍一候哉此中地頭輩不分明之所所も相交候早可二尋沙汰仕一候也宇都宮熱田宮八幡宮御領所役事尤可レ然候可レ令二進濟一之由被二仰下一候上重可レ令二下知一候也凡背下被二仰下一之旨上致二對捍一候はん輩は重て猶注文にて可レ令二下知一候也朝家御大事に候之上廿箇年一度之役に候旁不レ可レ致二懈怠一候也此事のみに候はす背二宣下旨一候はむ輩はいかにも任レ法て可レ有二御沙汰一且又隨二御定一抑て可二禁沙汰一候也背二君御定一候はむ者をは家人にて候とてもいかてか不レ被レ行二其罪一候哉賴朝身上にて候とても不當候はむ時は御勘當も可レ蒙事にてこそ候へまして家人輩事不レ及左右一候事也遠々之間承及候事は遐遐之事候又不レ承候事は多候其間進退恐思給候者也以二此旨一可レ然之樣可レ令二披露一候也賴朝謹言

二月廿二日　　頼朝

進上　帥中納言殿

又云嘉禎元年八月十八日舞人多好氏在二鎌倉一之處可レ令二歸洛一之旨自二殿下一被レ申之間所二差進一也則將軍家染二御自筆一令レ申二御請文一給又御馬一匹白鹿毛賜二好氏一兩三年一度放生會之時可二參仕一之由以二木工權頭一被レ仰二含好氏一云々

沙汰未練書云請文書樣事

何國何所某申何所所領田畠等事何月何日御敕書案トモ又御奉書案トモ並何月日御使催促狀トモ又御施行トモ何月何日到來訖トモ畏トモ下預訖トモ拜見仕候了トモ抑何々事任下被二仰下一之旨上以二參上一トモ以二代官一トモ可レ令二言上一候以二此旨一トモ以二此趣一トモ可レ有二洩御披露一候某トモ但某字書（脱文ニハ年號不書也但故書者也）通不レ書也恐惶謹言

何月何日　　（コノナニカシハ字ノ誤）某請文裏判

蜷川親元記云文明五年九月十四日壬寅賀茂永清院貴殿御連枝

御領事對レ森貞久連々雖レ有二御相論一依二御和談一自他請文有レ之賀茂永清院領下地三段久田竹殿不見野等事連々雖レ有二訴陳申子細一以二和睦之儀一此内壹段不見野被二割分一候上者於二多所々一向後可レ停二止訴訟一至二壹段一者永代不レ可レ被レ成二御綸一候也仍爲二後證一請文御狀如レ件

文明五年九月九日　　賀茂森貞久有判

永清院殿

書簡故實云請文之事

謹而致二言上一候就二――儀一被レ成二下　御内書一忝頂戴仕候當地普請之儀各油斷無二御座一候大略今月中相究可レ申候猶重而樣子可二申上一之旨可レ然樣二可レ預二御取成一候恐々謹言

月日　　名字官名乘判

何誰殿

右同前也直之披露狀と斟酌ならは謹而言上を除脇付に御宿所とあるへし然者恐惶留也式狀之内は同府たるへし

又云公方樣へ言上請文之事

謹而致二言上一候――國城御普請之儀過半出來仕候大略近日可レ爲二首尾一與奉レ存候何茂晝夜無二油斷一儀御座候以二御次一可レ然樣可レ預二御披露一候恐々謹言

月日　　名字官名乘判

何誰殿

右如レ此候へは直之披露狀也凡此趣也

態致二啓上一候彼郡出入之儀被二仰下一之趣畏承候堅申二付之一重而可レ令二言上一候間可レ然樣可レ預二御披露一候恐惶謹言

月日　　名字官名乘判

進上　山本伯耆守殿

御宿所

右披露狀ニ其恐有と存時は如レ此相とゝのへ候へは披露にはなくて直に言上之狀になる也

和翰集要云自二代官方一請取文事

預申御知行分山城在所之名書之御代官職之事

右御年貢諸公事物等嚴密可レ致二取沙汰一候聊茂無沙汰之儀於レ有レ之者雖レ爲二何時一可レ有二御改易一候其時一言之子細及間敷者也仍請文如レ件

年號月日　　名字官名乘判

誰かし殿　參

○領狀請文

吾妻鏡云弘長三年七月廿日戊戌越中判官放生會供奉事依レ被レ遣二御教書一獻二領狀請文一云々

○返事

御產日記云天文五年丙辰正月十二日御馬代參百疋拜二領之一大膳亮從二越前一御下知返事云々彼狀云

御產所御祝儀御用脚事任二先例一其沙汰由御奉書拜見候尤以目出度候委細堤小三郎可レ申候恐々謹言

正月廿三日　　宗淳

二階堂中務大輔殿

松田丹後守殿

蜷川親俊記云天文八年七月廿二日丁巳肥前國有馬殿御内書御返事

大村民部大輔ニ貴殿被二相渡一之字之事依二望申一被レ下レ之訖仍太刀一腰友安沈香二十斤馬一疋到來候花入候太刀一振遣候猶貞孝可レ申候也

七月

有馬修理大夫とのへ

室町殿物語云織田上總介使札の條へ義昭公京都にうつらせ給ひてある時舊臣等をあつめたまひて御談合の事ありて信長へ使札をつかはさる是はよろつの道具に付て杉原をは御使者にて尾州へそ下させ給ふやかて是をさしあくる上總介は委細に見たまひて是より御返事申へきにて候とて對面にあたはす御使者をはかへされける

一門跡方之事青蓮院殿聖護院殿梶井殿なとゝ申類之事攝

家同前之心得也其外脇々下々の義大概公家方ト同シ但法中之事はさのみ官位を不レ進故に聊用捨可レ有レ之云云

一女中方へ文物なとらしに女房詞とて鯛をおひら鮭をあかまなと云事有ましく候鯛をは鯛鮭をは鮭と認たるかよく候也

一武家方諸侍書札事武家方にても四品仕候方へ五位六位の諸侍より恐々謹言と可レ有事也然とか樣にのみ相調候か慮外之儀候哉地下之五位より四位雲客へ之儀弘安禮節此趣勿論也

一返事認樣之事賞翫之方へは尊報尊答又貴報御報なと共書レ之同輩又下手へは御返報と書て猶下輩へは御返事共可レ書也此趣何もく以同前事なから有つけたる樣體也此段も上中下眞草行によるへし

一謹上書之事肝要之樣にむかしより其沙汰有眞草行上中下にわたりて何も用來候也縱は謹上墨黑く書て上輩へ謹上等輩へ謹上下輩へ此分成へし謹上書之時は上書之名乘之上に官を書へし無官ならは名乘の上に氏を書也奥の日の下にも名乘の上に官を書なり受領ならは受領を書へし官と申候へは受領の外のみ申樣に心得候人も有レ之必しも非二其儀一受領をも官と申段勿論候內官外官と申候は禁中に百敷と申候を內官と諸國受領を外官と申成へし將亦無官の人より一段と慇懃の方內氏ならは可レ有二斟酌一和歌の懐紙なとには公方樣にての御會に源氏は上之御氏に恐奉りて不二書加一も此心候也

武家名目抄稿第百六十七册

塙檢校保己一編

文書部十

○奏書

吾妻鏡云建久二年五月三日庚戌被レ付二奏書於一高三位一（兼經卿）善信草レ之俊兼清書也申刻雜色成重帶レ之上洛其狀云

言上

事由

右依二定綱濫行一自二叡山一所レ遣使者所司二人義範辨勝去月卅日到着告狀云依二罪科一欲レ預二賜定綱並子息三人於二衆徒中一云々此外子細盡二使者之詞一仍去一日與二返報一又相二過愚意所一及答云定綱狼逆不レ能左右一爭遁二重科一乎隨二風聞之說一卽以二去月十六日一可レ被レ行二罪科一之由兩度達二叡聞一畢任二罪名一被二仰下一歟但存下可二召賜一之儀上者不レ經二言上一先令レ觸二賴朝一者可二進止一之處今付二衆議一召渡者恐似レ輕二聖斷一又非レ有レ私乎交名輩召二其身一可レ進二院廳一也宜レ令レ待二勅定一云々然而衆徒有二註申旨一者隨二重狀一可二左右一之由相存之處以二去月廿六日一辰刻群二參禁闕一奉レ振二神輿一發レ聲濫訴奉レ驚二主上一（三條不レ足レ言事也）存二此儀一者不レ可レ差二下使一又遣レ使者可レ待二返事一歟而待二計下洛一之條心與事相違更非二本意一賴朝苟以二忠貞一奉公繼二家業一守二朝家一衆徒有二何意趣一强廻二奇謀一令二待計一哉鬱望之至啓而有レ餘配二流定綱一禁二獄下手一之由宣下已畢誠是明時之彝範也而衆徒欲レ背二勅裁一者本自不レ下レ經二奏達一定二罪科一觸二賴朝一者不レ顧二先例一可レ行二斬罪一又可レ隨二衆徒趣一之處背二綸言一企二亂入一凡不レ辨二是非一之性宛不レ異二木石一歟寛二宥定綱之有罪一蔑二如山王之靈威一可レ成二衆徒之鬱憤一之由緣底存知畢縱雖二賴朝一身有二其咎一之時者自二公家一何無二御沙汰一哉抑賴朝爲二天台一爲二法相一雖レ有二忠節一更無二疎略一其由何者義仲謀叛之日討二坐主明雲一不レ經二幾程一追二討義仲一畢又重衡狼戾之時燒二拂南都一誅二僧徒一而生二虜重衡一向所刎レ首畢彼等總雖レ爲二一朝之讎一是非二二宗之敵一乎爰南都感二悅此志一叡岳未レ致二一言一今以下被レ及二傷宮主法師一之忿怨上忝奉レ驚二公家一固知爲二義仲一被レ誅二貫主一之時何不二蜂起敵對一乎謂二其勝劣一貫主與宮主如何如二義仲一有二不レ措所之者一不レ出二山門訴一仰崇有レ餘時乘レ勝企二濫訴一後代濫吹兼以所推

察也縱有訴訟者蜂起以雖不洛中亂入以雖不及喧嘩捧一通奏狀令達天聽者有理事裁許何拘乎委細之旨不遑筆端就中今年相當三合之暦運可勵攘災祈請之處以小成大與心事發卽自吾山致騷動之條若是僧徒少德行將又因果之所致歟凡可謂逆徒矣是則惡徒者多善侶者少歟然者惡徒其性雖似瓦礫善侶其性爭不慙愧更宜以此旨可達叡聽給上賴朝恐惶謹言

建久二年五月三日　　賴朝

進上　高三位殿

追言上

遠江守義定依奉大內守護差置郎從等而衆徒亂入之時爲官兵被召付歟依勅定仰神威不懸手於衆徒之處濫行之餘乘勝及傷彼郎等四人同所從三人之由依義定申狀所承也以人之申狀如此言上若僻事相交歟縱雖怒駘負鞭者何無馳騁之心乎如斯言官兵不堪當時之凌辱若令敵對者衆徒不遁不慮天命又數多罪業出來歟然而仰神威守綸言不懸手以之愚存自身猛威還稱凌轢官兵之由上言咲歟亂逆出來之時以官兵守朝家而及傷彼日之武士其咎如何於衆徒訴申之旨者不可有勅許歟重恐惶謹言

○奏覽狀

吾妻鏡云文治二年十月一日甲戌院宮貴所以下權門領事爲被停止地頭新儀先日自公家被下目錄訖仍連々被尋究子細成御下文今日被進京都云々其詞云

先日所下給候御下文內神社佛寺御領者去頃令沙汰進候了其外院宮貴所諸家司諸國季御讀經御祈用途便補任等事

下文二百五十二枚書狀二通相具本文書並目錄一々所令成敗進上候也於武士之押領不當者善惡尤可被仰下事候然者隨御尋任所行之旨可加其誡候此外事等少々相交候不知子細候之間雖不能計沙汰候於今度者任仰旨大略成下文進上候凡者如此事自今以後令仰合攝政家御下于記錄所可有御成敗候也以此旨可令披露候賴朝恐惶謹言

十月一日　　賴朝

進上　帥中納言殿

私啓

造大神宮御遷宮明年歟明後年歟無其要兼亦遼遠之間にて候へはとて如此奏覽狀に判をしてまいらせ候而廣元盛時か候へとも可承事候て所申候也可仰給候手跡にて候はさらん時は判を可仕候也是一筆にて候へは今度は判を仕らぬに候恐々謹言

○上覽狀

吾妻鏡云嘉禎元年九月十日庚午長尾三郎兵衞尉光景雖致度々勳功未預恩賞而鎭西有强盜人彼所領被召放者可賜之旨義村註上覽狀申之不可望未斷闕所之趣近年雖被載式條爲評定衆今及此儀人以不甘心云々

○解文

吾妻鏡云文治二年十月三日丙子貢馬並秀衡所進貢金等所被京進也主計允行政書解文云々

進上

御馬伍疋

鹿毛駁

葦毛駁

黑栗毛

栗毛

連錢葦毛

右進上如件

文治二年十月三日

又云同年十月一日戊辰法皇御灌頂御訪用途事衆日雖被仰下他事計會之間于今無沙汰於御入堦者去八月廿二日令遂御訖然而所調置之貢物不可默止令運送京都給之雜色六人相副之

解文書樣

進上

紺糟百切

上品絹百疋

國絹百疋

藍摺百疋

色革百枚

右進上如件

文治三年十月日

又云建久元年十一月十三日癸亥新大納言家御別進以伊賀前司仲敎被付御解文入函被封之於戶部戶部又付左大丞方定被奏覽云々

進上

砂金八百兩

鷲羽二櫃

御馬百疋
右進上如件
建久元年十一月十三日　源頼朝
如此被載之此外龍蹄十疋所被進禁裡也
○送文
吾妻鏡云建久二年十一月廿二日丁卯多好方等欲歸洛之間自政所賜餞物云々公文所送文云
好方給
馬五疋内
一疋くろ河原毛あかくらをゝい　一疋かけ黒ぬりのはりかは鞍
一疋あをさぎかすげ　一疋くろ
荷鞍馬五疋
一疋あしげ　一疋おなじ
一疋くりげ　一疋かげ
一疋かげ
むかばき一懸くまのかは　くつ　てぶくろ
ながもち一合内あかお、いだいゆたん
とのゐ物一領めっはしのこん小袖七しろし
すいかんはかま一具水干こんくすはかま　いとくず
うすぎぬ二白　又こんのおこそで二
ひたゝれ十二具内　あいずり六具
こん一具　かき三具
しろき二具　いろ〳〵の布二十段
上品絹十疋　いろがは十五枚
そめぎぬ十切　ぬのさしなは七方
ゑぼし二頭
白布二百段
好節
馬三疋
一疋つきげまきゑ鞍　一疋くろ河原毛
一疋かげ
むかばき一懸なっげ　くつ　てぶくろ
のや一こし　ゆみ一張
もへぎのいとおどしのはらまき一領
府生
公方
馬二疋内
一疋かげくろぬりのはりかは鞍　一疋かげ
むかばき一懸なっげ　くつ　てぶくろ
同
守正
馬二疋内
一疋くりげくろはりかは鞍　一疋かげ
むかばき一懸ふゆげ　くつ　てぶくろ
助直備中國吉備宮清目助信子
馬二疋内
一疋かげくろはりかは鞍　一疋かげ
むかばき一懸なっげ　くつ　てぶくろ
建久二年十一月　日
おくりぶ廿一人
又云三年十二月三十日戊午澁谷瓘者偏偏勇敢尤相叶御意之間爲慰公事勤役以彼等領所相模國吉田庄地頭被申請領家圓滿院爲請所御倉納物所被贖其乃貫也
前右大將家政所
運上　相模國吉田御庄御年貢送文事
合淮布陸伯漆拾肆段貳丈内加三六十一反先分料
見布貳百陸拾漆段
染衣五切　代百文各廿文
上品八丈絹六疋　代百廿文各廿文
納布九反内上二反中七反　代
藍摺淮布卅反　代六十文
紺布二反無文　代四文
牽駄二疋　代四十文
持者七人　代五十二文二丈
例進長鮑千百五十帖
移花十五枚
染革二十枚
右付夫領助弘運上如件
建久三年十二月廿日　平御判
○送狀
蜷川親元記云寛正六年正月二十五日癸酉年始諸社御神馬御送狀數通整之
常照愚草云送狀認事
合千疋者
右爲下被成下安堵　御判御禮物上
所奉進納之狀如件
年號月いくか　伊—右京亮貞—
御奉行所（然而〈官名書つゝ見苦口之名乘のかたに官を書事も不苦候）
大館常興記云天文十年十一月四日御料所若州安賀庄當御

公用之内且万疋只今到來則御倉へ納申候由飯尾大和守方より被レ申レ之仍御代官熊谷彈正大夫送狀今月一日付也進二獻之一然間則宮内卿御局へ申入候也使松平也此送狀飯和へ則遣候也

○注進狀

吾妻鏡云寛元二年六月十七日戊戌新田太郎爲レ令レ勤二仕大番一在京是爲二上野國役一之故也而稱二所勞一俄遂二出家一但不レ相二觸事由於六波羅并番頭城九郎泰盛等一之由依レ有二注進狀一今日評定之次被レ經二沙汰一云々

蜷川親俊記云天文七年十二月七日丁未河津之事自二觀音寺一注進狀披二露之一

增補家忠日記云慶長五年八月廿二日ノ註進狀今廿六日午ノ尅參着候其元川表ノ義相抱候處ニ被レ及二一戰一數千人被二討捕一岐阜へ被二追付一之由寔以心地能義共ニ候彌各被二談合一御吉左右待入候恐惶謹言家康吉由侍從殿此日津ノ城中ヨリ矢文ヲ飛シテ和睦ヲ調ヘ城ヲ避ケ渡シ城將富田落髮シテ高野山ニ走ル(中略)廿七日池田輝政福島正則岐阜ノ城ヲ攻落スノ註進狀今日未ノ剋ニ至テ江戸ニ參着ス

○欵狀

吾妻鏡云文治元年五月廿四日戊午源廷尉義經如レ思平二朝敵一訖剩相二具前内府一參上其賞兼不レ疑之處日來依レ有二不義之聞一忽蒙二御氣色一不レ被レ入二鎌倉中一於二腰越驛一徒涉レ日之間愁嘆之餘付二因幡前司廣元一奉二一通欵狀一(中略)彼書云(前後略)

自レ非二佛神御助一之外者爭達二愁訴一因レ茲以二諸神諸社牛王寶印之裏一不レ挿二野心一之旨奉レ請二蒙日本國中大小神祇冥道一雖レ書二進數通起請文一猶以無二御宥免一

○和字欵狀

吾妻鏡云寶治元年九月十一日辛酉筑後左衞門次郎知定捧二和字欵狀一是愁レ漏二合戰賞一事也

○申狀

太平記云公宋一統政道條可レ有二軍勢恩賞沙汰一トテ洞院左衞門督實世卿ヲ被レ定二上卿一依レ之諸軍ノ軍勢立二軍忠支證一捧二申狀一望二恩賞一輩何千万人ト云數ヲ不レ知實ニ有レ忠者ハ憑レ功不レ諛無レ忠者嫉レ奥求レ竊掠二上聞一ノ間數月ノ内ニ僅ニ二十餘人ノ恩賞ヲ被二沙汰一タリケレトモ事非二正路一嫌被二召返一ケリサラハ改二上卿一申狀ヲ被二付渡一云々

白河結城文書云

伊達宮内大輔行朝重申

奥州高野郡北方事

副進

二通　御敎書案

右先々具言上畢當庄者建武二年八月十三日爲二長倉戰恩賞一行朝并一族等令二拜領一畢仍任二本知行一之旨可二沙汰一付行朝代官一之由去五月八日同六月八日兩度雖レ被二仰下一不二遵行一云々早云二行朝知行分一云二庶子拜領之分一任二本知行一之旨可二打渡一之由重爲レ被二仰下一大藏權大輔親朝重言上如レ件

延元四年七月日　花押裏判

結城彈正少弼顯朝言謹上

欲下早被レ經二御沙汰一預申重御吹擧上於二京都一達二愁訴一給二安堵御下文一全知二行顯朝并親父親朝領等一事

副進

一通　大將御感御敎書案於二伊達守津峯一敎二軍忠由事一

二通　同御一見狀案子細同前

右如二顯朝父子所レ給康永二年二月廿五日京都御敎書者參二御方一致二軍忠一者建武二年以前知行地各不レ可レ有二相違一云々就レ之云二先度軍忠之次第一云二年記以前之所領一令レ勘二錄之一依レ捧二申狀一去々年貞和二四月七日預二御吹擧一於二京部一雖二嘆申一未レ達二上聞一之條愁吟無レ窮者也而去年靈山宇津峯御退治之剋又依レ致二軍忠一預二御感御敎書并御證判一畢案之謹備二于右一親朝者所勞之間差二副手者等於二顯朝一所レ致二戰功一也凡顯朝等依レ參二御味方一奥州及坂東凶徒靜謐之條何事軍忠如レ之其上於二羽州立谷澤城一手者松田太郎殞レ命以來至レ于レ今數ヶ度軍忠之上者任二御敎書旨一可レ預二安堵御下文一之處不レ及二御沙汰一寔經二數年一之條歎而有レ餘者也御約束御敎書於レ令二相違一者曾非二顯朝不運之至一難レ成二諸人安堵之思一歎然者急速被レ經二御沙汰一預二重御吹擧一於二京都一申二子細一給二安堵御下文一彌爲レ抽二忠勤一恐々言上如レ件

貞和四年二月日

蜷川親元記云寛正六年五月朔日丁未昨日之仲親申狀并注進狀等傳奏江爲二御使一親元持二參之一於二巨細一者今朝於二殿中一直ニ有二御申一云々

加賀守貞滿筆記云申狀之事杉原の端にたとへは

三上因幡守謹而言上

右子細何……此段爲二預申一御沙汰粗言上如レ件

永享三年三月日

御奉行所へも又奉行の名をも書事在レ之

政所賦銘引付云

清泉州山徒法花院承舜申狀文明五九廿

江州志賀郡南庄内名田四段爲二大師八講料所一奉行職永代買得相傳證文有レ之當知行之上者安堵御奉書事

被レ成二御奉書一畢頭人御加判

蜷川親俊記云

田修理亮和運申狀天文十九九十八

右子細は對二大津安田次郎左衛門一替錢事任二德政一御法被レ成下一弃二破御下知一候間相付處投二返之一剩去年迫二於大坂一和運被官人池田彦太郎を留置押令二請乞一之今度出二加州知行分一責取條言語道斷狼藉無是非一次第也所詮如レ此爲二狼藉人一上者可レ處二罪科一若令二重怠一隨二見合一可レ被レ加二御成敗一候旨被レ成二下御下知一者可二忝畏存一候也仍粗謹而言上如レ件

天文十九年八月三日

丹州書札式云目安事申狀共具事共云申狀ハ目安ノ子細ノ淺キ物也

書札集云申狀調事杉原一枚に書レ之秋田出羽守家次謹言上右子細着之被レ成二下御下知一者忝可レ奉レ存者仍粗言上如レ件延德二年八月日奥ニ御奉行所共又充所不レ書事も有レ之是を申狀共又訴狀共目安共申レ之

書簡故實云主人に官を申上候時認樣之事杉原一枚を能程に折申と云字を書其下に右京大夫其次に細川民部少輔其次に高國計也一枚に能程に引亂て書也是は民部少輔殿にて右京大夫の官を御申候時也上裏立紙にして卷上下可レ折

申　右京太夫

細川民部少輔

高國

無官の人は此分に調候但伊勢七郎と申時此のごとく被二申上一候

申　兵庫助

伊勢七郎

貞孝

武家名目抄稿第百六十八册

塙檢校保己一編

文書部十一

○日記

常照愚草云殿中の日記を付申に三職をは御名字を不レ書レ之殿文字の事は書レ之又四殿の事は御名字をは書レ之殿文字をも書レ之縱は次郎殿畠山殿の御事也又能登の守護をも元服名をは次郎殿と申是をは畠山次郎殿と書レ之也是以可レ有二分別一也

○小日記

伊勢守貞忠亭御成記云御厩者公人御こしかき以下御樽被レ遣レ之小日記在レ之

小田原衆所領役帳云寺領八十貫文三浦地子四十貫文同　長郷

以上百廿貫文秦平寺殿三十貫文東郡笠間之内同前岡野郷松岡殿百十七貫文三浦太田森雪下御院家中百五十二貫九百文鎌倉之内六十七貫百五十文同前内蘆而癸丑秋諸寺へ御寄進以上貳百廿貫五十文鎌倉中諸寺へ御寄進小日記大道寺へ御預け

○日々記

大内家壁書云兵船渡海關役事御定法爲二九州御對治一御在關之時渡海御勢之事爲二赤間關役一可レ立二仕舟一今日於二當關一被レ經二御評定一任二先例一被二御定法一畢自今以後可レ爲二此分一之由議定訖則所レ被二殿中日々記一壁書如レ件文明十五年八月一日

○競馬記

吾妻鏡云承元二年五月廿九日丁卯兵衛尉清綱御畫所侍昨日自二京都一下着今日參二御所一令レ尋二問當時洛中事一御去九日新日吉小五月會上皇御幸カ宇流鏑馬已下事故以被レ刷射手等多西面輩子息垂髮也各爲二月卿雲客一被レ出二立之一卽清綱息童從二其役一又號二峰王一童院御龍童候二西面一箭不レ中レ的之間逐電忽以出家云々射手等記可レ有二御覽一之由被レ仰之間自二懷中一取二出之一披二置御前一是子息列二射手一之旨爲二申出一兼用意云々

競馬

一番　左　景頼　追勝鏑二　祿三　右　稙文

二番　左　重連　儲勝鏑一　祿二　右　頼資

三番　左　助重　及レ未聊取　祿三　右　敦久　追勝鏑一

四番　左　信季　儲勝鏑二　祿三　右　行弘

五番　左　高遠　被二取落一　右　國文　追勝鏑二　祿三

六番 左 助清 右 武沼 及レ未明取 追勝籌一 祿二

七番 左 信継 右 穆武 追勝籌一 祿

鼓　親定朝臣

鉦鼓　長季

源三翔 中將範茂朝臣出二立之一　右大臣 熊谷平三直宗

鶴丸 別當秀康　峯王丸 有雅朝臣

松王丸 大貳清綱子　金王丸 前中納言

藤二郎信村

的

散位中原章清　左衛門少尉行房　橘範邦　藤助直

大江惟弘

右衛門少尉源資家　源康重

又云康元元年八月十六日甲戌競馬五番

一番 左追持 宮所左衛門尉 右 村岡彌三郎
三遍之後右好而左レ外空驤及二數度一左追二表手一前取令二落馬一宮所自レ額血出

二番 左 宮廠右馬五郎 右追勝 檢仗三郎
左先出互相競各空驤二度右追二下手一無レ租驤追宮廠擬レ取レ鞦組合取拔擧

三番 左追持 下條四郎 右 秦弘貞
下條追レ之暫不レ得二相並一但於二勝負一押レ內取レ之弘貞離レ馬憤共落馬而左勝之由雖レ有二沙汰一右額申二子細一祿事

四番 左追持 澁谷右衛門三郎 右 秦種久
右先出々遲之間左追レ之取レ之持レ脇種久離レ馬取二澁谷腰一共落馬左顯二勇力一右存二敵質一太有二其興一

五番 左追勝 烏子左衛門次郎 右 秦行久
右先出空驤度々左追レ之行久不レ合レ鞭止畢是術二烏子之勇力一之故也

○弓日記

鎌倉年中行事云御蟇目ノ役白緣ノ疊ヲ申出シテ方角ヲ承テ若君樣御誕生ノ時ハ三姬君御誕生ニハ二弦打可レ仕御蟇目ノ射樣又心中ニ祈念申頌文哥矢取幷御疊持若黨兩人ノ樣體等ノコト弓日記ニ書之間不レ及二重記一

又云犬追物ノ射樣法禮以下條ニ弓日記ニ記之間重テ不レ及レ注

百手聞書云兼日より二十人を定て前後の四の出と射手可レ然仁體なり日記を付て射さる矢代あるましき也其時はさいはいもあるましき也

○射手風記

吾妻鏡云正嘉二年正月六日丙辰御的始射手事內々被レ定二人數一雖二何箇度一撰二舊勞一可レ被レ用之旨有二相州禪定殿命一而知久右衛門五郎者雖レ爲二多年勤仕射手一當時在二信濃國一仍今度被レ漏二風記一之處諏方兵衛入道蓮佛今明之間定可二參上一之由就二擧申一被二書載一云々蓮佛去頃遣二飛脚於彼國一云々

射手風記

澁谷左衛門太郎
橫路左衛門次郎
平新左衛門尉
本間彌四郎左衛門尉
諏方四郎兵衛尉
工藤彌三郎
周枳兵衛四郎
橫溝彌七
知久右衛門五郎
萱間左衛門二郎
岡本新左衛門尉
小島彌次郎

○射手記

吾妻鏡云曆仁元年正月廿日丁卯御弓始也射手事昨夕俄於二御前一被レ仰二合于如一始義村爲二催促一被レ下二日記於陸奧太郎一云々

射手

一番
小笠原六郎
藤澤四郎

二番
橫溝六郎
松岡四郎

三番
岡邊左衛門四郎
本間次郎左衛門尉

四番
三浦又太郎左衛門尉
秋葉小三郎

五番
下河邊右衛門尉
山田五郎

又云文應元年正月十二日庚辰於レ濱有二御的射手之試一被レ撰二定其射手十三人一一五度射レ之

射手

一番
早河次郎太郎 ●● ●● ●● ●● ○● 九
澁谷左衛門太郎 ●● ●● ○● ●● ○● 八

二番

平島彌五郎　●●●●●○九
岡本新兵衛太郎　●●●●●○九

三番

佐貫七郎　●○○○○●六
藤澤左衛門五郎　○○○●○○六

四番

藤澤左近將監　●●○○○○八
海野矢四郎　●○○○○●八

五番

桑原平内　●●●●●●十
工藤彌三郎　●○○○○●八

六番

本間彌四郎左衛門尉　●○○○○○七
柏間左衛門次郎　○●●●●●九

七番

工藤八郎　○●○○○○三

十四日壬午今日有二御弓始一二五度也

射手十二人

一番

早河次郎太郎祐泰　●●●●○九●●●●九

澁谷左衛門太郎朝重　●●●●○○七○●●●○七

二番

平島彌五郎助經　●●●●●九○●●●●八
岡本新兵衛重方　○○○○○四○●●●●九

三番

佐貫七郎廣胤　●○●●●○七●●●○○七
藤澤左衛門五郎光朝　●●●●○八●●●●○九

四番

藤澤左近將監時親　○●●●○七○○○○○五
海野彌四郎助氏　●●●●○六○○○○○六

五番

桑原平內盛時　●●●●●九●●●●●九
工藤彌三郎清光　●●●●○七●●●○○七

六番

本間彌四郎左衛門尉忠時　○○●●●七○●●●●八
柏間左衛門次郎季忠　●●●●○八●●●●●九

○的日記

高忠聞書云丸物日記には丸物射手と有へし事の字は犬追物手組事と書ならては有ましき也笠懸の日記にも笠懸射手と計書也御的の日記にも弓場始射手と云也又云御的の時みなむする事ある時日記のつけやう只其ま

ま置へし此外はやうなしと仰候

佐竹宗三聞書云的の日記一人して被ㇾ付には數塚二の眞中のとほりに引數の毛さきを數人の前へなるやうに緒の方を六寸計上へ折返して去きて付るもよし又毛さきを數人の左へなして去きたるもよし左へなして數時は折返す事あるへからすむかしは數皮を本に去きて被ㇾ付と候へ共近年は引數のよし云々

○御所的日記

佐竹宗三聞書云御所的日記被ㇾ付事幷射手立所次第本日記に此くたり書事なし云々

○弓場始日記

弓場問答云

弓場始日記

一番

名字官　○○○○數　中は白迸は墨也　弓始の時は中は墨迸は白也
同斷　○○○○數

二番

同斷　○○○○數
同斷　○○○○數

三番

同斷　○○○○數
同斷　○○○○數

○百手日記

高忠聞書云丸物日記には丸物射手と有へし事の字は犬追物手組事とならては有ましき也(中略)百手の日記にも百手射手と計書也

射御拾遺抄云百手の的の日記書樣端作は百手射手とはかり書也年號月日は例式のことくたけなかき紙に可ㇾ書也射手の名は名字にても官途にてもかた名を一字つゝ書也もしは名乘なともあるへし其下に○○○○○○十如ㇾ此下まて付てつゝの人には十文字を大に書也是をつゝとよむ也

百手聞書云日記は引合を二枚竪紙につきて又二枚つきてそれを横に又つく以上四枚につきて竪に書く十人と十人との間を置て一枚の紙に十人つゝ書合へし丸兩方に五ッつゝ十くたり二百たる間片名を書へし丸十下に十の內のあたりを數次第に付て百の下に以上の數を付るなり或九拾或九十八九タテ付るつゝは十と計有日記の奥に年號日付あるへし丸物の中りはつれ五度弓の日記のことく串同

同斷　○○○○數
同斷　○○○○數

年號月日

前なり片名

○草鹿日記

丸物草鹿記云草鹿日記の事丸物のことし但端作草鹿射手の事と書へし此外の事とも丸物の所に兼記す略レ之

高忠聞書云笠懸的草鹿丸物はさみ物なと日記を付て射時は大勢の時は紙一枚にかゝれぬ時二枚にても三枚にても奥へそくひにてつきて日記を付へし紙をつく事法にあらねとも大勢の時はつかてはかなはぬなり

○挾物日記

高忠聞書云はさみ物射時も日記有はさみ物射手と計有へし事の字有ましきなり

挾物記云はさみ物日記の事勝負に射る時は付候也勝負には射事候へ共小的なとの如くかけに射る事なし若勝負に射るとも度数を定たちは日記は有へしよのつねの時も勝負の時はかやうに日記あるへし

挾物射手

略儀ならは端書の下にかやうに年號月日を書へし「挾物射手天三六廿一」

桑太○○○○○
○○○○○

元略儀なり奥に書時は奥に年號月日一行に書也引合を一枚竪に書候也折て書事なし年頭なとに前様にて射候時は日記なし

中央○○○○○
○○○○○

年號月日

常はさみ物射候時は射手いくつかひ共不レ定又立ならひて射るとも主次第也小的なとの如くしたるへし

○丸物日記

高忠聞書云丸物日記には丸物射手と有へし事の字は犬追物手組事之書ならては有ましき也

丸物草鹿記云丸物の事日記の大的なとに替る事なし但端作に丸物射手と書へし大的のやうに射手事と事の字を付さる也人の名の下に丸をしてはつれを黒むへし大的の日記笠懸以下端作こそ違へ付様は同し事なり何れも丸は矢數程なるへし

又云丸物草鹿はさみ物以下射手大勢成共日記の付様とて別にかはる事なし

○犬追物日記　犬追物手組

高忠聞書云丸物日記には丸物射手と有へし事の字は犬追物手組事と書ならては有ましき也

又云公方様の御手組に參時は日記の付様

犬追物御手組之事

御

大名

かやうに大名なとをは一字下けて書也皆々すゐかんにて有へく候公方様御鞭は紫竹の根にてあるへく候よはゝりつきは御矢をは御調度と云へし犬を御雜色はなす射手検見の日記付様但検見とはかり書なり十疋つゝにてかはるたゝし検見とはかり書へし

又云三手犬追物日記付様上手は五疋なるへし十疋つゝにてかはる也上手の日記はたゝいつものことく書へし中の手よりはたゝ中の手下の手とかく也此時は十文字引にも五十疋つゝの分に引へし日記をはかさねてめんとり羽にしておいてとりかへ〳〵付申候此時は上手を賞翫あるへし

犬追物手組之事

上の手をたゝかやうに書なり是よりはたゝかくへし

中手　とはかり書也
下手　とはかり書也

＋＋＋＋＋
くわんれい

いつれも十文字は五ツかくなり五十疋まてあるへき間かやうに書也同二手の犬の時は百疋なりこれも十疋宛にてかはるへし此時はたゝ上手下手と計書也付様同事なるへし

上手　とはかり書也
下手　とはかり書也

一犬の日記の次第の事

一卷　四卷　是次第々々にあくさしき也
五卷　此外是をおふて付也
二卷　三卷

一九騎犬追物日記付様

かやうに上に四人下に五人書也

又云内外のけんみの日記の事如レ此付る也

犬追物手組之事

……
……
……
検見
名
名

かやうに付る検見の有所にとのけんみの上にかくへし」常照愚草云公方様検見させられ候時常に検見を書所に一字あけて御とはかり書ゝ之也文明十五二月廿日の日記在ゝ之

犬追物手組事

管 弘源寺 領十七疋 一色修理大夫二疋

細川讃岐守十二疋 細川下野守十一疋

細川淡路守四疋 佐々木加賀入道二疋
赤松彦次郎十七疋 赤松伊豫守十疋
畠山彌三郎十疋 畠山中務少輔三疋
畠山尾張守四疋 山名彈正少弼八疋
検見 喚次
赤松大膳大夫入道 大中
小笠原備前守
永享七年二月一日

於中島馬場

犬追物手組事 文安元

右馬助殿十六疋 遠江守殿五疋
孫次郎殿六疋 寺町太郎左衛門尉五疋

薬師寺四郎左衛門尉六疋 内藤又四郎十二疋
小笠原新藏人五疋 安富勘解由左衛門尉六疋
寺町石見入道十四疋 茨木近江入道八疋
下野殿八疋 與一殿八疋
検見 喚次
備前殿 小笠原三郎
文安元年九月十一日

蜷川親元記云
御日記引合せ 日記付伊勢七郎右衛門殿再拝伊勢六郎殿

犬追物手組事

管 領七疋 治部大輔九疋
畠山左衛門佐六疋 土岐美濃守四疋
一色兵部少輔七疋 伊勢守八疋
山名彈正少弼十疋 伊勢備中守十五疋
細川淡路守五疋 伊勢兵庫助八疋
細川右京大夫十疋 細川讃岐守九疋
検見 喚次
小笠原備前守 小笠原民部少輔

寛正六八廿二日

又云文明十五年六月十六日丁丑於二武田殿一犬追物あり

朝犬日記次第

藤中納言殿十疋 赤松刑部大輔殿五疋
伊勢因幡守殿九疋 伊勢與一殿十四疋
毛利次郎殿 三上與次郎五疋
多賀豐後守八疋 蜷川新三郎六疋
伊勢次郎左衛門尉殿八疋 武田治部少輔殿五疋

]]]]]]]]]]
伊勢守殿 十一疋
檢見
小笠原刑部少輔殿

又云文明十五年七月十七日戊申於二御所一犬追物あり日記

犬追物手組事
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
藤中納言 十疋 細川淡路守 六疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
山名治部少輔 十一疋 伊勢次郎左衛門尉 十一疋

又云

犬追物手組事
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
藤中納言 十一疋 細川淡路守 六疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
武田治部少輔 十一疋 伊勢次郎左衛門尉 五疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
赤松刑部大輔 十二疋 伊勢與一 十二疋

]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
小笠原兵部少輔 十二疋 伊勢守 八疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
細川民部少輔 十一疋 山名治部少輔 七疋
檢見 喚次
日記執筆伊勢守
小笠原刑部少輔 垪和與次郎
日記付河内民部大輔
さいはい伊勢又七
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
大館治部少輔 六疋 垪和與次郎 六疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
武田治部少輔 六疋 多賀豊後守 四疋
]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]
赤松刑部大輔 十一疋 伊勢因幡守 十一疋
]]]]]]]]]]
細川彌九郎 十二疋
檢見 喚次
小笠原刑部少輔
日記執筆伊勢因幡守
日記付河内民部大輔
さいはい伊勢又七

又云三月七日御犬追物二百足在レ之畠山殿御槩と也御日

記次第
左衛門督殿 小笠原一郎殿
垪和筑前殿 伊勢與一殿
遊佐河内守殿 飯尾大和守殿
廣戸刑部丞殿 伊勢次郎殿
藤宰相殿 伊勢守殿
檢見
小笠原民部少輔殿

犬追物手組云

犬追物御手組事
御方御所様 管領
一色五郎 伊勢左京亮
細川淡路守 垪和與四郎
武田彥太郎 伊勢守
赤松孫次郎 伊勢七郎
藤宰相 一色左京大夫
檢見 喚次
小笠原備前守 伊勢次郎
文明十年三月七日

犬追物手組事 於二殿中御馬場一有レ之
藤中納言 伊勢守
小笠原刑部少輔 伊勢與一
伊勢因幡守 毛利次郎
伊勢次郎左衛門尉 矢部八郎
廣澤左馬介 伊勢兵庫介
檢見 喚次
多賀豊後守 伊勢七郎次郎
文明十七年三月一日

犬追物手組事 三手ノ日記也 於二細川殿一在レ之
右京大夫殿 治部少輔殿
上原神六 香西又六
大平中務丞 庄兵衛四郎
秋庭備中守 牟禮次郎
安富又三郎 齋藤兵衛尉
伊勢備中守 宮下野守殿
檢見 喚次
小笠原備前守殿
伊勢守殿 内外ノ檢見ニハ如レ此調進也

長享三年八月十三日

中手

右馬介殿　三手ノ内於二細川殿一在ノ之　攝津守殿

藥師寺與一　小笠原兵庫介

寺町三郎左衛門尉　安富與三左衛門尉

長鹽又四郎　上原道祖鶴

若槻民部丞　四宮四郎

小笠原播磨入道殿　安富新兵衛尉

檢見　喚次

小笠原備前入道殿

伊勢守殿

長享三年八月十三日

下手　三手ノ内於二細川殿一在ノ之

民部少輔殿　孫三郎殿

香西五郎左衛門尉　太田藏人

小笠原三郎　井上六郎

奈良備前守　原田五郎

高橋孫次郎　額田次郎

玄蕃頭殿　遊佐加賀守

檢見　喚次

小笠原備前入道殿

伊勢守殿

長享三年八月十三日

右此三口三手ノ日記也殿文字ニ心得あり

賀越闘諍記云於東庄大窪滋犬追物之條假屋ノ内ニ栂野三郎右衛門尉吉仍アッテ日記ヲ付也

○笠懸日記

高忠聞書云丸物日記には丸物射手と有へし事の字は犬追物手組事と書ならては有ましき也笠懸の日記にも笠懸射手と計書也笠懸的草鹿丸物はさみ物なと日記を付て射時は大勢の時は紙一枚にかゝれぬ時二枚にても三枚にても奥へそくひにてつきて日記を付へし紙をつく事法にあらねとも大勢の時はつかてはかなはぬなり

笠掛記云笠懸日記之事百番には

爰に第一第二と第十まて十枚にあるへし

笠懸射手

なにかし　○○○○○○○○○

なにかし　○○○○○○○○○

なにかし

なにかし

奥に年號

諏訪社法樂御笠懸射手

正二位尊氏　○○○○○○○○○○十

命鶴丸　○○○○○○○○○○十

南次郎兵衛尉宗貞　○○○○○○○○○●十

勝田能登守佐長　○○○○○○○○○九

島津周防三郎左衛門尉忠兼　○○○○○○○○○十

杉原與四郎國遠　●○○○○○○○○九

勝田治部丞長直　○○○○○○○○○十

福能部又太郎氏重　○○●○○○○○○九

貞和四年四月五日

依ㇾ有二靈夢告一笠懸十番太刀一振馬一匹鞍毛所ㇾ被二引進一也

射御拾遺抄云笠かけ日記書樣端作に御笠懸射手と書ㇾ之御○○○○○○○○○十如ㇾ此書なり私のには端作の御の字を略するなり

武家名目抄稿第百六十九冊

塙檢校保己一編

文書部十二

○目錄

吾妻鏡云文治二年七月廿七日壬寅因幡前司廣元去十九日注二進沒官京地目六一今日二品所レ經二御覽一也

注進

沒官家地成敗事

左馬頭三箇所內

信兼家地一所　楊梅

友實家地一所　仁和寺

平家領一所　正親町 東衛獄領

烏丸御局一所　左女牛南 東洞院西

親能一所　信兼一家地也 楊梅南 朱雀西

時政一所　綾小路 北河原東

實平一所　楊梅 信兼領

實基一所

近衛局一所　二條南室町東 經盛獄領

南無阿房一所　堂敷地高倉東 八條北故平內財領

已上十箇所　在判廣元

季瓊日錄云寛正五年三月廿日實聚軒內鋭秀軒末寺勢州高年寺支證依二光永書記罪科一以二飯尾左衛門大夫一被レ召仍今晨於二殿中一渡レ之鹿苑院殿勝知院殿普廣院殿御判五通并飯尾左衛門大夫御敎書目錄也

政所賦銘引付云津田彌三郎重祐 文明九十二廿二 江州野洲郡今質在內年四郎名井田畠屋敷散在等目錄事任二買得一相傳知行之旨可レ被レ成二御下知一之由

常照愚草云秀譽御對面の事永正十三年十月十六日未刻五合五荷進レ之目錄貞久調進如レ常御打五合御樽五荷さん上之又名も不レ書レ之如レ常也於二御前一は與一かはゝとめされしとなり御服むらさき拜領御ゐのこの翌日云々近代の面目の至也

又云料紙の事大高たんしは公儀にも御用捨なり然れとも禁裏へ御進上の御目錄をはたかたんし一枚に調進なり又事により八朔なとの御目錄をは小高たんし目錄は小高なり

又云吉良殿御目錄ハ杉原一枚に被レ調事勿論之儀也彼御家のならはしと云々但又引合に被レ調し事も在レ之

伊勢貞順記云目錄に太刀の銘を付候事勿論なり持太刀なれは一腰のわきに持と付候又絲卷にて候へは是も一腰のわきにいとゝ付候又金ふくりんなれは金とはかり付候銘ある太刀は其銘をかならす認候ゑたて以下可レ然太刀にて候とも銘候はねは持と付候又當時はしりまい候つかひ太刀をも持と付候

家中竹馬記云太刀を人の方へ遣時正本にもあらぬ銘を書ことは不レ可レ然古人は左樣の太刀をも力なくつかはす時は太刀一腰とはかり書也

和翰集要云

目錄事

進上

御太刀　一腰

御馬代黃金十兩　一疋

以上

熊谷賴母

幸名

進上

御太刀 正宗　一腰

御馬 鹿毛 置御鞍　一匹

以上

山井三右衛門

秋治

進上

御太刀　一腰 長光

御弓 井征矢 千節　一張 重藤

御鎧　一領 白絲 同毛甲

御馬　一疋 栗毛 雀目結置御鞍

青銅　五千疋

以上

吉見宮內大輔

長盛

貞遠

式引出物とは此五種なり此以後は何にても獻候に進上あるへし

簡禮記云祝言ノ目錄ノ事緣約進物ノ時舅ヘノ目錄如レ常可レ調レ之姑并嫂ヘノ目錄大概如レ圖上中下ノ趣肝要ナルヘシ進物ノ條數ハ可レ依二分限一者也

姑ニ如レ此　嫂ニ如レ此

御小そて	十かさね
とんす	十まき
きんらん	十まき
以上	
みやうしくわん	

小そて	五かさね
とんす	五まき
以上	

右何モ料紙一重也此外十種十荷五種五荷三荷三種時宜ニヨルヘシ但口傳祝言ノ當日嫁女持參ノ目錄ハ又各別也口傳

又云遣僧家目錄ノ事如レ常調レ之ヘシ口傳香奥折紙ノ事料紙方ハ可レ應ニ其人一如何程賞翫ニテモ進上モ稱號官途名モ不レ可レ書レ之若多人數ニテ紛ル、事アラハ名字官計書事モアルナリ但口傳

万疋	御香典

銀子ナラハ銀子何枚御香典或白銀何兩御香典ト可レ書レ之等輩ヘハ文字ヲ略シテ可レ書下輩ノ時ハ大方御字アルヘカラス亦御香典ト無レ之千疋トモ万疋トハカリモ書事口傳

經文ヲ相添ルニハ万疋トアル前ニ御經一部トモ又ハ經文ノ題號ナリトモ書レ之也尚上中下ノ趣肝要ナリ

提婆	品
万疋	
以上	

口傳

ゑん上	
白てう	一
たい	一おり

ゑん上	

たら	一おり
ふな	一おり
御たる（御トモアルベシ）	十か
已上	
みやうし官途な乘	

万ひき	
以上	
みやうし官途な乘	

書札集云式引出物目錄可ニ調達一事

進上

御太刀　一腰白

御鎧　一領白絲

御弓征矢

御馬　一鶴毛印雀目結御鞍置

以上

伊勢右京亮

遣——目錄書樣之事

注文

太刀　一腰銘有レ之

織物　五重

折　拾合

山鳥　二
白鳥　一
鴈　五
鯛　一折
鯉　一折
樽　十荷
馬百貫文　一疋毛付有レ之
以上

左衛門大夫

凡此趣也折紙の時は一重也注文は紙一枚を折て如レ此相調候也書樣次第何も如レ此也
書簡故實云美物公方樣へ進上之事勿論候但是に御樽添候は奥に御樽十荷とも五荷也共可レ然候

進上
白鳥　一　右如レ此折紙に認候也公方へ自二諸國一歳暮又正月進上儀也はま
鯉　一　くりなとは一折千なと、數を書
熨斗　五百本
蛤　一折　事田舍よりは尤可レ然歟
以上
進上

昆布　一折　右是も折紙也竪紙も不レ苦進上書は向々人によるへしかひ
鴈　一
鯛　拾　あはひをはあら物と申候是に
海老　一折　折なと添候七十合ともあるへ
貝鮑　百　し昆布の次に書のせてよし
御樽　十荷
以上

又云女中方へ目錄次第

ゑん上
かん　一
たい　一おり
はまくり　一折
御たる　三か
以上

はらさこん大夫

さた次

又云諸大名に或馬太刀折樽なと鮭なとは五尺十尺なと、書へし何も右に云るし、ことく條々口傳折紙注文なとは納候へは以上に點をかけて返候也めい〳〵に點をかけ候事は無レ之候同輩にても或は宿老又は別而賞翫も可レ有

かたへは目錄に一には御字付又一つには御字不レ書也小はゐんきんなから能候也しからは奥は名乘計にても又名乘を略して名字官計にても有へし其段と口口も不レ苦と云々樽折の時は先折を前にかきておくに樽可レ然候也又同輩下々へは何にても御字を不レ加おゝの名乘をも不レ書して目錄はかりにて勿論也

清正記云肥後國五十四万石の處を廿五万石は加藤廿四万石は小西に下され殘りをは兩人に御預なさるゝ條半分ッ代官仕るへき旨仰出され加藤には御知行の御朱印幷に目錄に義弘の御刀小西に御知行の御朱印幷に左文字の御刀を下さる

○總目錄

吾妻鏡云仁治元年四月十二日丙午 故匠作遺領事未レ分死去之間任二去二年十二月廿三日總目錄一被レ支二配子息等一

○奏事目錄

惠林院殿將軍宣下記云次御判始宣下事終之後被レ執二行之一評定衆先各着座御出座之後管領着座次奏事目錄於二殿上着座之時一渡二于硯之役者一了侍雜仕又御硯兼申出之墨能摺渡二御硯役一ナシ請取也御前着座之時自二上首一次第參候也自己參仕相當時持二御硯一直參二御前右方一置二御硯一開二目錄一置二御前一時目錄ノ前端ヲ御硯ニシク風ノ用心也而退着レ座其時永元參着其後又次第也

料紙御判折紙

寺社方目錄延德二年七月五日

一太神宮領武藏國恩田御厨雜掌申年貢事
一石清水八幡領播磨國今福庄雜掌申檢注事
一北野宮寺雜掌申御祈禱事
已上此時者無二實名一歟

實名奏事上書如レ此二字二書也

折紙之目錄ニハ端作勿論奏狀ニハ端作不審也目錄ニハ奏事伺終退出候時如レ此可レ被レ合二御點一事也今度者無二御合點一而袖ニ被レ居二袖御判一了或御評定奉行或奏事先々如レ此之由申上者故實也依二御無案内一無二御存知一者無二餘儀一御事也

料紙御判紙也

寺社方目錄延德二年七月五日

一太神宮領武藏國恩田郷御厨雜掌申年貢事可レ被レ經二次第御沙汰一者哉
一石清水八幡宮領播磨國今福庄雜掌申檢注事可レ被レ賦二出内談方一者哉

一北野宮寺雜掌申御祈禱
可ㇾ被ㇾ成ニ御敎書一若哉
奏狀ニ端作寺社方目錄延七、、、如ㇾ此書載人在ㇾ之又不ㇾ書ニ
端作一人在ㇾ之如ㇾ此時者年號奥ニ書ニ一行一也
奏事三箇條伺終而退出之時目錄袖被ㇾ居ニ御判一其時敏康
立ㇾ座給ニ御硯目錄等一退出也則御硯被ㇾ渡ニ雜仕一了敏康
有ニ退出一者着座衆自ニ下﨟一次第可ニ退出一云々
蜷川親元記云
折紙也
目錄年號月日
一石清水八幡宮
御神樂要脚事
一北野宮寺御神寶
料足事
一諸國御年貢
催促事
以上　諱　奏事
立紙也
奏事樣
一石清水八幡宮御神樂要脚事
任ㇾ例可ㇾ被ㇾ仰ニ付之一
一北野宮寺御神寶料足事
可ㇾ被ㇾ仰ニ付御倉一
一諸國御年貢催促事
可ㇾ被ㇾ成ニ御奉書一
○寄進目錄
簡禮記云寄進目錄并寄附狀奉納神前太刀目錄之事假令ハ

雄劒	一振
龍蹄	一疋
以上	

御帶刀	一振
龍馬	一疋
以上	

凡如ㇾ右ナルヘシ依ニ時宜一奉ニ獻上一ト書名字官實名ヲ書ル事モアルナリ私曰雄劒一振龍蹄一疋或ハ御帶刀一振龍馬一疋ナト調ㇾ之タル目錄禁裏エ從ニ將軍家一御進上ノ目錄ニモ有ㇾ之事ナリ必ス不ㇾ可ㇾ限ニ神前一寄進ノ目錄如ㇾ此モアルヘシ尤依ニ時宜一ヘシ

奉獻上	
八幡宮	
雄劒	一振
御鎧	一領
御馬	一疋
以上	

奉獻上	
伊勢太神宮	
御甲	一領
御冑	一頭
御劒	一振
御太刀	一腰
以上	

○進物目錄
伊勢守貞忠亭御成記云御進物目錄別紙在ㇾ之觀世大夫其外各江被ㇾ遣折紙等在ㇾ之不ㇾ及ニ寫置一

進上文明十四廿六於ニ殿中一獻申ニ沙汰之一
御太刀　一腰持
御馬　一疋河原毛
御香合　一堆紅
御盆　一枚堆紅
御太刀　一腰國宗
御腹卷　一領黑革肩紅
御繪　二幅璞王覃筆
御盆　一枚剔紅
御太刀　一腰國清
御打刀　一腰直守
以上

山名治部少輔
豐時

進上文明十四三十二於ニ殿中一獻申ニ沙汰之一
御太刀　一腰持
御馬　一疋青毛印柏十文字
御花瓶　一胡銅
御盆　一枚桂漆

段子　五端色々
御盆　一枚剔紅
御油滴　一同蓋堆黒
御盆　一枚金絲
御太刀　一腰助包
御刀　一腰吉光
御太刀　一腰安則
以上

武田次部少輔

信親

右此進物之次第永祿四三八ニ來卅日ニ三筑へ就ニ御成之儀一古日記ヲ於ニ妙蓮寺一被レ撰河民三大夫眞助三人今度の覺悟ニ可レ成分可レ撰之由被レ仰二帖被レ書畢かやうの儀分別候て三筑へ御成進物事之被ニ仰出一訖

祇園會御見物御成記云御進物次第初獻御太刀一腰盛景御馬一疋以目錄掛ニ御目一目錄

進上　爲ニ御名代一岩山殿道堅モ御祗候爲ニ御見弟一目錄被レ調候處京兆以ニ御異見一被レ調レ之
御太刀　一腰盛景
御馬　一疋鶴毛印雀目結
以上

中務少輔

御名乘被レ遊かた付可レ有レ之候つれ共御書之うら付無レ之事候間唯御字斗可レ被レ調の旨岩山殿御在分候つれとも御判なき物候間御官斗被レ調可レ然由京兆御意見如レ此ニ相調候

簡禮記云目錄調樣之次第料紙ノ事太刀折紙ト同前ナリ發端ノ事貴人ヘハ進上トアルヘシ等輩以下ヘハ進上アルヘカラス依ニ充所一進上ヲ草字ニ書事モ可レ有レ之又覺ト書事モ有レ之也端作ニ目錄ト書事アルヘカラス猶又口傳アリ

吳服類目錄假令ハ

進上
綿　百巴
絲　百斤
段子　百端
御服　二十重

如レ此ノ趣也御服ハ天子將軍ノ御衣ニ書レ之也勿論天子ノ御衣ヲ吳服トモ可レ書又依レ人諸侯ノ衣ヲ御服ト書ヘシ其外小袖ト可レ書レ之卷物ヲハ一端二端絹類ハ一疋二疋ト書レ之ナリ或又如レ此左モ可レ有レ之何レ口傳有レ之也

已上
名字官途
名乘

進上
砂金　五拾兩
吳服　五重
金蘭　五十端
絲　五十斤
青銅　万疋
已上
名字官途
名乘

進上
御香合　一
御盆　一枚
金蘭　三卷
万疋
名字官途
名乘

樽肴類目錄假令ハ

進上
白鳥　五
鴈　五
鯛　一折
鱈　一折
海月　一桶
已上
名字官途
名乘

進上
鶴　二
鯉　一折
鮭　二尺
海老　一折
蛤　一籠

如レ此ノ趣也第一鳥類第二川魚第三海魚ト書ナリ桶曲物ニ入タル物ハ末ナルヘシ但樽アラハ何時モ終ニ樽ヲ書也鳥類ノ内ニテモ大鳥程先ニ可レ書鳥類一羽二羽一番二番トハ不レ可レ書唯一二ト書也鯛ナト一折ト書テハ員數不レ可レ書之員數ヲ書時ハ一折トアルヘカス蛤ヲハ何ニ入テモ一籠ト書ナリ樽ハ幾荷ト書ナリ但柳ト書タルニハ御ノ字アルヘカラス條々心得ヘシ

若又精進物アラハ前ニ可レ書レ之但祝言ニハ第一鳥魚第二精進物第三樽也

御樽　五荷
已上
名字官途
名乗

進上

御盃臺　|||
御折　十合
御樽　十荷

已上
名字官途
名乗

盃臺ヲハ作リ物ノ繪樣ヲ書ヘシ折ヲハ一合二合ト書也總而數字ハ一二三ヲ用ル也壹貳參ハ算用ノ事ニ用ル也
數多ノ時ハ裏エモ書ナリ
但以上計ハ裏エ不レ可レ書有一種モ書テハ不レ苦依ニ充所一名字官途勿論ナリ

右ノ趣ニテ能々分別スヘシ總而食類ノ目錄ニ太刀馬武具繪讃香具此等ヲ書加ル事アルヘカラス若ハ小袖ナトヲ添ル事アラハ樽ノ前ニ書レ之也口傳

鳥魚ノ類書調ルニ一ニ鳥二ニ川三ニ海ト云ヘリ然レトモ古法ノ目錄ニ鯛鱈鮭鮒ト如レ此書連テレタル儀アリ由來ハ雖レ無レ之昔ヨリノ作例ニテ鯛ハ何魚ヨリ前ニ書鮒ハ万ノ魚ノ後ニ書レ之也
又云遣ニ女中ノ許一目錄ノ事如レ圖但是ハ眞ナリ是モ等輩以下ヘハ可レ除ニ進上一勿論除ニ實名一歟除ニ稱號一ヘシ依ニ充所一名字官途實名ヲモ除クナリ雖レ然女中方ヲハ一際敬フヲ道トスル也猶假名眞名ノ書交口傳アリ

御盃一枚二枚トハ不レ可レ書女房ヘハ唯一二トアルヘシ

ゑん上
御かうはこ　一
御ほん　一
万ひき

以上
まつたかつさ守　もと吉

甲陽軍鑑云

進上
御太刀　一腰　貞光
御馬　一疋　鞦毛印　笠目結

已上
武田治部丞
勝長

進上
御太刀　一腰
五百疋

已上

進上
鴈　一
鯛　一折
昆布　一折
御樽　三荷

已上
名字
名乗

進上

千疋

已上
名字
名乗

太刀　一腰
馬　一疋

以上
名字　是ハ等輩也
名乗

ゑん上
くゝゐ　一
たい　一おり
なかあはひ　一おり
くまひき　一おり
こふ　一おり
御たる　五か　是ハ女房のかたのしたゝめやう

以上
もりみんふのせう
さたのふ

五千疋なとにては此分候百貫文以上は千貫文なとゝ書候て可レ然候又女房へは千ひきとかなにて書候ゑん上もかなにて候

○進上目錄

常照愚草云諸家より進上の目錄古實とも在レ之進上の通より御字少上けて書流も有レ之以上をは進上より少しさけて書流も有可レ任レ心云々

○註文

吾妻鏡云養和元年八月廿九日癸酉爲二御願成就一於二若宮並近國寺一可レ令レ轉二讀大般若仁王經等一之旨被二仰下一(中略)至二伊豆箱根兩山一者今日被レ仰レ之註文者各一紙被送二遣彼山一云々

快元僧都記云天文二年二月九日神主山城守伊豆山ノ我觀坊同宿和泉相辺上野口ヱ氏綱爲レ使被二差遣一了同廿二日歸倉ス卽少々奉加有レ之三田彈正小菅平山大石不レ可レ有二相違一人數也內藤又御家風ニ參上ス不レ及レ申惣人數事以二註文一屋形樣被二仰付一

朝鮮軍令云段子金襴織物類用ニ候ハヽ以二注文一可レ被レ申候如何程も可レ被二召遣一候事

○貢馬注文

花營三代記云應永卅一年甲辰十二月廿七日大御所御方貢馬ニ官領へ成也貢馬注文御方へ參書寫

一物毛管領私ニ書畠山左衛門督入道々端

二山名左京大夫入道跡同右衛門督入道常照時宮

三土岐伯耆入道跡今ハ土岐二郎持益

四佐々木近江入道跡今ハ京極三郎持光

五赤松律師跡今ハ赤松大膳大夫入道性松

六佐々木左近大夫入道跡今ハ六角四郎兵衛持綱進上

七中條出羽入道跡今ハ中條伊豆入道

殘ハ自二公方一出

○御服月充注文

吾妻鏡云文應元年三月二十八日乙未和泉前司行方持二參御息所御注文於御所一將軍家覽レ之

正月

御小袿二陪織物三陪　御表着二陪織物三陪　重御衣十疊上二陪織物

御單　紅御袴　三御小袖

三御衣　二御衣　二御小袖二具　薄御衣

白御衣　御裳　色々御小袖五具　御夜衣

御明衣二今木二具　御櫛一束　御櫛拂

御拂　御疊紙　御眉墨　御眉造

御赭　御白粉　御護

二月

二御衣　二御小袖　色々御小袖五　御裳

三月同二月

四月

御袿二陪織物　合御衣五唐織物綾織貫可レ佐二事註一　更衣御單　合御衣合二御小袖　合御小袖三　紅御袴

御裳三

五月

御小袿二陪織物　御單　御捻重五重唐織物上二陪織物九

御小袖單重　紅御袴　二生御衣

合御小袖二　御帷五　御裳三　生御夜衣

七月

御小袿二陪織物　御單重二陪織物九唐織物九　御小袖單重

紅御袴　生御衣　御帷七

御裳三　御明衣二　今木二具

九月

御小袿生二陪織物　生七御衣上二陪織物九唐織物九　御單生二御小袖入御綿

紅御袴　二生御衣　御小袖五　御裳三

以上七箇月可レ爲二奥州禪門御沙汰一

六月

御單重　生御小袖　白御袴　生御衣

御帷七　御裳二

八月

二生御衣　御單　生御小袖　白御袴

生御衣　合御小袖三　御帷二　御裳二

御明衣

十月

御小袿三陪織物　八御衣上二陪織物　御單　二御小袖

紅御袴　三御衣　薄御衣　二御小袖

紅宿衣　色々御小袖五　御裳二

十一月

二御衣　二御小袖　色々御小袖五　御裳三

十二月同十一月

以上五ヶ月相州禪門御沙汰也

○引付注文

建治三年記云九月六日甚雨一番引付注文進二武州一

○進物注文

飯尾宅御成記云進物注文案料紙各小高檀紙

進上

御太刀　一腰鐵　御小袖五重練絹

御馬　一疋鞄毛　御太刀　一腰久國御物作

御香合　一堆紅　御盆　一枚剔紅

御太刀　一腰長光　御服　五重唐織繼綾
御太刀　一腰國宗　御服卷　一領黑革肩白
御槍　三幅本尊月脇牧溪　御盆　一枚堆紅
御太刀　一腰金太刀　御折刀　一行平御物作
御腰物　一腰小鍛冶御物作　御太刀　一腰宗近
御箱　一桂漆　御方盆　一枚堆紅
御茶器　一堆紅　御盆　一枚桂漆
御油滴　一同蓋堆紅　□□□□桂漆
御花瓶胡銅　御盆一枝堆紅
御食籠　一剔紅　御水入一胡銅
御盆　一枚堆紅同花　御印籠一堆紅
御盆　一枚堆紅　段子　三端紅色々
御盆　一枚金絲

飯尾肥前守之種

以上

上様進物案文料紙小高檀紙

ゑん上

御小袖　五かさね　御かうはこ一ついこう
御ほん一枚ついこう　御ふく五かさねからをり色々

御ひとり一こかれ　御ほん一まいひつこう
御ゑ二ふく　御ほん一枚堆紅
御きんらん一端あかち　御ほん一枚けいしやう
御やつき一ひつこう　御ほん一まいひつこう
御はこ一けいしやう　御ほん一枚　ついこう
御けんさん一同蓋ついこう　御ほん一まいけいしやう
御ちん五十りやう　御ほん一枚ついこう
御ゑきろう一けいゑやう御つるつほ一ゑろし
御ほん一まいひつかう　二千疋
御ほん一枚ついこう

以上

飯尾肥前守ゆき種

簡禮記云注文調様之次第折紙ノ事太刀折紙ト同前也發端ノ事貴人エハ進上ト可レ書レ之等蜜以下ヘハ進上アルヘカラス依二時宜一進上ヲ略シテ書事モアリ或ハ亦覺ト書事モアルナリ端作ニ注文ト書事アルヘカラス但口傳有レ之條數ノ事不レ定也何レ類々ヲ取合セテ書レ之モノナリ註方ニハ太刀馬ヲ書加ヘルコトアルヘカラス或ハ武具馬具或ハ服卷物絲類或ハ香具類ナルヘシ假令ハ

進上
一段子
一唐布
一唐莚
一沈香
一丁子
一白檀
已上

覺
一弓
一矢之羽
一鞭
一鞍
一鐙
已上

名字官途名乘

大概如レ此ノ趣ナリ依二充所一名官名乘ノ心得ハ同前也太刀目錄或ハ注文ナト納ルニハ以上ニ點ヲ懸テ返ス者也若急ナル事ニテ點ヲ掛カタキ時ハ中ノ紙ヲ取上紙計ヲ返ス者ナリ以上ニ點ヲ掛ルニ墨ヲ長ク曳ヘカラス又依レ事裏書ヲスル事モアリ其時ハ以上ト有レ之裏ニ書ナリ假令ハ御目錄之表致二拜領一候訖トモ御目錄之通請取訖トモ目錄之通令二披露一訖ナリトモ書月日アルヘシ宛所日ノ下ハ依レ人用捨可レ有レ之總而裏書ハ不レ好儀ナリ條々口傳

○進上注文

常照愚草云細川殿より大晦日に進上の注文引合一枚をしおりて調進なり上に何々と調いちのおく炭五十と被レ調候て以上にて名のりはかり如レ常あり次ニ要脚進二上之一万疋之をは百貫と被レ調候たゝ三千疋五千疋にて候ヘハ疋トかゝれ万疋の時ハ百貫トありしなり古ハ何も百貫の内も貫の字ありしとなり中古以來疋と被レ書候となり細川殿舊記をのこされ貫と被レ認云々是も完今より後は給レ申へきと諸人申事也

○一獻注文

蜷川親元記云寛政六年四月十日御一獻注文元親拾貫文ゑるし申候去年より過分由を申候へはそれは御さかな五人御前九前にて御座候

○具足注文

御產所日記云寛正四年八月十九日

御產所具足注文

一御ひやうふ　一さう
一御をしおけ　六
一御よりかゝり　一

一御まくら　一
一御こしかけ　一
一御ひはち　一
一御とうたい　二
一御ろうそくのたい　一
一御すみとり　一
一御さ　二てう
一御ひきめの御たゝみ　二てう
一御たゝみ　六てう
以上　貞宗はんあり
文明十八年
一はんの御產所御具足被下候
大せんのすけとのへ
一色々ちうもん
一御かちやう
一御さほ
一御かな物　四
一御ひやうふ　二さう大小
一御むしろ　二まいへりまろあや
一御よりかゝり　一

一御こしかけ　一
一御まくら　一
一御おしおけ　十二
一御きちやう　一
一御ひき物　一
一御すみとり　二
一御ひはち　二たいあり
一御ひはし　三せん
一御ふせこ　一
一たゝみ　十六てう御さ三てう御ひきめたゝみあり
一たうたい　八此内ろうそくのたい二たいあり
以上

武家名目抄稿第百七十冊

塙檢校保己一編

文書部十三

○起請文

吾妻鏡云承治五年三月七日於二武田一非レ无二御隔心一被レ尋二子細於信義一之所自二駿河國一今日參着於レ身全不レ奉二追討使一本自不レ存二異心一之條以二去年度々功一定思食知歟之由陳謝及二再三一之上至二于子々孫々一對二御子孫一不レ可レ引レ弓之趣書二起請文一令二獻覽一之間有二御對面一

又云建久四年八月二日丙申參河守範頼書二起請文一被レ獻二將軍一是企二叛逆一之由依二聞食及一御尋之故也其狀云

敬立申

起請文事

右爲二御代官一度々向二戰場一畢平二朝敵一盡レ忠以降全無レ貳雖レ爲二御子孫一將來又以可レ存二貞節一者也且又無二御疑一叶二御意一之條具見二先々嚴札一秘而蓄二箱底一而今更不レ誤而預二此御疑一不便次第也所詮云二當時一云二後代一不レ可レ挿二不忠一早以二此趣一可レ誡二置子孫一者也万之一仁毛令レ違二犯此文一者

上梵天帝釋下界伊勢春日加茂別氏神正八幡大菩薩等之神罰於可レ蒙二源範頼身一也仍謹慎以起請文如レ件

建久四年八月　參河守源範頼

此狀付二因幡守廣元一進覽之處殊被二咎仰一曰載二源字一若存二一族之儀一歟儀頗過分也是先起請失也可レ召二仰使者一廣元召二參州使大夫屬重能一仰二含此旨一重能陳云參州者故左馬頭殿賢息也被レ存二御舍弟儀一之條勿論也隨而去元曆元年秋之頃爲二平氏征伐御使一被二上洛一之時以二舍弟範頼一遣二西海追討使一之由載二御文一御奏問之間所レ被レ載二其趣於官符一也全非二自由之儀一云々其後無下被二仰出一旨上重能退下告二事由於參州一々々周章云々

又云建仁三年十月十九日甲寅佐々木左衞門尉定綱中條右衞門尉宗長爲二使節一上洛是將軍御代始也京幾御家人等殊挿二忠貞一不レ可レ存レ貳之由相二觸之一且可レ召二進起請文一之趣可レ被レ仰二遣武藏守朝政並掃部頭入道寂忍等之許一也兩人去九日出門云々

又云承久三年六月十七日庚午於二六波羅一勇士等勳功糺明其淺深一而渡河之先登詮者入二敵陣一之時事打二入馬於河一之時芝田雖二聊先立一乘馬中レ矢着レ岸之刻不二見來一云

云兼義云佐々木越ノ河事偏依二兼義引導一也遐迹爲二不知案内一爭進二先登一乎者難レ決之間尋二春日刑部三郎貞幸一云々以二起請一述二事由一其狀云

去十四日宇治被レ越事

自レ岸落時者芝田先立トイヘトモ佐々木勸仍芝田佐々木カ馬ノ弓手ノ方ヘアリ貞幸同妻手ノ方ニ罄エタリ佐佐木カ馬兩人カ馬ノアルヨリモ鞭タケハカリ先ツ中山次郎重繼又馬ヲ貞幸カ馬ニナラフ但是ハ中島ヨリアナタノ事也貞幸水底入テ後事不二存知一候以下略レ之

又云寛喜二年五月六日武州未二退給一去夜盗人事殊被二驚憤一之故也於レ侍召レ集自二去夜一參候之輩被二糺彈一其中恪勤一人美女一人有二疑殆分一仍參二籠于鶴岡八幡宮一可レ書二進起請文一之由被二仰含一畢十四日先日嫌疑恪勤美女依レ有二起請文之失一被レ糺二明子細一追二放御所中一件美女引級彼男一令レ盗條令二露顯一云々

貞永式目追加云諸人相論事證文與二證人一共以不二分明一者可レ及二起請文一歟證文證人顯然之時者不レ及二起請文一也

梅松論云和氏賴春師氏兄弟三人義貞の宿所に向て事の子細を問尋て勝負を決せむとせられけるに依て義貞野心を存せさるよし起請文を以陳し申されし間せいひつすこしこえ草紙云よしつね五位の尉にふにんのてう當家のぢう玄よく何事かこれに玄かん玄かりといへといまうれへふかくしてなげきせつなり佛神のたすけにあらすよりほかたゝなしこれによつて諸寺玄よしやの牛王ほうゐんのうらをもつて野心を更にそむせぬむねを日本國中の大小の神祇めうたうをおとろかし奉り數通の起請文を書進すといへとなほもつてゆうめんなし此國は神國たり玄んは非禮をうけ給ふへからすたのむところたにあらす則貴殿廣大の玄ひをあふきひんきをうかゝひかうふんにたつしひけいをめくらされあやまりなきむねをゆうせられはうめんにあつからは云々

太平記云菊池合戰條西陣僅ニ隔テ旌ノ文鮮ニ見ユル程ニナレハ菊池態ト小貳ヲ爲レ令レ耻金銀ニテ月日ヲ打テ著タル旌ノ蟬本ニ一紙ノ起請文ヲソ押タリケル此ハ去年太宰小貳古浦城ニテ已ニ一色宮内大輔ニ討レントセシヲ菊池肥後守大勢ヲ以テ後攻ヲシテ小貳ヲ助タリシカハ小貳悦ヒニ不レ堪今ヨリ後子孫七代ニ至ルマテ菊池ノ人々ニ向テ弓ヲ引矢ヲ放ツ事不レ可レ有ト熊野ノ牛王ノ裏ニ血ヲシホリテ書タリシ起請ナレハ今無レ惜心替リシタル所ノウタテシサヲ且ハ天ニ訴ヘ且ハ爲レ令レ知レ人也ケリ

花營三代記云應永廿八年六月廿九日可レ止二大飲酒一之由起二請熊野牛王一裏ニ以二連判一畠山中務少輔持清於二宿所一三十六人書訖注文有二別紙一在國其外少々人數ヲ加ヘス萬玄つけかたの次第云主人へすゝりれうしもちて參らする事きゑやうなとのときはふたのうへにれうしごわうをおきて持參する物也つねにはあひかはるへし心得へし

甲陽軍鑑云矢印の書樣(中略)右筆はさやを軸へこきさけ其上にて書物なり起請文も同前たるへし依レ之常には嫌もの也筆の軸も白軸か本也黑軸愁執也

伊達日記云氏家彈正親三河子共ニモ達大崎義隆ヘ奉公仕名生ノ城ニ居候城ヲイタキ義隆ヘ奉公仕候政宗彈正ニモ御疑心ノ間度々起請文ヲ上無二異儀一由申上候

愚耳舊聽記云大光寺貴趣之條玄かる所に淺瀨石大和方より小笠原伊勢守かたへ申遣しけるは其元の息女悴安藝方へ申うけたく候也御同心においては可レ添候といとこまやかに申遣しける(中略)双方祝儀をとりかはし日限まて申究し折から爲信公被二仰出一は我に敵たいする淺瀨石か方へ娘をつかはすへきいはれなし一定伊勢は逆心の奥意ありとて伊勢を押籠給ひける大和此よし傳へ聞きそれかしにおいて全御敵可レ仕覺悟夢々無二御座一候御敵不レ仕心底を可レ掛二御目一爲なりとて大光寺方にて隨一の者に後藤五郎左衛門と申者をたはかりよせあへなく首を打ちおとし其首に一紙の起請文を添て大浦へこそ送りける

大坂口質之卷云諸大名衆諸侍不二相殘一三通之御起請文御血判は頭の血也一ツハ御捨樣に被二召置一一ツハ豐國大明神江被レ爲レ籠一ツハ面々之手前に召置不斷見候へと被二仰渡一候秀康起請文は但靈社之起請秀吉公棺へ入候後悉途之鏡にすへし

又云市正儀は相煩申に付て京都に罷有養生仕候と駿河へ申上三日過て可二罷下一候條片時も大坂に罷有事不二罷成一候間御理承候て駿河へ可二罷下一段申越候を秀頼被二聞召一偖ハ左樣に候哉其身罷下其段申如何樣に候て可レ然候哉と御異見申上候てこそ日來親に被二仰付一候太閤の御意をも今には打捨申候處さりとてはさたのかきりと以外御立腹無レ限年來の仁を被二召置一萬事御内證御談合被レ成其仁次第に被レ成候付て大野修理大輔渡邊内藏助木村長門(中略)右三人は殊外市正殿問惡敷御座候御奉公之儀御座候間日來を引かへ如何樣にも市正に隨御奉公可レ仕候たたは同心仕間敷候間玄やうくはんの起請文を相調其言曰市正殿をは以來は大閤樣御同前に可レ奉レ存候條萬事日來

儀を被二相捨一御赦被レ申候へと書立市正罷下候は、見せ可レ申と相待候處に無理無體に市正同心なさせ可レ申と其上に同心不レ仕候は、御討果候樣にと談合相究候

大坂軍記云慶長十九年十月京都御着座被レ遊候時分早々市正主膳申上候は今度の仕合是非を可二申上一候やうも無二御座一候御陣中罷出候も迷惑申候よし申上候に付爲二御意一本多上野介より誓紙被レ遣候右誓詞寫

敬白起請文前書之事

一今度片桐市正殿同主膳殿大坂御立退被レ成候儀世上にて何角疑敷樣に申成候由承候大御所樣左樣之御疑毛頭無二御座一候若此旨於レ僞者抑日本國中大小之神祇別而八幡大菩薩伊豆箱根兩所之權現神罰冥罰を蒙り弓矢之冥加長々盡二親ヲ無間ニ沈メ大隅出羽迄も今生之冥加盡果來世者無間ニ沈候全僞に而無二御座一候爲レ其以二誓紙一心入候少茂御氣遣被レ成間敷候如レ件

慶長十九年十月廿一日　本多上野介血判

片桐市正殿

同主膳殿

○起請

宗像文書云

朝町彦太郎光世申軍忠事

去二日於二多々良一致二合戰一之刻分取之上舍弟光種討死之實否正見知否載二起請之詞一可二注申一候仍執達如レ件

建武三年三月廿六日　尾張權守花押　前豐後守花押　兵庫允花押

武藏孫次郎殿

○連署起請

吾妻鏡云弘長元年三月廿日壬午今日評定衆召二連署起請一常陸介入道行日依レ不二加判一可レ離二其衆一次引付衆等進二別紙起請一

貞永式目云

起請

御評定間理非決斷事

右愚暗之身依二了見之不一及若旨趣相違事更非二心之所曲一其外或爲二人之方人一乍レ知二道理之旨一稱二申無理之由一又爲二非據事一號レ有二證跡一爲レ不レ顯二人之短一乍レ知二子細一付二善惡一不レ申之者事與レ意相違後日之批經出來歟凡御評定之間於二理非一者不レ可レ有二親疎一不レ可レ有二好惡一只道理之所レ推心中之存知不レ憚二傍輩一不レ恐二權門一可レ出レ詞也御成敗事切之條々縱雖レ不レ違二道理一一同之憲法也誤雖レ被レ行二非據一一同之越度也自今以後相二向訴人幷其緣者一自身者雖レ存二道理一傍輩中以二其人之說一致二聊違亂一之由有二其聞一者已非二一味之義一殆貽二諸人之嘲一者歟兼又依レ無二道理一評定之庭被二弃置一之輩越訴之時評定衆之中被レ書二與一行一者自餘之計皆無道之由獨似レ被レ存之者歟條々子細如レ此若雖レ爲二一事一存二曲折一令二違犯一者

梵天帝釋四天大王惣日本國中六十餘州大小神祇別伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰各可二罷蒙一者也仍起請狀如レ件

貞永元年七月十日

沙彌（實泰左衛門尉入道）淨圓

相模大掾（佐藤）藤原業時

玄蕃允（大田）三善康連

左衛門少尉（後藤）藤原朝臣基綱

沙彌（二階堂氏藤大夫行盛）行然

散位（大炊寮頭兼伯耆守）三善朝臣倫重

加賀守（町野）三善朝臣康俊

沙彌（二階堂藤次郎）行西

前出羽守（中條）藤原朝臣家長

前駿河守（三浦）平朝臣義村

攝津守（大江）中原朝臣師員

武藏守（北條）平朝臣泰時

相模守（四）平朝臣時房

太平記云新田左兵衛佐義興自害條武藏少將義宗故脇屋刑部卿義助子息右衛門佐義治三人此三四年カ間越後國ニ城郭ヲ構ヘ半國計ヲ打隨ヘテ居タリケルヲ武藏上野ノ者共ノ中ヨリ無レ貳由之連署ノ起請ヲ書テ兩三人ノ御中ニ一人東國ヘ御越候ヘ大將ニシ奉テ義兵揚ケ候ハントソ申タリケル

建武式目追加云

敬白　起請文事

一御成敗之趣不レ叶二理致一子細在レ之者不レ貽二心底一可二言上一縱於二當座一雖レ不二存寄一有二思案仕出之旨一者不レ謂二遠期一可二申上一但至二堅固不辨之越度一者非二沙汰之限一事次就二公事一不レ存二無沙汰一事

一雖ㇾ爲二他人奉行一御裁許之篇目相違之由承及者可二申披一之旨對二申沙汰奉行人一可ㇾ申ㇾ之付就二御沙汰公事篇一不ㇾ可ㇾ構二虛言一事

右兩條令二違犯一者

日本國中大小神祇八幡大菩薩山王廿一社天滿自在天神御罰各可二罷蒙一也仍起請文如ㇾ件

永享三年十月廿八日

飯尾尼崎守藤左衛門尉三善爲秀
喜藤上野介方左衛門尉藤原熙基
左衛門尉平貞親
飯尾美濃守方散位　三善貞元
喜藤民部丞藤原基世
飯尾大和守　三善貞連
丹後入道斯波義孝子左衛門尉平秀藤
飯尾中務大夫方加賀守　三善爲行
問名對馬守　平貞清
喜藤加賀守　藤原基貞
飯尾肥前守三善爲種
子時公人於行松田丹後入道斯波義孝沙彌淨曹

安土日記云天正五年三月十二日雜賀表多人數永々御在陣忘國致二迷惑一土橋平次鈴木孫市岡崎三郎太夫松田源三太夫宮本兵太夫島本左衛門太夫栗村次郎太夫以上七人連署ヲ以テ致二誓詞一大坂之儀御存分ニ馳走可ㇾ仕之旨御請申ニ付被ㇾ成二御赦免一

○連判起請

義光物語云万民の爲にヶ樣に思ひ立各々も一味し給へと頼みけるに何れも屋形にあき果たる事なれは願所の幸と我もわれもと同心しける然らは連判の起請文を認むへしとて夜更人靜てみな〳〵中務所へ集りけれは則備前守前書を出しけるに各判形を相する備前守に渡しける

新田由良家傳記云

起請文

一今度被ㇾ覆二先忠一上は散二先段之遺恨一於二自今以後一盡未來不ㇾ可ㇾ有二等閑一事

一大敵令二蜂起一者無二及後詰一候行進退不ㇾ可二見放一事

一有二佞人一申二妨子細一有ㇾ之者可ㇾ遂二糺明一事

巳上

右三ヶ條於ㇾ僞者可ㇾ蒙二惣而日本國中大小神祇別而伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡菩薩御罰一者也仍起請文如ㇾ件

永祿九年丙寅九月五日

氏康在判
氏政在判

横瀨信濃守殿
同　六郎殿

書簡故實云起請文可ㇾ書樣之事

敬白　起請文之事

古之趣は夜前之儀僞候毛頭心底非二疎略一候

一於二向後一者如何樣之儀候共直段可二申明一事

一互申合條々聊以別儀有間敷候事

右之條々此旨於二相背一者日本國中六十餘州大小神祇惣伊豆箱根三島大明神別氏神可ㇾ蒙二御罰一者也依起請文如ㇾ件

天正八年五月日

飯尾大和守長勝判
松本左衛門大夫貞元判
山本攝津守久勝判

秋庭備中守殿

凡此趣也其宗々により神名帳なと改書へし一筋に不ㇾ可二心得一靈社七枚起請文は此外にあるへし又宛所の事其人と宛所不ㇾ書事も有時宜によるへし又門弟に成りたる時師匠より起請文なとの時可ㇾ書事致二傳授一申數ヶ條雖ㇾ爲二一事一致二他言一間敷候なと、有へしまた師匠よりは令二傳授一事少も相洩し不ㇾ申候文言色々可ㇾ有ㇾ之連判之時は奥次第賞翫之人をおく也うら書も同前也おくあかり候也條々口傳有ㇾ之

○七枚起請

長門本平家物語云土佐房夜討條判官のたまひけるは和僧は義經をうちにのほりたな大名をもしかるへき人をもうちてにのほすへけれともなか〳〵ようしんをしおちかくる、事もあり和僧のほりて夜討にせよとてかまくらとの、のほせられたるなとのたまへはいかてか其儀候へき起請文つかまつり候へしと申けれはかならすか、んとはおもはねともか、うか、しは和僧かこ、ろなりとのたまへは熊野の寶印のうらに起請文七枚かきて一まいをは昌俊やきてのみけり

嘉吉物語云我々を御對治あるへきとの御たくみにより現在にそのむくひありて我々は若黨の手にか、りたまふ事玄かしなから御先祖の御起請に赤松絶は我もたえんと七枚あそはして八幡と御所樣と我々か家とに御おき有なからそれをおわすれ候てかやうの事をおほしめしたち候ゆ

へそかしとおほゑて候

室町殿物語云毛利家大軍にて海陸より襲來せしかは秀吉うちとられ給はん事は疑ひなしと風聞申候然所に秀吉俄に愛を入て兩川へ去きりに和睦を乞たまへと毛利方には當家之領分いさゝかもさまたけなきにおゐては別に子細なくとある儀に付てほとなく事調人質たかひにとりかはしけるその上に筑前守七枚起請を書て兩川へ渡し給ふ

毛利家記云慶長二年朝鮮へ又諸勢ヲ可レ被二差渡一トテ元日ニ秀吉公被二仰出一シハ安藝宰相事今度モ爲二大將一可二差渡一ナレハ其用意可レ仕由御諚ニ付テ諸卒ニ用意ノ沙汰マシマス然ハ二月ニ人數備ト御掟ノ條數ノ御書付ヲ出サセ給フ共條々（中略）七人ノ者共ニ七枚起請カヽセラレ諸事有樣ノ體可二申上一旨被レ付候條忠功之者ニハ可レ被レ加二御褒美一自然背二御法度一族有レ之者右七人申次第不レ寄二誰誰一八幡大菩薩可レ被レ加二御成敗一候條得二其意一不レ可レ有二油斷一候

書札袖珍寶云牛王を上につく事神を恐れて白紙より上に是をつくなり牛王をひるかへして裏に可レ書レ之中古此かたの例なり一熊野牛王二はちまん牛王三勢田牛王四山王牛王五白山六富士七大峰之牛王御きやう如レ常但紙と牛王の祈は如レ古也私曰七所の牛王無レ之時は熊野牛王斗七枚にて可レ書レ之也

○一紙誓言

太平記云（足利殿御上洛條）長崎入道圓喜怪レ之思テ急キ相模入道ノ方ニ參テ申ケルハ誠ニテ候哉覽足利殿コソ御臺君達マテ皆引具シ進セテ御上洛候ナレ事ノ體怪ク存候加樣ノ時ハ思召立事モヤ候覽異國ヨリ吾朝ニ至マテ世ノ亂レタル時ハ聞王諸侯ヲ集テ牲ヲ殺シ血ヲ啜テ武無ラン事ヲ盟フ今ノ世ノ起請文是也如何樣足利殿ノ御子息ト御臺トヲハ鎌倉ニ被レ留申テ一紙ノ起請文ヲモ可レ被レ進トコソ存候ヘト申ケレハ相模入道ケニモトヤ被レ思ケン頓ニ使者ヲ以テ被二申進一ケルハ東國ハ末世閑ニテ御心安カルヘキニテ候幼雅ノ御子息ヲハ皆鎌倉ニ留置進セラレ候ヘシ次ニ兩家ノ體ヲ一ニシテ水魚ノ思ヲ被レ成候上赤橋相州御緣ニ成候彼是何ノ不審カ候ヘキナレ共諸人ノ疑ヲ散セン爲ニテ候ヘハ乍レ恐一紙ノ誓言ヲ被二留置一候ハン事公私ニ付テ可レ爾コソ存候ヘト被レ仰タリケレハ足利殿鬱胸彌深カリケレ共憤リヲ押ヘテ氣色ニモ不レ被レ出是ヨリ御返事ヲ可レ申トテ使者ヲハ被レ返テケリ

○誓文

由良家傳記云常々成繁公御誓文にまて志津の刀之切ぬ事もあれと御意被レ成候名譽なる御刀にて御座候

籾井日記云（詫美七郎往越後上杉喜平次景勝許叛國條）又北國筋ヘマヒラレ候堀江左衛門河島監物上木十郎等歸リ候テ朝倉家ノ殘黨其外北國ニテ弓矢ヲ召ルヽ男トモ大勢連判シテ一味致シ存命ノ本望ハコレニ過ルコトハナシト落涙シ齒カミヲシテ勇ミ進ミテ訴訟ヲ申ニテ候其人々ハ朝倉佐渡守同名小掃部（中略）二百餘人ニ及ヒ命ヲハ兩御屋形樣ヘ奉ル體ノ上ニテモ鬱憤ヲ散シ申シ度ト血判ノ誓文ニテ無念晴トサマサマ申越候

藤葉榮衰記云爾程ニ須賀川御旗本衆二心ナク上下志ヲ一ツニシテ殘ラス登城アリテ被レ申ハ西方衆草ノ風ニ靡クカ如ク正宗ヘ皆ナ思寄ケレハ當地ノ人ノ心ヲ我存セス又タ膝ヲ交エ肩ヲ双フル傍輩モ某カ心ヲ不レ可レ被レ知今度無二二心一命ヲ捨テ伊達勢ニ向ヒ防キ戰ヒ武勇ノ働ヲセラレント被レ存詰衆ハ身不肖ナリト云トモ志ヲ一筋ニ守リ心底ヲ白地ニ顯ハシ誓文ヲ以テ互ニ傍輩ノ中疑心ナク一味同心ニ合戰シテ我モ人モ討死センニハ何ノ恨カ有ラント云ケレハ此儀可レ然トテ千用寺秀藝法印ト如林寺明良法印ト兩寺登城在テ明良法印誓文ヲ遊シ熊野ノ牛王ヲ灰ニ燒テ酒ニ入レ呑ケル

○誓狀

吾妻鏡云寛喜三年九月廿七日日中名越邊騷動敵打ニ入于越後守第ニ之由有二其聞一武州自二評定座一直令レ向給（中略）越州聞二此事一彌以歸往卽潛載二誓狀一云至二于子孫一對二武州流一抽二無二忠一敢不レ可レ挿二凶害一云々其狀一通遣二鶴岡別當坊一一通爲レ備二來榮（葉カ）之廢忘一加二家文書一云々

太田康有記云建治三年七月廿五日評定衆誓狀申ニ加新衆署判一可二進入一之由以二平金吾一蒙レ仰了

新式目云政務事（正應六五廿五評）任二先例一可レ被レ召二評定引付衆並奉行人等起請文一且不レ可レ取二賄賂之由可レ被レ召二奉行人誓狀一於二無足之輩一者可レ有二御恩一至二廉直之仁一可レ被二賞翫一歟

○誓文狀

殿中申次記云依二歡樂一不參之時者兼日以二誓文狀一可レ被レ申レ之云々

清正記云有馬大村平戸唐津勢茂志岐乃城へおしつめ丸山に陣を取林專と有馬ハ緣者の事なれは小西有馬をして和平を入林專下城におゐては秀吉公へ申よきにはからふへきよし誓文狀を調着こさゝるゝにつき有馬其狀ヲ城中へ送屆により大方は和睦せんと林專內存に有しかともいま

た返答これなきに付て惣軍勢昼夜のさかひもなく竹たはを以て押寄る

○誓紙　誓詞

新田良由家傳記云藤生紀伊守官上之條　御勘定奉行ハ其身實ニ思案の能者に誓紙被ニ仰付一其役を相勤候樣に折々御穿鑿被レ成可レ被ニ仰付一候

又云氏政由良六郎由良信濃守に送條目　十一日之返札今十五辰刻到來(中略)始同名家老之者舊冬廿七日初而爲ニ申聞一候此度無ニ僞條一顯ニ誓詞一事

甲陽軍鑑云信玄公殊之外御腹立是非に及はす山縣三郎兵衛迷惑いたし既に改易たるへきに原隼人佐三枝勘解由左衛門曾禰與市助三人の名所にて熊野の牛王のうらに誓紙を仕る

毛利家記云輝元大坂ノ船場ノ屋敷ニマシマシケルニ備後守見舞トシテ京ヨリ下テ種々捧物ナトアリシ輝元モ別テ馳走シ給然ハ備後守被レ申シハ秀次公ヘ内々御懇切ヲ盡サセ給フ彌可レ有ニ御馳走一トノ誓紙ヲ進上候ヲ可レ然存候云々

甲陽軍鑑末書云三河先方ノ中ニ奥平父子フリ惡キュヘ誓紙ヲ仰付ラレ其上九八郎女房ヲ人質ニ召登ルヽナリ

矢島十二頭記云右七人の者ともの下知を相背申さす一命を輕し軍場ニ望テ一足モ退き申間敷よし誓紙をかき炭に燒て志田殿の下知次第相背申間敷段阿部與四郎へ申合云云

伊達日記云義繼へ會津以下ノ衆疑心被レ申候樣ニト被レ存境ヲシツメ如ニ跡々一二本松ヨリモ入覓ノ體候其存分政宗公ヘハ被ニ申上一候ヘトモ若輩故爲レ聞不レ被レ申候此境事切候ハヽ彌以强可レ成候間申上事切無用之由我等ニ兩度迄誓紙ヲ爲レ致二本松境無事ニ被レ仕候

松隣夜話云信長大キニ服心ニテ卽座ニ誓紙ヲ書給ハルヲ以テ筑前守モ二心ナク安土ノ味方ニソ究リケル

聚樂第行幸記云殿下つら〳〵行末の事なと工夫ましますにたゝいま雲上になしをかるゝ人々はみな殿下の恩惠あさからすかけまくもかたしけなき殿上の交をゆるされこの行幸にあひ奉るものかなと感悅する輩也子々孫々に至ては若この薫德をわすれ無道の事もやあらんとおほしめしてあらたに昇殿有し人々尾州の內府駿州大納言をはしめみな禁中へ對し奉り誓紙をしてあけらるゝるにおいては悅おほしめさるへきよしなり

松原自休手錄云吉時度々ノ忠儀大悅ノ餘リニ可レ被レ遣ニ誓紙一之處ニ達テ辭レ之依レ之爲ニ名代一井伊兵部カ賜ニ誓紙一而シテ領ニ越府一五萬石

天正記云備中高松落城之條もりけよりこんはう條々にまかせ五ケ國並人ちせいし請取まつ毛利家の陣をはらはせ云々

書禮袖珍寶云誓詞前書條數三ケ條之法也付書ハ不レ苦但ケ條多在レ之時は法外也條數多とも一書ハ半なり惣別誓詞にかきらす一書は半に可レ然歟

又云誓詞之事侍ニハ式目ニ愛宕を書入なり下々百姓等には靈社の誓詞也侍は靈社不レ書由也

○誓書

織田信長譜云信長母爲ニ信行一請ニ和睦一且使ニ信行獻ニ誓書一信長許レ之

東遷基業云神君甲信二州の歸降の士を遠州秋葉寺に會し赤心無二の誓書いたすへしと仰付られ成瀨吉左衛門正一日下部兵右衛門定好を目付として七百五十七人誓約をなしける

○告文

太平記云懸源禪門逝去條　此禪門依レ被レ申將軍鎌倉ニテ僞テ一紙ノ告文ヲ殘サレシ故ニ其御罰ニテ御兄弟ノ中モ惡ク成給テ終ニ失給歟云々

賴印僧正繪詞云關東前管領上相刑部大輔入道々彌去三月八日自害ノ刻舍兄道合土岐善忠對治ノ大將トシテ數万騎ヲ率シテ上洛ス暫伊豆ノ三島ニ信宿ス(中略)道彌自害ニヨリテ關東野心ノヨシ洛中ヘ徹スル間武衛驚テ自筆ノ告文ヲ認テ瑞泉寺古天和尙ヲ使トシテ將軍陣謝申サル、處ニ五月二日將軍自筆ノ狀ヲモテ子細アルヘカラサルヨシ返事アリ

明德記云氏淸ヲ御退治有ヘキトテ樣々ノ御內談共有ケルヲ奥州傳ヘ聞給テ思ハレケルハ事イマタ定サルサキニ朝敵ト成テハ叶ヘカラス暫ク謀リ事共ノ定ラン程先日ノ科ヲ謝セン爲ニ緩急ノ儀ヲ存セス短慮ノ狀コソ不思議ナレ其詞云所詮諸方讒訴ナリ一向御免ヲ蒙ハ畏リ存ヘキ由再三歎申サレケレハ御返事ニハ不儀繁ナリト云ヘトモ先日ノ病ト稱シテ宇治ヘ成申シナカラ參セスシテ還御成シ緩怠常ノ篇ニ絕タリ然トイヘトモ去難ク歎申上ハ虛病ヲ構サル由ヲ告文ヲ書進上申サレハ御免アルヘキヨシ仰下サレケレハ京都ハ御由斷アリケル

○神文

籾井日記云元來丹後但馬ナトハ邪欲ノ不義者トモノ風儀モ多〳〵候ヘハ密々ニ同意ノ色ノ者モ見ヘ織田カ家風ヲウ

ラヤミ申ス者ニ風說モ候仍テ兩國ノ內ニ松田ニモ小田垣ニモ少々下知ヲカルシメ申ス色ノ者モアルト松田小田垣等注進ニテ候ユヘ伏谷美濃殿沼田左馬助殿澁谷因幡殿ニ西方衆小野木縫殿之助谷大膳雲林院式部足立萩野等ノ歷歷衆參ラレ御成敗ノセンサクヲ遂ケラレ候ニ兩國ノ旗頭トモ色々ノ申ワケノ所謂ノ候テ神文ヲ奉リ人質ヲ丈夫ニ出シテ候

又云（水上宗貞自筆條）信長モ信忠モ右ヨリ和談ヲ入ヨ勇士ノ家ニテ惜キ次第ヨト元來カ眞實ヨリモ度々下知スル旨ナレハ三七上野七兵衛ヲモ尤ト分別シテ大膳院西藏院高木筑後ヲモ召候テ存念ヲ申シ幷ニ三七上野ラカ目代使ヲ認メテ神文マテ巨細ニ沙汰シテ申シ送ルハ信長當國ニ對シテ怨敵ノスヘアルニ非ス

○湯起請文

建武式目追加云江州田上杣庄與二國牧庄一山堺相論湯起請文事兩方載下號二根本堺一牓示之名斗上可レ被レ書レ之歟

壒囊抄云湯起請ハ武內宿禰ヨリ始ト申習セリ其故ハ應神天皇御宇九年四月ニ武內ノ大臣ヲ筑紫ニ被レ遣民課ヲ治メシメラレシ間舍弟甘美內宿禰兄ノ職ヲノソミテ密ニ天皇ニ讒奏シテ申サク武內王位ヲ志シテ異國ヲ語テ都ヲセメント企候ト申ケレハ君大ニ驚キタマヒテ軍兵差下テ武內ヲ可二誅伐一由仰ラレケレハ御使下リヌ武內此事ヲ聞タマイテ我レ忠節ヲ致スヨリ外ニ隱謀无ケレトモ无實ノ罪ニ行レン事无念也トナケカレケレハ眞根子ト云フ翁來テ我容貌相似ルナレハ命ニ代リ奉ラム早ク京ニ上テ明メ給ヘト申ケレハ武內大ニ喜テ南海ヨリ廻リテ紀伊ノ湊ニ付給フ官軍ハ眞根子カ頭ヲ取テ上リヌ武內天皇ノ御前ニ參テ過タヌ由ヲ陳シ給フ程ニ甘美內ヲ召合テ對決サセラルヽニ兩人堅ク論シ相テ是非難レ定其時天皇神祇ニ祈給テ銅ノ湯ヲ涌シテ各手ヲ入ヨ無レ科者ハ其手不レ可レ損ト勅定有シカハ武內手ヲ入給ニ水ニ入タル如シ甘美內ノ手ヲ入シニ肉皆落テ骨計リニ成ニケリト云ヘリ是ヲ例トス

○牛王

吾妻鏡云文治元年五月廿四日源廷尉欵狀以二諸神諸社牛王寶印之裏一不レ挿二野心一之旨奉レ請二驚日本國中大小神祇冥道一雖レ書二進數通起請文一猶以無二御宥免一

新田由良家傳記云國繁公顯長公證人ニ仕候上城々相渡し候へのよし北條殿より横地左近石卷右馬助兩使を以て申候處に（中略）妙印樣には白ねりを御召下に御具足めし御刀脇差御指被レ成朱柄の長刀を御ひさの下に御置被レ成候てはかみを被レ成御下知被二仰付一候間此儀可レ然旨御一門幷御家中一同候間さらは牛王を燒水に立て千騎餘の侍とも被レ下て候

蜷川親元記云文明十五年正月八日壬寅八幡橘本坊祐圓より御香水牛王まいる

書禮袖珍寶云牛王つきやう牛王は上紙は下になるやうに可レ然也

○起請失篇目

吾妻鏡云嘉禎元年閏六月廿八日今日被レ定二起請失之篇目一所謂鼻血出事書二起請文一後病事（但除二本病者一）鴉烏矢懸事爲レ鼠被レ淦二衣裳一事自二身中一令レ下レ血事（但除下用二楊枝一時井月水及痔病者上）重輕服事父子罪科出來事飲食時咽（但被レ打レ背之程可レ定レ失者）乘用馬斃事已上九箇條是於二政道一以レ無レ私爲レ先而論レ事有レ疑決二是非一無レ論故仰二神道之冥慮一可レ被レ糺二犯否一云々信濃左衛門尉行泰圖書允清時清判官清原季氏等爲二奉行一申沙二汰之一云々

貞永式目追加云

定

起請文失條々

一鼻血出事

一書二起請文一後病事（但除二本病者一）

一鴉烏矢懸事

一爲レ鼠被二淦衣裳一事

一自二身中一令レ下レ血事（但除下用二楊枝一時井月水女及痔疾者上）

一重輕服事

一父子罪科出來事

一飲食時咽事（但以二打レ背程一可レ定レ失者）

一乘用馬斃事

右書二起請文一之間七ケ日中無二其失一者今延二七ケ日一可レ令レ參二籠社頭一若二七箇日猶無レ失者就二惡道之理一可レ有二御成敗一之狀依レ仰所レ定如レ件

文曆二年閏六月廿八日

右衛門大志清原季氏
左衛門少尉藤原行泰
圖書少允　藤原清時

武家名目抄稿第百七十一册

塙檢校保己一編

文書部十四

○軍法

慶長見聞記云

軍法

一喧嘩口論堅停止之上若違背之輩者不レ論二理非一双方共可二誅罰一或ハ傍輩ノ思ヲナシ或ハ知音ノ好ニヨリ荷擔之族有レ之者本人ヨリモ曲事タルノ間急度可二申付一事

一於二味方地一放火并亂妨狼藉停止ノ事付作毛ヲ取散田畠ノ中不レ可二陣取一事

一於二敵地一男女ヲ不レ可二亂取一事

一先手ヘ不二相斷一物見不レ可レ出事

一先手ヲ指越縱高名トイウトモ背二軍法ヲ一上者可二成敗一事

一無二子細一他ノ備ヘ相交輩有レ之ハ武具馬トモ可レ取レ之然上其主人及二異義一者トモ以可レ爲二曲事一事

一人數押ノ時不レ可二脇道一ノ由堅可二申付一若妄ニ通ルニ付テハ可レ爲二曲事一

一爲二時ノ使一如何樣ノ者ヲ指遣ストイフトモ不レ可二違背一事

一諸事奉行人ノ指圖ヲ不レ可二違背一事

一持鑓ハ爲二軍役ノ外一間長柄ヲ指置持タスル事令二停止一但長柄ノ外ヲ爲レ持者主人馬廻リニ一本可レ持事

一押買狼藉スヘカラス事

一小荷駄押ノ事兼日軍勢ニ不二相交一樣ニ可二申付一若相交族有レ之者其旨可レ爲二曲事一

一無二下知一シテ不レ可二陣拂一事

右條々若於二違背ノ輩一者忽可レ處二罪過一者也

慶長五年六月日

○陣觸

謙信家記云（輝虎公備定條）家老トモヲ集領分ノ國々ヘ觸ラレケルハ來年三月中旬ニハ越府ヲ打立都ヲ心懸出陣アル間一人士卒ヲキンシ馬武具ヲ用意イタシ日限ヲ不レ違罷リ出ヘク候各之著到ノカンカヘ書付ヲ以テ可二申越一ト有テ越後佐渡飛驒越中加賀能登上野出羽右八ケ國ヘ陣觸レアリケル

天正記云（信かた逆意條）秀吉又安土に到り國々の諸侍禮義を調もつはらそんけうすあたかも將軍御さいせの時のことし誠に君臣のれいしよ人のかんする處なり安土に十餘日逗留し其後又山崎へ打歸り諸國の陣觸をなし軍兵なかはまによせきたる

松鄰夜話云利長加賀へ皈リ大聖寺ヲ語ラヒ人數ヲ出シ折折越中ヘ相働キ河田豐前守領内椎名口ヲ放火ス河田モ備ヲ出シ晝夜迫合雌雄半ナルヨシ謙信聞玉ヒ則陣觸アリテ四月下旬二万三千ニテ越中ニ御越椎名ニテ兩日御馬ヲ立ラレ諸老ヲ會シ評定シ玉フ

當代記云慶長十九年十月四日右兵衛督立二駿府一出二陣奥州一關東中ヘ自二江戸一有二陣觸一

○陣札

祇園執行日記云天文元年九月十二日鞍馬口ヘハ郎衆陣札打ニ出候トテ皆々京中笑歩行候三二人四五人打候ケニ候」

松隣夜話云山根ノ城落テ引返シ給フ途中ヨリ先達テ侍二人被二仰付一前橋越中ニ於テ各役所ヲ割リ分ケ陣札ヲ令レ打給フ

○合戰記錄

吾妻鏡云元暦元年二月十五日甲戌辰刻蒲冠者範頼源九郎義經等飛脚自二攝津國一參二着鎌倉一獻二合戰記錄一云々

又云正治二年正月廿三日庚戌酉剋駿河國住人并發遣軍士等參着各獻二合戰記錄一廣元朝臣於二御前一讀二申之一其記云

正治二年正月廿日於二駿河國一追二罰景時父子同家子郎等一事

一蒲原小次郎最前追二責之一討二取梶原六郎同八郎一

一飯田五郎手討二取二人（景茂耶等）

一吉香小次郎討二取三郎兵衛尉景茂一（手討）

一澁河次郎手討二取梶原平三郎家子四人一

一矢部平次手討二取源太左衛門尉平二左衛門尉狩野兵衛尉已上三人一

一矢部小次郎　討二取平三一

一三澤小次郎　討二取平三武者一

一船越三郎　討二取家子一人一

一大内小次郎　討二取郎等一人一

一工藤八手工藤六手討二取梶原九郎一

正月廿一日

○合戰日記

關岡家始末云義實姉川合戰ノ日記ヲ考テ繪圖ヲ造リ義

昭公ニ獻ス

○合戰繪圖

軍防令云凡申二勳簿一皆具錄二陣別勳狀勳人官位姓名左右廂相捉ノ姓名人別所レ執器仗當團主帥本屬官軍賊衆多少彼此傷殺之數及獲賊軍資器械一辨二戰時日月戰處一并畫二陣別戰圖一（謂勳狀功績之外別有戰圖也）仍於二圖上一（謂戰圖之端首）具注二副將軍以上姓名一附レ簿申二送太政官一勳賞高下臨時聽レ勅

籾井日記云（信長攻浅宗貞ニ御對面之條）大將家宗貞公播州御進發ノ次第先手四方備ノ旗頭衆ニハ山名和泉守（中略）御一族方ニハ廣澤中務綱忠殿林宗右馬助長宗殿櫛田豐前守利種殿等ヲ始トシテ一陣々々ツヽ進マレテ候內備外備トモニ一陣々ツヽ餘多ニ分ケテ何レモ皆御繪圖次第ノ定メノコトトモ候ナリ

駿府記云慶長廿年五月二日淺野但馬守使者到來去廿九日合戰繪圖同記錄并大野彌五左衞門首獻レ之云々

○武略狀

大內義隆記云義隆ヲ隱居サセ申サンニヤ又失ヒ申カトノ評定有シ時伊香賀市次郎申セシハトテモタクミノムホンナラハ御父子トモニ失ヒ申サスハ家ノ亂ハヤミ候マシキナレハ御曹子ヲモ諸トモニ殺シ奉リ其後屋形ノ次男八郎殿ヲ先年ヨリ御契約ノ事ナレハ迎ヒ取ツテ屋形トセハ國土長久ニ候ヘシト申ニ尾州同心シ武略狀ヲソマハシケル

○計策文

甲陽軍鑑云御大將其下侍大將足輕大將近寄の頃迄不レ存して不レ叶事（中略）計策文の認やう一字の事七佛の事口傳有

○高名帳

甲陽軍鑑云己は卅に餘四十に及ひ或は四十に餘るといへともついに一度も手柄もなし然れとも虛言をいひてかうたてを申て冠る其身所へ出入する者は是を鬼や神の樣に申を能糺て聞は己か內の小者なんとを被官にいひつけころさせ又は適合戰せりあひにあふては被官の取たる頭なとを高名帳にのせ一本鎗をつきたるほとにいひまわれともいつその程に其被官を追出せは下劣の者の淺間敷は其主につかはるゝ內はかくせとも出て後幾年過ても主のあしき儀悉く化を顯すもの也

○軍忠狀

三刀屋文書云

出雲國三刀屋太田庄藤卷村地頭左兵衞尉宇佐輔景今年（建武三）正月十日令レ發二行山崎一致二軍忠一同日行幸口口仕於二叡山一任二左衞門尉一則屬二于當御手一令二勤仕一西坂本口同廿七日合戰自二加茂河原一迄二于七條河原一抽二軍忠一之旨伯耆四郎右衞門尉并安藤彌二郎入道等令二見知一者也同時合戰伯耆中務丞相共於二一條河原并桂河以下所所一致二軍忠一迄二于西山峯堂一令二發向一之條御見知之上伯耆中務丞相以下同時合戰顯然也然者云二行幸供奉之功一云二度々軍忠一無レ隱上者賜二御證判一彌欲レ抽二忠節一以二此旨一可レ有二御披露一恐惶謹言

建武三年二月日　　左兵衞尉輔景

進上　御奉行所　　船田長門守經政（花押）

大友與廢記云（備前高平攻・備前兩城攻條）宗麟公御諚には（中略）分捕高名のかたには御感狀有其辭に曰

前廿到二黑木兵庫頭要實猫尾一取二懸里城一被二打崩一之剋統幸別而依レ被レ勵二馳走一家中之者軍勞之段以二軍忠狀一承候之條加二袖判一進候今度粉骨之次第追而一段可二賀申一候恐惶謹言七月廿六日義統在判田村作進殿

○手負著到

吾妻鏡云建保元年五月六日丙午仰二行村行親忠家等一被レ註二今度亡卒生虜等交名一各日來廣尋二記之一遂所レ令二獻上一也歷二御覽一之後被レ預二廣元朝臣一云々其狀云（本ニハ具記之今略レ之）（人數斗記レ之）

建曆三年五月二日三日合戰被レ討人々日記

和田左衞門尉同新左衞門尉朝夷名三郎同四郎左衞門尉同五郎兵衞同六郎兵衞同七郎同新兵衞入道同八郎同五郎同宮內入道同彌次郎同彌三郎（此外小者郎等ハ不注以上十三人）

一橫山人々

橫山馬允　屋那井の六郎　平山次郎　○下略

以上三十一人

一土屋人々

大學助　同新兵衞　同次郎　同三郎　○下略

以上十人

一內山人々

山內左衞門　同　太郎　同　次郎　○下略

以上二十人

一澁谷人々

澁谷せんさの次郎　同三郎　同五郎　○下略

以上八人

一毛利人々

毛利太郎　同小太郎　同小次郎　○下略

以上十人

一鎌倉人々

梶原刑部　同　太郎　同小次郎　○下略

以上十三人

一逸見五郎　同次郎　同太郎　○下略

以上三十三人此外小者郎等者不ㇾ記ㇾ之

一捕虜人々

愛甲左衛門　同太郎　おほちはの三郎　○下略

以上二十七人

一御方被ㇾ討人々

筑後四郎兵衛　壹岐兵衛　同　四郎　○下略

以上五十人此外手負源氏侍千餘人

書禮袖珍寶云

手負着到事

紙の端に如ㇾ件おきてたとへは

手負注文付討死事

太刀疵深手被ㇾ之　曾根川内匠助

鑓疵　薄手被ㇾ之　吉川武兵衛門尉

矢疵　深手被ㇾ之　速川與兵衛尉

右雖ㇾ無ㇾ之鐵炮疵ハ此可ㇾ然カ

討死何時もおさめ也　前山作右衛門尉

右何十何人也如ㇾ此末に書すて也と書也

常の着到は紙二ツ折にしてとちて書也手負の着到は竪紙にして繼て可ㇾ書也主人ノ一ツ手負注文の時は太刀疵にても鑓疵にても名の下に疵付を可ㇾ書也たとへは

西山丹波守　鑓疵深手被ㇾ之

○頸注文

和翰集要云首注文事

康安三年九月七日於ニ薩摩國青塚原ニ一戰之剋討捕之頸注文事

首一柳島九郎　蒲崎甚内討ニ捕之ㇾ

首二細田久内　古山甚平　道方丹波守討ニ捕之ㇾ

首一高山左内　吉岡左平　玉島民部少輔相討

首一名字不ㇾ知　川島壹岐守討ニ捕之ㇾ

右首數都合七百四拾也

此外討捨不ㇾ可ㇾ數

花營三代記云康曆二年七月廿日橋本以下賊首和泉國守護山名奥州執ニ進之ㇾ去十七日合戰討取之内爲ㇾ宗之首十一京ニ著之ㇾ

頸注文

橋本民部大輔　捕手上田次郎右衛門尉（高山民部少輔）

同新判官　捕手蓮池九郎

同雅樂助　捕手井田摺部助

同彌九郎　捕手荻野源左衛門尉

上野源三左衛門尉　捕手　安田　四郎

同　彌四郎　捕手　荻野　五郎

下村次郎左衛門尉　捕手　小林中務丞

毛穴五郎左衛門尉　捕手井上兵庫助

磯部雅樂助　捕手多胡四郎左衛門尉

櫻井彌次郎　捕手　梶村彈正忠

新田由良家傳記云

屬ニ芳春院ニ態申上候御悦喜候然は去五日黑河谷寄居二ヶ所打ㇾ敵其上同八日於ニ五覽田根小屋ニ沼田衆三百餘人討取頸之注文致ニ參上ㇾ候戰功之至心地好仕合專要候猶彼筋珍義節も言上尤候委碎芳春院可ㇾ被ニ申遣ㇾ候恐恐謹言

九月十四日　義氏直判　由良刑部大輔殿

織田信長公家臣久德高矩所藏文書云

舊冬廿七日久德構へ被ニ取懸ㇾ之處及ニ一戰ㇾ久德江口首之注文到來近頃之可ㇾ然神妙候彌々當春早々可ㇾ初早行之間彌馳走候樣に可ㇾ被ニ申聞ㇾ候猶藤吉郎可ニ申上ㇾ候謹言

正月二日　信長花押　堀次郎殿

安土日記云討捕頸之注文跡部治部丞有賀備前守笠井笠原以上頸數四十餘究竟之者討捕候

又云信長御馬廻人東ハ美濃三人衆氏家伊賀稻葉諸手一度ニ切加ハリ六月廿八日卯刻已刁ヘ向而被ㇾ蒙ニ御一戰ㇾ御敵アヲ川ヲ越信長之御前ヘサシ掛推ツ返ツ散々入亂ㇾ黑煙立テシノキヲケツリ鍔ヲワリ爰カシコニテ思ヒ々々ノ働有終ニ追崩手前ニヲイテ

討捕頸之注文

眞柄十郎左衛門　前波新八

前波新太郎　小林端周軒

魚住龍門守　黑坂備中守

弓削六郎左衛門　今村掃部介

遠藤喜右衛門尉　淺井雅樂助
淺井齊　狩野次郎左衛門尉
狩野次郎兵衛　細江左馬介
早崎吉兵衛尉
此外宗徒之者千百餘討捕

大友興廢記云（秀吉公立花江被下御感狀條）
去月廿七日對二安國寺一黑田勘解由宮木入道書狀井首注文今日十日披見候今度其表島津相働候處味方之城數二三ヶ所手もろく相果候條其構の儀も無二心許一被二思召一輝元元春隆景其外人數追々指遣候處立花城無二別條一相抱候義さへ對二殿下一忠節無二比類一候奥思給候處去廿四日敵引退候剋足輕相付數多討捕儀手柄の上重て高鳥居東西責破城主星野中務大輔同民部少輔初其外不レ殘數百人討捕頸之注文到來誠粉骨の段不レ及申從是以後之儀は聊卒爾なる働之儀可レ爲二無用一候

又云（秀吉公御感狀之條）此たひ耿原篠原目兩城を落し其首帳宗鱗公之披露を遂その後使者を上せ太閤秀吉公の披露をとく御感狀あり其御書に曰

舊冬十二月於二耿原畑篠原目一兩度遂二一戰一討捕首之注文井書狀披見候云々

書札集云首注文之事
天文二年七月六日申ノ刻於二大山表一討捕首注文之事
首一前河左衛門　（朝日輝正忠手）勝手右衛門尉討二捕之一
首一名字不レ知　（中間）彦六
首一菟上治左衛門　（長尾信濃助手）益田彈正忠討二捕之一
此外討捨不レ知レ數と斗有レ之奥二以上書無レ之年號日付無レ之

蜂須賀家文書云
義元水野十郎左衛門尉江贈書狀云
一昨日（辰刻）次之町朝倉太郎左衛門兎川織田衆上下具足數二万五六千惣手一同至二城下一手遣仕候此方雖二無人候一罷出及二一戰一織田彈正忠手江切懸數剋相戰數百人討捕候頸注文進レ之候此外敗北之軍兵木曾川へ二三千溺候云々

增補家忠日記云慶長五年八月廿九日此日堀尾信濃守氏忠ニ大神君ヨリ御書ヲ給ハル
今度濃州表合戰之刻其家中へ被二計捕一首註文令二披見一誠以心地能儀共ニ候御手柄可レ申樣無レ之候云々
○首帳
甲陽軍鑑云地の侍共又逆儀をもち村上人數を一かしら引出し候へは長坂左衛門日向大和城をあけ小山田備中守跡にをき甲府へ歸る敵右の備中かこもりたる城取まきせむる此一左右を晴信公きこしめし一騎かけのことくになされをかも御旗下にて先懸をあそはして七千あまり之人數をもつて正月晦日癸亥午の剋に敵三百十三討頸帳にをたためさせ勝時を執行其處を堅く手ニ入れ仕置をあそはし二月初に御歸陣あり信州海尻合戰といふは是也

又云わかき武士なとの心たけくしてよきものをうつへきと存人にうちはつる、事もこれあるへく候去程ニ合戰せり合の時何者にても敵ならは先うつへき也惡頸と思はゝ頸帳にのすましきものなり

甲陽軍鑑末書云大合戰ニ首帳ヲ付ルハ次ノ日タルヘシ人人取タル首ニ印札ヲ付置ヘシ

謙信家記云（輝虎公遠中發向條）輝虎自攻鼓ヲ打立懸玉ヘハ敵軍悉ク敗軍シテ同國戸山の城へ引籠ル其日ノセリ合ニ敵ヲ討事上下二千五百餘ノ首帳ヲ以テ其日ノ午ノ下刻ニ勝時ヲ取行

見聞雜錄云秋山か廻し勢の知久監物座光寺か手へ行掛ニり打取殊ニ遠山民部入道をは座光寺勘兵衛直取之首と書記し是より凱歌を揚て引返す武田の作法ニ而追首をは首帳ニ不レ記勝負之場之首四百八十六之首帳にて三月四日の暮程ニ秋山伯耆守甲府へ參着す

北條五代記云片山彌兵衛尉鑓下の一番首にをるす扨又鼻を一つかき首一ッ持來て二ッの首といひ鼻計を一ッ二ッ持來て首帳に付へしといふ者おほし

愚耳舊聽記云（和泉讃岐戰死之條）讃岐首をは十二屋亦五郎是を取貳人の子供のをるしを塗部新七櫻田宇兵衛打取也其外五拾餘人の首帳にて五月五日の申の下刻に勝ときを取おこふひ大浦へ歸陣被レ成ける

大友興廢記云（海賊々討條）天正七年七月廿一日ニ佐伯木立といふ入江に舟をつけ在々をさまたけんとすおりふし栂牟禮の城より出されたる浦めくりの人數出あひ爰かしこのみちをとりきり魁をする屈竟の者ともを廿六人討捕殘る奴原這々の體にて舟をすて荷物をすて谷嶺を越やう〳〵死をのかれ逃延ぬそのとき首帳臼杵へ出さるゝ宗鱗公則御袖判を加らる

判
前廿一到二木立村一賊被二押上一之處ニ連々堅固依レ被二申付一海賊の奴原討捕注文殊に武具以下捨置候趣着到銘々加二披見一訖

首二　泥谷次郎次郎討レ之
首二　泥谷新三郎討レ之
首一　泥谷甚次郎討レ之
首一　吉良舍人助討レ之
首一　泥谷甚九郎討レ之
首二　首藤主水討レ之
首二　高畑次郎左衛門尉討レ之
首一　廣末與三左衛門討レ之

宗鱗公御袖判をくはへ給ふ

判

今度島津中書和訣之使差越之處於二番匠淵一悉討果首帳令二披見一候誠無二之御覺悟感悅之至也則加レ判者也

首一使僧　柴田左近　討レ之
首一　新色三郎　高畑理兵衛尉　討レ之
首一　新色黨　高畑勘左衛門尉　討レ之
首一　汐月兵右衛門尉　討レ之
首一　江口源次郎　討レ之
首一　依レ論討捨
首一　矢野大炊助　討レ之
首一　泥谷左吉　討レ之
首一　同左京進　討レ之
首一　護進寺侍　討レ之
首一　津井太郎左衛門尉　討レ之
首二　泥谷志摩守　討レ之
首一　大刀　討レ之
首一　長慶坊　討レ之
首一　藤左衛門　討レ之
首一　八郎兵衛　討レ之
首一　次郎五郎　討レ之
首一　彌三郎　討レ之
首一　甚四郎　討レ之
首一　五郎三郎　討レ之
首一　與左衛門　討レ之
首一　五郎左衛門　討レ之
首一　右衛門三郎　討レ之
首一　六郎右衛門　討レ之

以上

天正七年七月廿一日

又云翌日首帳認曰杵丹生島へ注進ス

首一　高畑次郎左衛門尉　討レ之

首一　奈須右馬丞　討レ之
首一　泥谷志摩守　討レ之
首一　柏江兵部　討レ之
首一　泥谷左京内侍　討レ之
首一　大刀
首一　彌三郎
首一　河野三左衛門尉　討レ之
首一　汐月小兵衛尉　討レ之

天正十四年十月廿三日

大坂頸帳云

くひ帳

五月七日天王寺表毛利豐前守内高名之衆をつけんの衆

正古人　宮田甚之丞
秀頼様御横目衆　大桑平右衛門殿
正古人　高橋八兵衛　宮田甚之丞
正古人　宮田甚之丞　平島勘兵衛　關右衛門
鐵炮拾丁之頭　長井傳兵衛
正古人　宮田甚之丞　河本民部　長井傳兵衛
鐵炮拾丁之頭　平島勘兵衛

同　大桑平右衛門殿　小原文右衛門　宮田甚之丞
鐵炮拾丁之頭　則庄兵衛
同　大桑平右衛門殿　宮田甚之丞
同　拾丁之頭　万田兵右衛門
同　伏屋半兵衛　永野吉介　宮田甚之丞
同　拾丁之頭　中川右兵衛
同　長井傳兵衛
同　拾丁之頭　中村左膳
同　長井傳兵衛
同　拾丁之頭　岡九左衛門
同貳人御座候ヲ先年相尋申候
同　拾丁之頭　嘉佐市内藏之丞
同　佐野道有　小原文右衛門
ほろ使者　高木左近
正古人　大桑平右衛門殿　宮田甚之丞　平島勘兵衛
河本民部
同　宮田甚之丞　松原角右衛門
同　松原角右衛門　中村惣右衛門
宮田新三郎

同　大桑平右衛門　水野猪右衛門
同　宮田甚之丞　金右衛門　權右衛門
森田嘉平次
同　宮田甚之丞　永野吉介
陸小姓壹人
くひかす拾七也

東遷基業云里見民部ハ物見山ヱ上リ討立たる上泉主水穂村造酒之允椎野彌七郎等其外冑付平首すへて四百八十三首帳ニまたゝめ山形へ送りける

玉露叢云元和元年五月廿三日ニ味方ノ諸將討捕ル首帳上覽アリ

○印帳

甲陽軍鑑云（こあらま合戰之條）晴信公侍大將衆いまた多かけつけさる間ニ旗本にて夜軍にあそはし候へは三八かつもりのことくいかにもやす〳〵と敵敗軍なり但雪深くして味方も自由ならす候故信州衆を討取申其數漸く雑兵ともに百七十二のまるし帳をもつて同子の時勝時をとりおこなひ給ふ

○印目錄

籾井日記云（氷上宗貞合戰條）御本備ニテ討取テ候印トモニハ山口右衛門ヲハ平林大内藏秀識討取ラレ候（中略）コノ外津田平左衛門平松勘兵衛等大分ノ印數ノ候何レモ印目錄ニミヘテ候

○首札

越後軍記云（武虎問殲實檢之法式條）首札ノ事大將ノ首札ハ桑ナリ其外ハ何木ニテモ苦シカラス長サ五寸横二寸是ハ大將分ノ首札ナリ諸士ノ首札ハ四寸ニ横一寸八分歩者素肌者ノ頸ニハ三寸六分ニシテ附ヘシ札ノ頭ハ劒先下ハ片ソキナリ苧縄ニテ附ル

籾井日記云（信長公勢從四口亂入條）大將宗長公一々御覽アラレ小野木左兵衛谷民部ヲ一揆惡黨ノ頭人分トモノ首ヲ百二十餘札タシカニ付テ獄門ニ掛ナラヘ御下知札立ラレテ候

簡禮記云首札ノ事木札也廣サ一寸計長サ四寸四分也但シ依ニ名官一或五寸或六寸ニモスルト云ヘリ札ノ頭ニ緒ヲ付ル也口傳扱可レ書樣ハ一方ニ少ク首ノ名字官途ヲ書多人數ノ時ハ又一方ニ討手ノ名字官ヲ字フトク書討捕也トモ討レ之トモ書續ル者也

和翰集要云

首札書樣事

○首一井川彈三郎　三月五日　川口彌内討取之

○矢文

應仁記云山名ト勝元ハ聟ト舅ノ事ナレハ日頃ノ兩家下々迄モ軒ヲ双ケル處ニ俄ニ隔心シテ塀ヲ間ニ付釘貫ヲサシテソ有ケリ如何ナル者シタリケン金吾方ヘ矢文ヲ射ケルウテナクハヤメヤ山名ノ赤入道手ツメニ成レハ御所ヲ賴ヌ

義秋公方記云八月ノ末ヨリ十月マテ日々ノ合戰ニ國司方ニモ朴木刑部ヲ初數百人打死シテ長籠城ニタスケノ兵モナク退屈シテ見エシカハ此有樣ヲ聞ク柘植三郎左衛門尉木造城ヱ和談アリタキ由ノ矢文ヲ射ル

藤葉榮衰記云上總介會津岩淵ノ大勢引受テハ不レ可レ叶一無ニ私曲一旨ヲ申分テ見ント思ヒ（中略）今度ノ謀叛ニ於テハ全ク以テ不レ與努々不レ存我子綺フ間敷事ニ綺イ身命ヲ失ケレハ全ク御恨無レ之ト數通ノ起請文ヲ書立テ御陣中ヘ矢文ヲ射入

奥羽永慶軍記云（佐竹與伊達安積合戰條）伊達ノ陣ヨリ佐竹ノ番手會津ノ平田左京亮陣ヘ箭文ヲ射タリ其文ノ上書平田殿マイル遠藤駿河トアレハ左京亮是ヲ不レ披シテ大將ノ前ニ持出ル盛重是ヲ取テ父義重ノ前ニ出ソコニテ是ヲ披見給ヘハ

先年爲ニ御使一若松參候剋別而御悃意不レ淺存候其後何角打過御弓箭ニ罷成不レ得ニ御意一今日相近罷有候ヘトモ御世上柄故不レ懸ニ御目一御床舗候窪田矢羅井ノ番ニ成實小十郎參リ候所ニ御旗見知如レ此申候願者御和睦ノ上遂ニ貴意一度存候恐惶謹言

七月三日　（伊達成實内）遠藤駿河

平田殿

參人々御中

義重見給テ紙上異事ナシ急キ返書ヲナセト宣ヘハ畏リ候トテ卽書ス

此地我等番手ニ居陣之處ニ旗ヲ御見知御書辱存候如レ仰御弓箭ニ付良久不レ懸ニ御目一候阿波守殿片倉殿目近其手ノ御番ニ付貴殿被ニ相勤一之由御太儀ニ令レ存候萬端面上ニ申談度御願ノ通ニ候恐々謹言

七月三日　平田左京

遠藤駿州殿

御報

箭ニ結付人ヲ招テ遠藤カ陣屋ニソ射返シケリ其時會津長

沼ノ城主新國上總介申ケルハ此番或ハ伊達阿波守片倉小十郎トナレハ此兩人カ軍慮ニテ平田左京コソ伊達方ニ內通アリト云センタメ箭文ヲ射候事モ可レ有レ之候ト申シケリ

東遷基業云伏見の城には長束大藏少輔政宗か軍勢の中に浮貝藤助と云者あり彼は松の丸に籠りし甲賀の者之一類なりしか秀家卿の下知を蒙りて松の丸へ矢文を以ていひ遣しけるは面々當城に籠りて在に依て故郷に置たる妻子を搦とり水口に於て磔に掛へしと長束大藏少輔の催あり若反忠をなして其郭を燒立るならは妻子の命を助らるゝのみならす面々御恩賞あるへしとなりそのこゝろ得ありて急き兎角の御請申へきよし也

大友記云（觀造寺山城守謀叛之條）隆信此文ヲ見テ思慮深キ名人ナレハ是ハ敵タハカリ某ニ誠トオモハセカレラ三人ヲ討モ味方ニ事オコルツイテニノリセメントノ謀ナリ加様ノ矢文ヲマコトニセヌ者ナリトテ大キニ怒リ引破リテ捨ラル

大友興廢記云（矢文の條）或時城中より五月雨にさそもの、くもかひ候はんと思ひやり笑止に候とかきて一首の狂歌を矢文にこめて送る

五月待はなたち花の城せめは

くさるよろひの袖のかそする

中國陣より返し

やかて落城のなけき思ひやられていたはしく候

命思ふ人は矢倉の夜の雨に

なみたをそゆる山城のうち

北畠景憲家譜云古田織部は大坂城內扱に不レ成以前も御方之事書立度々矢文を射申候逆人也依レ之左馬介に修理主馬心を免し此無事は全僞也

見聞雜錄云それより取て返し淀城岩成主税介番頭大炊介諏訪飛驒守大將にて弐千餘人究竟の者共籠城せしを信長一揉に揉潰せと有しを細川兵部大輔藤孝諫められけるは當城中の士卒は五畿內の英卒數を盡して罷在候へは御勢若干討死有へし二三日の間御猶豫有は相計見可レ申と被レ申故然は木下藤吉と相談有て宜レ被レ計と有レ之に付藤孝と秀吉と相談して城中へ矢文を被二射入一たり元來番頭諏訪兩人は藤孝歌學の門人也し故早く信長へ降參致し岩成か跡を可レ被二申受一との內意有ニ付早速右之兩人內通して時日を定申越けるは云々

從二今川殿御陣下一吉郎殿江

御矢文（雷齋內書之）

去丙午年當國征伐以來御屋形樣御事可レ被レ成二御見除一之由被二申入一候子細者義元依レ爲二御家之末葉一御屋形樣御事大切存故候義元十代先祖國氏者御屋形樣十二代曩祖新御堂殿長氏爲二其二男一吉良之庄內今川縣依レ讓給レ之號二今川一從二八幡殿一御相傳與州貞任御追伐之時御隨身候龍目貫御腰物依レ讓給レ之代々今川嫡子小字號二龍王丸一國氏孫範國相二當于尊氏將軍天下御政務之時一駿河遠江尾張半國但馬國因幡等數國配領至二于今一者駿遠二ヶ國相續偏御家相傳之由來異二于他一候之處義元數代之大敵與二武衛一被レ結二御緣嫁一剩去頃爲レ可レ相二助竹千代一被二出陣一渡二筒針一發向之刻御人數被レ移二安土城一其後中島奪捕之時至二半途一被レ出二御馬一候事畢竟義元可レ有二御退治一御造意何故候哉此恨不レ淺之上者縱雖レ成二御家督之競望一不レ可レ及二他之褒貶一者哉新御堂殿十一代末孫國氏一流之外此儀更不レ可レ有二異論一歟雖レ然聊於二非義一者義元不レ可レ及二其企一今度御屋形樣御行跡定不レ可レ出二御心中一御外戚後藤平太夫可レ爲二奸謀一所詮此時諸老有二評儀一急之被レ誅二戮彼惡徒一今年非法之所行早可レ被レ渡其一儀事義元所レ希也此等之申狀無二御許容一之處再三申入事雖二强顏之至一候一數代御好一時可二失却一者悲歎有レ餘事候之條不レ顧二斟酌一頻可二言上一之旨依レ被二申含一奉二啓達一候以二御心得一各執御申可レ爲二本望一候恐々謹言

九月五日　駿遠軍中衆訴狀

謹上西條諸老御中

增補筒井家記云斯テ寄手攻他ヲ見ヘシカハ順慶或夜松倉蘆尾小田切小和泉井土氏等ヲ聚メ（信貴山）我當城ノ爲先陣日數ヲ送ル事信長公ニ對シ不忠ト云且勇謀ノ怯キ也如何ニモシテ城ヲ責落謀事アラハ各可レ被レ申ト有ケレハ麾下ノ諸將相共ニ松倉右近方ヨリ森傳助好久カ方ヘ矢狀ヲ通シテ其返簡ヲ待居タリ

當代記云慶長十九年十二月十四日卯辰ノ刻ヨリ又雨晩ヨリ風烈寒事甚藤堂和泉守ヲ敵味方惡レ之歟色々ノ惡口シ或時ハ呼或時ハ矢文ヲ射ケル件ノ矢文余ノ陣ヘ來トモ藤堂陣ヘ送レ之ト云々

○謀書

安土日記云天正七年七月十九日井戸齋介御生害子細は妻子ヲモ安土ヘ越不レ申不斷安土ニハ無レ之無二奉公一候其上先年モ致二謀書一深尾和泉ヲサヽヘ申候

大友興廢記云（田北紹鐵謀叛條）紹鐵ハ筑前國秋月種實と同意して惡逆をくはたつるとり〳〵沙汰しけれと義統公御せんさくもとけられすた、横目物き、にうちまかせらる、しかるところに何者かゑたりけん又謀書やらん紹鐵と秋月と内談の謀書をひろひたるとて老中に披露すこの事ゑかるへからすとて御耳にたてらる、

増補家忠日記云慶長五年八月六日羽柴肥前守利長大聖寺ノ城ヲ攻落シテ後進テ加賀越前ノ境細呂木ニ至ル然ル處ニ利長カ緣者中川宗伴ト云者有大坂ヨリ加州ニ下ラント欲スル處ヲ大谷吉継是ヲ敦賀ニ押留利長カ許ヘ一通ノ計狀ヲ書シム上方一同ニ蜂起シテ敦賀ヨリ軍船數千艘ニ取乘リ近日加州ニ亂入ス其慮可レ有ノ由ヲ令レ書宗伴カ士一人ニ此書ヲ持セ刑部少ク軍士ヲ少々是ニ相副テ遣ス是ハ宗伴カ士ヲ途中ニシテ殺害センカ爲也此謀書ヲ細呂木ニ至テ持來ス利長披見シテ細呂木ヲ發シテ兵ヲ金澤ニ收ント欲ス云々

○落書

太平記云（櫛出張天王寺條）何者カ仕タリケン六條河原ニ高札ヲ立テ一首ノ歌ヲソ書タリケル

渡邊ノ水イカ計早ケレハ高橋落テ隅田流ルラン

京童ノ僻ナレハ此落書ヲ歌ニ作テ歌ヒ或語傳テ笑ヒケル間隅田高橋面目ヲ失ヒ且クハ出仕ヲ逗メ虛病シテソ居タリケル

臥雲日件錄云享德四年正月六日竺雲來茶話次及二天下政事一雲曰世有三三魔之說一俗所レ謂落書者也云々

籾井日記云（栗田口貴合戰條）其時分東寺ニ簡板立テ落書致シ候方々ニモヲカシキ詞カキ致シ候ト風說ニテ色々ノコト申候云云

愚耳舊聽記云（波岡貴之條）其頃波岡の城下の町に立たる落書とて

矢はうつほかたなはさやにおさまりて
弓矢は更に波岡之御所

武家名目抄稿第百七十二册

塙檢校保己一編

文書部十五

○高札

建武式目追加云

撰錢事

近年令レ超二過先規一之條爲レ世爲レ人不レ可レ不レ誡所詮於二古今渡唐錢一者悉以可レ取二用之一次惡錢賣買儀停止事被レ定二御法一被レ打二高札於洛中一訖可レ令レ存之由被二仰出一也

簡禮記云高札之法式板之事制札同前ナリ是モ條數多キ時ハ横板ニ調レ之者也書式寸法ノ事同二制札一假令横板ニテモ彼寸法ニテ書レ之ナリ幾行モアレ中高ニ書コト故實ナリ條數ノ事三ケ條ヲ本トス附書ハ中ノ條ニ附レ之者也若五ケ條モ七ケ條モ條數アラハ法ノ外ト知ルヘシタトヘ幾條アルトモ先初メニ定ト書賣買物ニ付テ可レ致二沙汰一趣善惡ヲ取交テ書タルヲ高札ト云ナリ大形市町ニ立レ之者也條數ハ幾數ニテモ半ニ書ヘシ文言假令ハ

一喧嘩口論堅被二停止一訖有二違背一族者不レ謂二理非一双方可レ爲二斬罪一若於二荷擔人有レ之者本人同罪事

一不レ可レ有二押買狼藉事一

一洛中火事出來之時町人は見聞次第可レ令二參出一也至二火取近邊一奉公人奉行人之外不レ依レ仁不肖一切停止自然違背之輩は可レ爲二越度一事

右之條々被レ定二置之一訖若有二違犯族一者可レ被レ處二嚴科一旨依レ仰執達如レ件

文安二年四月日　伊勢守藤原判

右是ハ公儀ヲ請テ書出ス體也私ニ書出ス時ハ被ノ字書留以下替ルヘシ其外年號在判所等ニ至ルマテ制札ト同意得ナリ

蜷川親俊記云天文八年七月廿三日戊午細川殿より茨木爲二御使一除二洛中一洛外西岡向はかり德政可レ遣候由貴殿へ御案内則御披露江州有二御談合一御返事可レ在之由候茨木伊賀德政高札不案内條懇望旨大かた申二遣之一

甲亂記云（小山田出羽守心替條）又去二月諏訪ニ御在陣之砌（中略）又如何ナル者カ仕タリケン跡部尾張守ノ陣屋ノ前ニ高札ヲ立定

テ無常ヤナ國ヲ寂滅スルコトハ越後ノ金ノ所行ナリケリ
イトイコシイモセアフ夜ノ中ナラテ國ニ別ノ鐘ノ音ソウ
キ金故ニ眞黄ニ恥ヲ大炊助尻ヲスヘテモ跡部成リケリ如
レ此上下方人此亂逆ハ只一兩人重欲ノ深キ故也ト各批判
ス

和翰集要云高札事

定

一京中地子錢永代令二赦免一畢若從二公家一寺社方地子錢ニ
内收納有來分は相計以二替地一可レ致二沙汰一事
一諸役免除事
一鰥寡孤獨者見計扶持方可レ令二下行一事
一天下一號取之者何之道にても大切なる事也但京中諸名
人として有二内評議一可二相定一事
一儒道之學に心を碎國家をたゝさんと深く志を勵者或忠
孝烈之者尤大切なる事候之條下行等他に異にて可二相
計一又其器之廣狹能尋問可二告知一事
右條々相計可二申付一者也

元龜四年七月日　信長

村井長門守

清正記云五月十六日清正もなへしまも諸勢ともにあんへ
んを立三日行長橋と云ふ處に着陣すしかる處に金官とい
ふ朝鮮人高札をたておく意趣は帝王李昭は大明國へ御退
出王子御兄弟ともにこれよりおくへ御通りあるよし委細
に書す

書禮袖珍寶云制高札半俗判形事タトヘハ

年號月日依二位尸一書也勿論也尸書シ時ハ前出羽守藏原判と如レ此書也

前出羽守沙彌判

多聞院日記云天正十四年三月三日今般大坂并京邊千人切
興行五六十人も既に切金子廿枚ノ高札ニ被二打置一町奉行
曲事トテ令二返失一之處令二才學一處大名衆究竟ノ仁共七人
搦取今日於二住吉表一生害依レ之鹽干ノ神事モ無レ之云々
按、高札とは法度掟等の事をしるして人の見やすから
んやうに高く建るか故の名なり板は竪にもし横にもし
て大さは條數の多少文言の長短によりて定れる方なし
制札といふも此高札のことなれと禁制禁斷の事のみし
るしたるに限りていふ高札はすへてに渉りていふ名目
なり

○大札

太平記云小山田太郎高家刈青麥條去年義貞西國ノ打手ヲ承リテ播磨ニ
下着シ給フ時兵多クシテ粮乏シ若シ軍ニ法ヲ置スハ諸卒
ノ狼藉不レ可レ絶トテ一粒ヲモ刈採民屋ノ一ヲモ追捕シタ
ランスル者ヲハ速ニ可レ被レ誅之由ヲ大札ニ書テ道ノ辻々
ニソ被レ立ケル
按、大札といふも亦前條ノ高札なり諸卒忿劇の際目の
屬きやすからんか爲めに普通より大やかにしたりし故
にかくいへるなるへし

○制札

大塔軍記云去程に小笠原信濃守打入寺家成二安堵思一則
定二奉行人一大犯三ヶ條立二押買狼藉闌遏早馬等制札を一
任二傍例一令レ遣二行諸人沙汰一也
建内記云正長二年七月六日奉行人飯尾肥前守爲種爲二御
使一入來謁見制札姓尸間事有下被二尋下一之旨上奉行人古來
書二制札一之時依レ仰下知如レ件書レ之次行二年號月日書
レ之次行二官姓尸判載一之五位六位共以如レ此規式也而勝
定院殿義持近年仰由載レ尸之條限二四品人一歟奉行人等書二載
之一不レ叶二道理一可レ略之由有仰近年不レ載之頗背二先例稱
某朝臣一之條四品人事歟若思食過哉然而不レ及レ申二直之一
仍當御代名可レ被レ任二先規一哉由奉行等申二管領一之處可二
披露一之由被レ申之間今日爲種伺二申之一處可否面々可二尋
申一由有レ仰一帋可二注獻一云々後日一帋注二愚意一付二爲種一
了六位外記成上宣旨時略申歟事相尋常定之處先規略レ尸
云々久安案文寫二送之一五位外記必載レ尸也紀錄所文殿勘
文五位以上載レ尸六位略レ尸案文等一見了
季瓊日錄云永享十一年六月廿日觀音像被レ命二大佛師一乃
立像賜二靈鷲寺一以二山中制札一云々
書札集云制札禁制書之事條々付陳中常式可二相替一候哉認
樣さまゝ有レ之事にて候主人袖判之時は執達如レ件不
レ可レ有レ之候尤依レ仰如レ件と可レ被レ書下知如レ件執達如レ件
は普通之儀也又丹波守平朝臣又は大和守三善朝臣なと、
書く事六位の身にて書間敷候歟

禁制　南禪寺　付諸塔頭

右軍勢甲乙人等寄宿事一切被停
止了若有令違犯輩者速可被處嚴
科之由所被仰下也仍下知如件

延德二年六月二日

前丹波守平朝臣
近江守三善朝臣

か樣ニ日
ノハ通日領官
字ツチセニ途
レノ奥テテ書
下ノヘ受モテ判
ノ日ニ官ニ
モ書テ
チ
ス
ベテ
シ

如ノ此一ケ條ノ時ハ一文字無ノ之公方奉行書出には所ノ被ニ仰下一也仍下知如ノ件と留ル其國ノ守護ノ制札ニハ可ノ被ニ罪科一者也仍下知如ノ件と留ル也

禁制　吉田社境内
一甲乙人濫妨狼藉事
一喧嘩之事
一伐採竹木事
右條々任社例堅被停止訖若有違犯之輩者速可被處嚴科者也仍下知如件
文明二年八月三日　大和守
（沙彌入道之時は如此）

此名日付より奥たるべし

か様に禁制ノ禁ノ字ノ頭と一文字と右と云字ノかしらと何も同しとをり也

從ニ寺家一依ニ懸望一自然從ニ管領一被ノ出候事も候被ノ調樣猶以可ノ有ノ之仍板ノ寸方不ニ相定一依ニ條數一大小あるへき也板は檜木可ノ然也常に立板にするなり

禁制
一當手軍勢甲乙人等狼藉之事
一於當寺伐取竹木事
一寄宿事
右條々堅令停止訖若有違犯輩者可處嚴科者也仍下知如件
永正二年三月五日
右京大夫源朝臣在判

掟
一押買狼藉之事
一國質取質之事
一喧嘩口論之事
右條々堅令停止訖諸商人此等旨於當市ニ可致賣買若至違犯之輩者可加成敗者也所定置如件
永正七年二月廿日　左衛門尉在判
近江守同
若狭守同

在々所々市町之掟大槩如ノ此條數之段者可ニ相替一

和論集要云

一制札事

禁制　清水寺

一寺内坊舍押而令寄宿事
一於山林剪採竹木事
附刈草事
一至寺中殺生事
附指鳥括犬事
右條々堅被停止之訖若有違背之族者速可被處嚴科之由所被仰下也仍下知如件
永正十五年八月十六日
美濃守藤原朝臣判
上野介藤原朝臣判

建武式目追加云

定德政事（政所方德政時制札案文）
一ケンフノタグイ（絹布類）エサン（繪讃）ノ物諸藉ノタグヒ（樂器）ガツキノ具足カグ（盆）ザウク（香合）等（碗）置月ノ外十二ケ月タルヘキ事（瓶）
一ボンカウ（盆）バコ（香合）茶ワン（碗）花ヒン（瓶）カウロカナ物已下廿ケ月タルヘキ事（付アケノタグヒ廿四ケ月事）
一米コク（穀）並ザコク（雜穀）等七ケ月タルヘキ事
右條々任ニ先例一サダメヲカル、トコロナリシヨ（所）セン（定）十分一ヲサタセシメ以ノ女白畫トルベシ若コノヤク（約）月ヲハセスギバナカレ質タルベキ上者德政ノサタニヲヨブヘカラス（及ノ）万一寄ニ事於左右一カウ（取）〳〵ノ儀ニヲヨハ、ヲキテ（置人）トイヒトリテ（取人）トイヒ共ニ以ザイクワニショセラルベシ此外ノ借錢以下ノ事相互令ニ注進一御下知ヲモツテ其沙汰アルベキノ由所ノ被ニ仰下一也仍下知如ノ件
永正十七年二月十二日
丹後守平朝臣
上總介藤原朝臣

新田由良家傳記云（藤生紀伊守官上之條）万端御家中の御法度書所々制札以下御改被ニ仰付一其役人衆無ニ油斷一樣于可ノ被ニ仰付一候

室町殿物語云諸國就ニ忿劇一公方役地子役かつてすゝむるにあたはす催促きひしといへとも大方質物に拂底しけれは詮方なくて上下京一同に撿斷所訴訟を上る云々卽老中披見有ノ之被ノ達ニ上聞一ける公方つく〳〵御覽して翌日人々を召て仰られけるは常德院法住院の例にまかせて急き

德政を行ひ貧窮を甘せよと仰付られければ人々承はつて即評定所にて案文をかゝれける新規にもあらす大かた先法のことし

德政　城州

一借錢米之事

一於二武具之類一は　廿四ヶ月

一絹布之類は　十二ヶ月

一佛具繪賛之物家器之類は　十二ヶ月

一家質縦沽券に仕り證文正敷言有レ之於二加レ利辨一者可レ爲二借錢同前一事

右五箇條本銀之十分一ヲ以白畫にとり可レ申候若違犯族於有レ之者曲事たるへきの由被二仰出一候仍下知如レ件

天文九年三月日　光俊在判

貞長

長喬

澤巽阿彌覺書云

定德政事

一けんふのるいゐさんの物しよしやくかつきのくそくかくさうく等をき月の外十二ヶ月たるへき事

一かうせんたりといふとも利平くはへゆくへし

但伊勢講はゆくへからさる事

一ほんかうはこ茶わん花ひんかうろのかな物以下廿ヶ月たるへき事付ふくのたくひ廿四ヶ月の事

一米こくならひにさこく等七ヶ月たるへき事

一あつかり狀たりといふとも文言のさたりひうのうけ取等によりてゆくへき事

右條々さため置るゝ所也所詮十分一をさたしはく中におんひんにとるへしかう々々の儀に及はゝをきてといひとりてといひ可レ被レ處二嚴科一者也仍如レ件

永祿五年三月十八日　左衛門尉在判

沙彌定秀在判

甲陽軍鑑云於陣取制札

一火事は其陣之内にて鬮をとらせ成敗之事

一牛馬取はなし候は夫馬は見出し候者とる乘馬は過錢三百疋上樣厩乘とる事

一喧嘩は兩方共に成敗但穿鑿の沙汰有て道理非を分坂をこさすへき事

一不淨これあらは繩を張其陣の近き處より過錢五十文是も新乘とる事

一高聲こうた大酒無用之事

右之札は武者其奉行より書いたすにより加藤駿河守かねて是をたつる駿河守死去の後大剛の衆も皆侍大將足輕大將なる故御旗奉行より是を立る

信長記云芥川等城開退條柴田修理亮坂井右近將監森三左衛門尉蜂屋兵庫頭彼等四人ニ被二仰付一ケレハ則制札ヲソ出シケル

禁制

一當手之軍勢亂妨狼藉事

一猥山林竹木伐採之事

一押買押賣并追立夫等之事

右條々於二違背之輩一者速可レ被レ處二嚴科一者也仍如レ件

文祿十一年十月十二日

紀州發向記云高野山金剛峰寺是先終無レ背二上意一不レ忘二柔和之姿一專眞言大事之條尤神妙也殊彼山者誠無比之靈地弘法大師遺跡而諸人所二歸依一也異朝敬レ之故以二制札一寺領全無二相違一者也

松隣夜話云天正四年八月謙信公御馬ヲ被レ出上州和田ノ城ヲ乘取和久村里ノ制札等被二仰付一前橋ニ二日逗留座ス」

松原自休手錄云十九日公至二草津ノ驛一日有二勅使一公家僧徒洛人來テ賀ス同日命二福嶋池田淺野一制策ヲ立二洛中及諸所一

書簡故實云制札之事下知如レ件とは理運之文言也其國之守護代奉行迄は可レ有レ之歟其外は依レ狀如レ件執達如レ件なと、書也但私領等にて他人のは、かりをおもはぬ所ならは何と認ても不レ苦候也先軍陣なとにて必制札を所望する也然は慥在所之樣體を尋極て制札之文言に心得へし貴人なとの御領中ならは文章に用心も可レ有レ之也

禁制

一盜賊狼藉事

一放火人之事

一博奕之事

右條々堅令二停止一者也仍如レ件

年號月日　名乘判

右ハ守護代制札也

禁制　安國寺

一甲乙人等亂入之事

一諸人押而居住之事

一伐採竹木之事

右條々若於レ在二違犯族一者可レ被レ處二嚴科一之由候也仍下知如レ件

年號月日　　山城守平朝臣判

右かやうの制札に名乘はかゝす官受領に判形可レ有無官之人は此に名乘可レ有レ之禁制と年號同通也

禁制

一軍勢甲乙人濫妨狼藉之事

一陣取付放火之事

一相二懸兵粮已下一之事

右條々堅令二停止一訖若有二違犯之輩一者可レ被レ處二嚴科一也仍下知如レ件

年號月日　　官途判

右大將數多之時自分之制札ならは當手軍勢と可レ書也其時は直判なるへし

きんせん　　たらいち場

一をしかひの事

一ようきやくせいせんの事

一こうろんの事

一かたきうちの事

一たうそくをかたしをく事

右てう〳〵一事たりといふともいはいのともからあらはかたくせいくわせらるへき者也仍下知如レ件

天正八年五月日　　左衛門大夫藤原在判　　攝津守源朝臣在判

凡此趣なり朝臣書こと奥にかく也平人をは官受領はかりにて可レ有二判形一但氏は相調たるかよき也何も右の如し日の下をは大方筆者之役と可二心得一何も條々口傳有レ之惣別かやうの制札には名乘をは不レ書して官より氏を書て可レ有二判形一所に依てかやうにかなに書事も一ッの故實也

定

一盜賊人之事

一放火人之事

一喧嘩口論之事

右彼條々於レ有二注進一者可レ被レ加二恩賞一者也仍下知如レ件

年號月日　　三郎　二郎　一郎

右は横板條々多可レ書ため也常の掟是也候と云字は不レ書也

清正記云秀吉公よりくたし給ふ制札に云

禁制　　高麗國

一軍勢甲乙人等亂妨狼藉之事

一放火事

一對二地下百姓等一非分之儀申懸事

右條々堅令レ停二止之一訖若違犯之輩有レ之一者速可レ被レ處二嚴科一者也

天正廿年正月　　御朱印

丹州菅札式云御制札ナトハ板ニテハナシ鳥子ヲ四半ニ切テ調レ之

懐中記云慶長十九年甲寅十一月廿七日松平陸奥守蒙レ命向ト鐘木橋與二船場今宮一間上當二坤方一淺野但馬守備後陣夜中竊取二船場制札一獻レ公

簡禮記云制札之法式條數ノ事三ケ條ヲ本式トス但附書ハ各別也依レ事五ケ條七ケ條ニ調ルコトハ法ノ外也縱幾ケ條ニテモアレ初ニ禁制トアリテ條數ノ文言一圓ニ停止ノ事ノミ書タル札ヲ制札ト云也

又云假名ニ調ル制札ノ事所ニヨリテ用レ之句ノ不レ續樣ニ書ヘシ濁ル所ニハ濁ヲ付ル事モ可レ有レ之書留年號月日官途氏ナトハ眞名ニ書者ナリ

按、制札といふも亦高札なり專制禁の事のみしるしたるを制札といふ

○下知札

籾井日記云信長公勢從西口亂入條大將宗長一々御覽アラレ小野木左兵衞谷民部ヲ始トシテ一揆惡黨ノ頭人分トモノ首ヲ百二十餘首札タシカニ付テ獄門ニ掛ナラヘ御下知札立ラレテ候

○訴人引出物札

菅禮袖珍寶云訴人引出物札事

當月七日之夜於二粟田口一大俣左衞門佐下代斬殺畢たとへ同類たりといふとも當奉行人之內ゟひそかに本人の在所申知らせはひき出物として此黃金五十兩そのさにおゐて下しをきそのさいを御しやめん有て奉公人にかきらす諸家の普代そうてんのひくわんたりといふとも彼もの存分にまかせ望の在所へおくりとゝけ可レ申之由被二仰出一也此儀毛頭相違なし以來此條に罷出間敷者也仍執達如レ件

永正元年九月日　　伊勢守判　　上野介判

○下馬板

○下馬札

○二字札

季瑾日錄云寛正二年六月廿二日門前馬台前下馬板自二鹿苑院龍岡和尚一使三集箙首坐書二下馬六字一重掲二示之一可レ謂二萬代模範一也

書札袖珍寶云下馬を書札にては下馬札とは不レ申也二字札と申なり

○宿札

太平記云山徒寄京都條大乘斯ルヘシトハ思モヨラス我前ニ京ヘ入テヨカランスル宿ヲモ取財寶ヲモ官領セント志テ宿札共ヲ面々ニ二三十ツヽ持セテ先法勝寺ヘソ集リケル

見聞雜錄云信長より御近迎として不破河内守内藤勝助菅谷九右衛門一千餘人引具して藤川迄罷出立政寺へ奉レ入是迄御馳走人罷出御座を調此處を御休息所と奉レ仰御供之人々旅宿百姓之家々へ宿札打云々

續撰清正記云左右之備は大小姓組と云か六組あり一組に一人宛有て三組宛左右へ分て備たる也小姓之外弓鐵砲頭左右へ其時に當りて加りけり跡備ハ常に定たる頭なし其時に當て云付給也組はつれの者とも又は牢人分の者ともか跡備はいたしたり常之旅行の時は宿札も右次第也

武陰叢話云大坂冬御陣に蜂須賀阿波守至鎮陣へ塙團右衛門夜討を致云々團右衛門宿陣は今橋の詰より二十間はかり南也巾一尺長二尺計の札に塙團右衛門と大文字に書て宿札を打皆々見て扨も大成宿札哉と云團右衛門か曰右主加藤左馬介我等を成敗仕度といはるゝを聞て討手を請んために角のことしと笑ふ

和翰集要云

宿札事

伊勢下野守宿

御弓衆宿

守山郷中當月廿七日之晚細川陸奥守渡宿

同下宿

三月十九日

三月廿七日晚堀紀伊守泊

堀紀伊守内

嘉多川彌内下宿

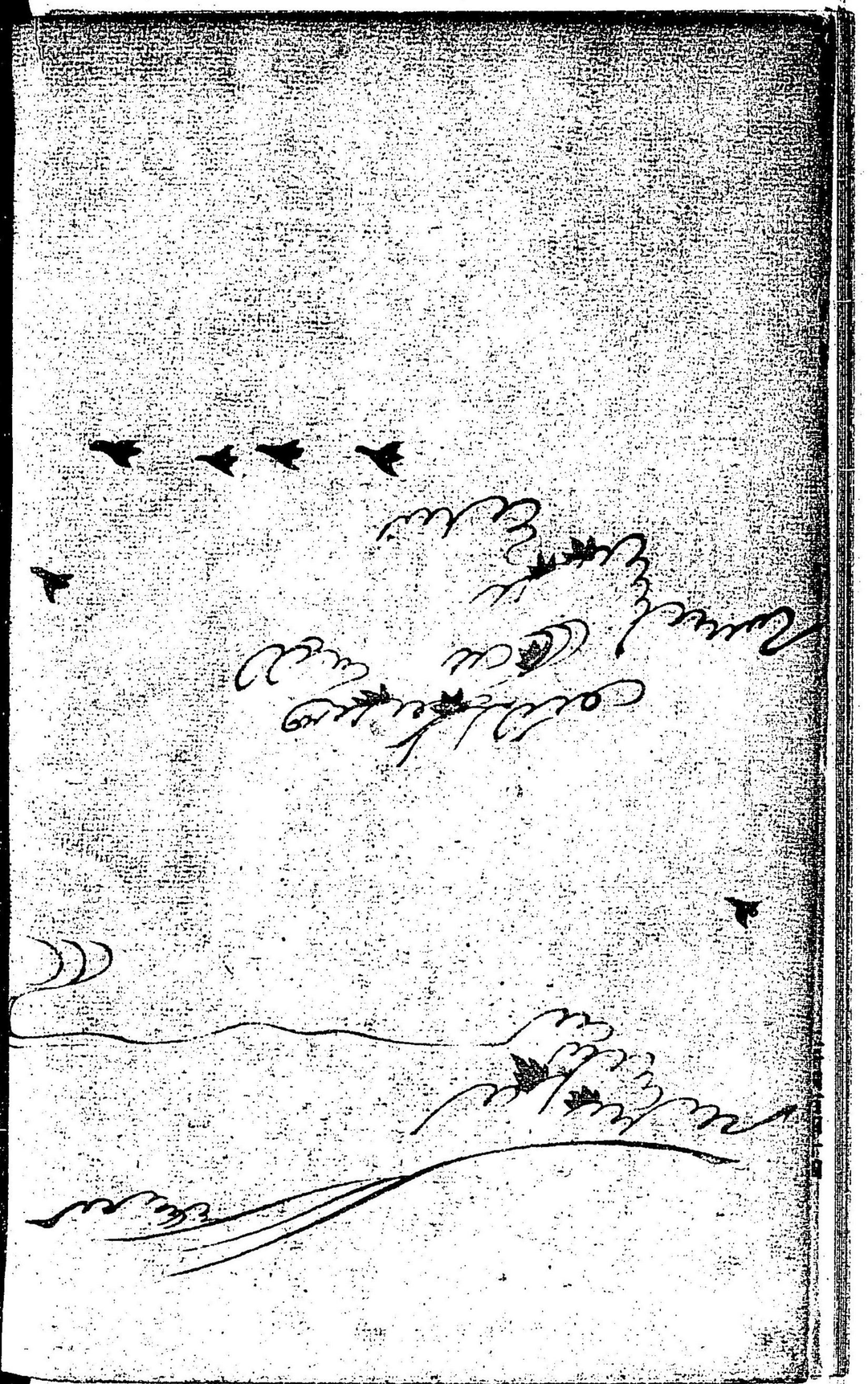
堀紀伊守

歩之者下宿

堀紀伊守

以下欠

192
55



故宮武家名目抄　文書

13
55